

— 小さな半島で始まった まちづくりの試行錯誤の軌跡 —

# 佐世保市俵ヶ浦半島 まちづくり挑戦物語

一般社団法人 チーム俵



全国は地方創生ブームに湧いています。古民家を活用した飲食店やゲストハウス、地元の食材を使った特産品・お土産品、地域の魅力を面白おかしく紹介するプロモーション動画、子育て世代やフリーランスを我が町に住んでもらうための熾烈な移住合戦：地域の個性を競うかのように、地域独自のユニークな取り組みが生まれてきています。地方創生に関する書籍も数多く出版され、多くのメディアに地方創生や取り組み地域が紹介されることによって、地方創生がより身近なテーマになっています。

この冊子で紹介する長崎県佐世保市俵ヶ浦半島の取り組みも、同じように地域住民が主体となり、地域の資源に磨きをかけて、新たな経済や交流を生み出すことを目的として始まったものです。特徴的だったのは、「観光トレイルコースづくり」という具体的なプロジェクトがきっかけになったこと、いわゆる「よそ者」が俵ヶ浦半島の景観や可能性に惚れ込んで地域住民に働きかけたことでした。

地域住民の誰かに「なんとかしらない」という強い危機感やまちづくりに対する使命感があったわけではありません。なんとなくふわっと課題を感じているところから、地域住民とまさに0から向き合い、時には叱咤激励し、時には夜中まで議論し、試行錯誤を繰り返しながらスタートさせたまちづくりの挑戦です。

トレイルコースづくりで3年間、未来計画づくりで1年間、佐世保市の重点支援のもとで取り組んだ活性化プロジェクトがスタートして3年間、計7年間のまちづくりの軌跡。20年、30年いや50年かけてやっと花開いたまちづくりの先進事例に比べると、まだまだひよっこです。でも、まちづくりの土壌がしっかり整備されていないところから、俵ヶ浦半島という地域の現場で0から考え、一喜一憂した経験は、世に数多く出版されている書籍では受け取ることのできない。リアルで血の通ったメッセージになると、まちづくりの軌跡を記録として残すことにしました。

表面的な良いところだけを紹介するのはやめよう。最初にどんな計画をして、結果が出たこと失敗したこと、それを糧にどう改善して行ったか。むしろうまくいかなかったこと、その失敗をどう次に生かしたかの方が大切で、そこを含めて赤裸々に描いています。俵ヶ浦半島でのまちづくりの挑戦はまだまだ続いています。挑戦の記録が少しでも役に立てるなら幸いです。

はじめに	2
第1章 半農半漁の暮らしが残る俵ヶ浦半島	8
1-1 俵ヶ浦半島で育まれた地域資源・魅力	10
1-2 先輩たちが培ってきたまちづくりの礎	22
第2章 俵ヶ浦半島活性化のはじまり	28
2-1 すべてはトレイルコースづくりから	30
2-2 俵ヶ浦半島が抱える課題	38
2-3 俵ヶ浦半島未来計画の作成へ	42
第3章 俵ヶ浦半島活性化プロジェクトの推進	58
3-1 3年間の俵ヶ浦半島活性化プロジェクトの全体像	60
インタビュー 計画を実行する上で大切なことは何ですか？	66
3-2 「半島キッチンツッテホッテ」のオープン	74
3-3 ハーブプロジェクト	80
3-4 食の商品開発プロジェクト	88
3-5 トレイルプロジェクト	92
3-6 展海峰ウォーキングイベントの継続	98
3-7 俵ヶ浦半島廃校活用計画の検討	102
3-8 半島のファンづくり・事業化プロジェクト	106
インタビュー 生業と地域貢献のバランスはとれていますか？	114
3-9 空き家活用プロジェクト	122
3-10 魅力発信プロジェクト	130
3-11 地元ニーズから生まれたツッテホッテ酒場	134
インタビュー どうやって地域の人を巻き込んでいますか？	136
第4章 これまでの取り組みを振り返って	146
4-1 取り組みの成果と反省点の検証	149
4-2 これからのまちづくりに向けたポイント	156
インタビュー 俵ヶ浦半島の未来に必要なことって何ですか？	160
第5章 俵ヶ浦半島活性化を実現する今後の展開	170



# 第 1 章

## 半農半漁の暮らしが残る 俵ヶ浦半島

## 市街地に程近いユートピア、俵ヶ浦半島。

佐世保の市街地から車でおよそ15分。多くの船が行き交う佐世保湾と小さな小島が浮かぶ九十九島に抱かれた、南北に約10kmの半島が俵ヶ浦半島。俵ヶ浦町、野崎町、庵浦町、下船越町の4町から構成されるこの半島には、佐世保らしさがたくさん詰まっています。

俵ヶ浦半島の西岸には、西海国立公園「九十九島」の島々を抱くように、複雑に入り組んだ海岸線が連なります。季節ごとに、日差しによって刻々とその表情を変え、まさに風光明媚と呼べる絶景の半島。波穏やかな海は無数の生き物の住処であり、豊かな海の恵みをもたらし、中でも濃厚な九十九島牡蠣は絶品です。

東に目を向けると、懐深い天然の良港「佐世保港」が見えます。1889年に旧日本海軍の軍港として開港し、現在は米海軍基地と海上自衛隊の施設が点在します。中世に住みついた人々の、脈々と続く穏やかな暮らしの場には、神社や御観音さまが大切に守られ、森の中には明治期に築かれた旧日本陸軍の砲台や観測所などの近代化遺産が眠ります。九十九島の大自然と、海の歴史に彩られた半島を歩くと、凝縮した日本の歴史物語が紐解かれていきます。まさに「佐世保のルーツ」とも呼べる、佐世保の歴史とイマを感じられる半島です。

いくつものビューポイントや懐かしい暮らしの風景、時代を物語る遺産の数々…それだけをみれば日本全国の津々浦々に同類の地域はあるのですが、佐世保の市街地から車をちよつと走らせるだけで巡り合えるこの豊かさは、俵ヶ浦半島ならではの魅力です。



九十九島（写真上）と佐世保港（写真下）の2つの海に囲まれた俵ヶ浦半島。

Photo / Koichiro Fujimoto

俵ヶ浦半島の4町には、自然を敬い、五穀豊穡を願い、暮らしや命を守り、集落やコミュニティを育んできたお祭りや伝統行事が今も残っています。神社で開催されるお祭りや注連縄づくりはその代表的なもので、地域の大らかな交流の場にもなっています。ここでは、大切に受け継がれるお祭り・伝統行事の中で、半島ならではの特徴的なものをご紹介します。

## 水神さままつり(下船越町名切地区)

夏休み直前の梅雨明けが待ち遠しい7月頃、下船越町名切地区に伝わる「水神さままつり」が開催されます。このお祭りがいつ頃から始まったのか？地元の有志に尋ねても、「俺らが生まれた頃にはもう始まってたもんなあ」「さあ、いつからやるか」とはっきりした答えは返ってきません。

水神さまが祀られる場所は、かつては島だったという「前島」の海岸で、潮が満ちてくると海中に没します。まつりは引き潮の時間帯を選んで行われるのです。公民館のある集落の中心部とは、埋め立てで陸続きになっており、歩いて5分ほどのところ。皆さん、歩いたり、車に乗り合わせたりしてやってきます。

神事のスタートは12時から。地元の方が徐々にやってきて、手づくりのだんごをお供えしていきます。この祭りは、水の災害や事故、病気を防ぎ、商売繁盛を願うもので、家族が水難に合わないように、健康で息災に暮らせるようにと、家族の人数分のだんごを各家庭で作ってお供えするのが恒例なんだとか。

宮司さんの進行によって神事が円滑に進められ、ひとりずつ順に玉ぐしを奉奠し、水神さまに拝礼します。神事はおおよそ30分程で終了。竹と注連縄そしてお供えしただんごは、神事が終わってもそのまましておくそう。聞くと、潮が満ちてくると、だんごは自然と海へと流れていき、家族の代わりに海の災害から守ってくれるのだとか。美しい伝統です。

神事が終わった後は、同じ岩場で簡単な直会が行われます。地元のお母さん達が朝から準備したおにぎりとかまぼこ、おつまみ、飲み物で、少々不安定な椅子に腰かけて、身を寄せながらの親睦会です。「お祭りがなかったら交流もないし、都会と変わらんよ」名切地区で脈々と受け継がれてきたお祭りは、歴史を継承するだけでなく、集落のコミュニケーションを深める語り場でもあります。



宮司さんによる神事。



地域の交流が行われる直会。



町内の皆さんが家族のこれからの健康や安全をお祈り。

## 今も大切に根づく地獄絵の教え(庵浦町)

佐世保湾側の入り江に位置する庵浦町には、佐世保の日宇新四国八十八ヶ所(お遍路さん)の札所が多く、その歴史や信仰に触れることができます。なかでも庵浦町民に長く親しまれ、大切に守られてきた象徴的な存在が、庵浦の中心集落にひっそりと佇む「御観音さま」。ここの御観音さまでは、毎年1月16日と8月16日の2回だけ、代々受け継がれている2枚の地獄絵が開帳され、庵浦町内の方々が家族と集まり、「心」を大切にすることを教えています。半年に一度のこれらの日は地獄の釜のふたが開く「閻魔縁日」とされ、地獄で死者を責める鬼たちも休みの日。御観音さまはいつ頃から祀られているのか、確かな文献はないようですが、その昔、村に疫病が流行った時、亡くなられた方々の供養のために御観音さまが安置されたことと伝えられています。隣に建立されたお地藏様の台座には、江戸後期の「文政四年(1821年)」と刻まれています。御観音さまや開帳される地獄絵も、同時期に伝わったのでは、とのこと。

飾られる地獄絵は、1枚は閻魔大王をはじめ10人の王が描かれた「十王図」で、もう1枚は「観心十界図」。「観心十界図」は、「心」の文字を中心に10の世界が描かれています。「心」の字の上に描かれたのが仏界で、そのほか天道、人道、畜生道、地獄道などの「十界」が並んでいます。「心」とは人の心で、「良いことをするのも悪いことをするのも自分の心次第。心のありようで次の生を受ける世界が決まる。」という意味が込められています。

年に2回の開帳の日には、町内の方々が集まり、供養のために御詠歌を唱えます。昔から親や祖父母に連れられて子供たちも一緒にお参りをしたそうで、お参り際には子供たちに「嘘をついたり、人をいじめたり、悪いことをしたら地獄に行くよ……」と地獄絵のお話を。

こうした「心」を大切にすることを教えるのは、今もなお庵浦町で言い伝えられ、親から子へ、子か

ら孫へと大切に受け継がれています。また、こうして教えることが、地域の老若男女の交流にもつながり、地域に対する想いを育んでいくことにもつながります。



御観音さまの前で庵浦町の皆さんと。



開帳時の御堂の様子。観音様を中心に、左が「観心十界図」、右が「十王図」。

俵ヶ浦半島の南端に位置する俵ヶ浦町は、佐世保湾の入口に位置します。軍港として開港した佐世保港を護るために、明治期に設置された砲台や観測所、江戸時代に海域の警護のために置かれた船番所などが残るエリアで、佐世保のルーツを辿る歴史ロマンの宝庫です。

1886年佐世保港が軍港に指定されると同時に、周辺に建設された多くの軍事施設のひとつ「佐世保要塞」。ここ俵ヶ浦半島には3ヶ所に、佐世保港周辺の海域を警備するため、砲台や観測所などの施設が造られました。これらの佐世保要塞及び関連施設は鎮守府佐世保を物語る歴史遺産として「日本遺産」に認定をされています。

ここでは、代表的な3つの施設についてご紹介します。



丸出山観測所跡から見渡す九十九島の絶景。

### 佐世保要塞・丸出山観測所跡

軍港として開港した佐世保港を護るため、港の周辺には旧日本陸軍によって7ヶ所の砲台が完成しました。ここ丸出山には、佐世保港外を一望する装甲観測所（見張台）が設けられました。110年以上を経た今もなお現存しており、その姿と観測所跡から見える九十九島の景観は圧巻です。



### 佐世保要塞・小首砲台跡

日露戦争の開戦に備えて、1900年に築かれた砲台。戦闘に参加することなくその役割を終えましたが、煉瓦と石とコンクリートで造られたその姿は、日本の歴史を物語るかのように、今もなお、俵ヶ浦町の山中にひっそりと残っています。



### 高後崎船番所跡

俵ヶ浦半島の最南端・高後崎に、江戸時代に日本で唯一の貿易港であった長崎の警備を担って、平戸藩が1714年に設置した番所跡。対岸にあった大村藩の寄船番所と共同で、異国船の取締りを行いました。船溜まりの古い石組の突堤が歴史を物語ります。



俵ヶ浦半島は、海の幸・山の幸に恵まれた、食材の宝庫。かつては主に半農半漁で暮らしてきました。今は専業で農業・漁業する人は減ってしまいましたが、畑をつくり、海に出る暮らしは残っており、家庭菜園で自分が食べる分から市場に出すものまで農作物を作り、自ら船を操縦して大漁に釣ってくる、セミプロレベルの地域住民がたくさんいることもこの俵ヶ浦半島ならではの特徵。

代表的なブランド食材が、九十九島牡蠣。波穏やかな海域は恵みの漁場であり、濃厚でクセのない味わいの九十九島牡蠣は絶品。養殖する事業者さんもおくつかあって、半島内でその絶品牡蠣を食べることが出来ます。

地元食材をふんだんに使った郷土料理も残っていますが、代表的なのが野崎町の「野崎寿司」です。ここでは、野崎寿司の歴史と取り組みについてご紹介します。

### 受け継がれてきた野崎寿司(野崎町)

長崎県北地域のおもてなし料理として伝えられる押し寿司は、具材や作り方が地域によって少しずつ異なります。もろぶたに酢飯を広げ、煮付けた根菜などの具材を散らし、さらに上から酢飯を重ねたものを5cm角ほどの大きさに切った「大村寿司」や「もろぶた

寿司」。寿司の側面から挟み込んだ具材が見えないように、1つずつ型に入れて作る「平戸寿司」など、県北地域の中でも地域や作り手によってそれぞれのこだわりが見える郷土料理です。

俵ヶ浦半島の野崎町に伝わる「野崎寿司」も他の地域とは異なる逸品。新鮮な魚のそぼろや根菜などを使った具材と、甘酸っぱい濃厚な酢飯が絶妙なバランスで、これまで販売していた展海峰でのウォーキングイベントでも真っ先に売り切れるほどの人気商品でした。

しかし、調理には大変な手間と時間がかかるため、なかなか若い世代に引き継がれていないのが現状です。その地元根付いた大切な郷土料理を引き継いでいけないかと、ウォーキングイベントの出店をきっかけに、地元の寿司名人からの伝承会を開きました。

実際に野崎寿司の具材を作ってみると、魚の下処理、根菜などの刻み方、ひとつひとつの手に、普段のお料理にも約立つコツや秘伝が満載。野崎寿司は扇の形をしているのが特徴ですが、今回のイベント出店では一般的な四角の型で作りました。山椒の葉っぱなどを飾りつけて、「野崎仕込みの押し寿司」が完成。コスモスウォークの会場、展海峰で販売しました。

郷土料理は、少子高齢化や食生活の変化により継承していくことが難しくなっている状況があります。野崎寿司は、野崎町だけでなく俵ヶ浦半島の各町の皆さんに愛される逸品。この文化や魅力を守っていくために、試行錯誤は続きます。



扇型の型が特徴的な「野崎寿司」 Photo / Koichiro Fujimoto



おにぎりの具のように具材は酢飯の中に。



たっぷりの具材はじっくり煮込んで。



展海峰のウォーキングイベントでも販売。予約をしている人も。



野崎町の料理名人、森宗カツ子さん。手際よく、押し寿司を作り上げます。

## 白浜海水浴場

### 眼下に広がる九十九島のパノラマビューと園内を彩る季節の花々

白浜海水浴場は、俵ヶ浦半島の南端にあり、その名の通り白い砂浜に遠浅の海が続く夏の海水浴スポット。毎年夏休みになると、大勢の市民で賑わいます。海浜センターにはシャワーと更衣室、海の家（栈敷）が完備。地元のお母さんたちが出店する食堂では、かき氷、ラムネのほか、うどんやおでん、どんぶりなどの手料理が評判です。



Photo / Koichiro Fujimoto

## 白浜キャンプ場

### 青い海と青い空、茜色の夕焼け、そして夜は満天の星。

白浜海水浴場に隣接するキャンプ場は、静かな海辺の丘を取り囲む広い敷地に、常設テント、フリーテントサイト、オートキャンプサイトが点在し、シャワー、バーベキュー棟などの施設も充実。俵ヶ浦半島の南端、市街地から車でわずか30分とは思えない大自然の中、毎年常連のリピーターが多いのも頷ける環境です。昼は海辺でアクティブに、夜は焚火の炎でゆったりと、自分なりの時間を過ごすことができます。



Photo / Koichiro Fujimoto

## 亀の子島

### 知る人ぞ知る、俵ヶ浦半島の自然スポット。

九十九島の真珠養殖発祥の地。1920（大正9）年に高島末五郎氏によって確立された真円真珠の養殖は一時は世界の生産を誇りましたが、今は朽ちて通ることができません。大潮の干潮時のみ陸続きになり、歩いて渡ることができます。ミステリアスでいてロマンチック、俵ヶ浦半島の知る人ぞ知る穴場スポットです。



## 展海峰

### 眼下に広がる九十九島のパノラマビューと園内を彩る季節の花々

九十九島を望むビュースポットの中でも一番人気の展海峰は、佐世保港と九十九島、遠くは平戸島から五島列島までのパノラマビューが広がります。九十九島の島々を縫うように進む船の軌跡、日没のあと刻々と変化していく夕焼けの色、晴れた日には鮮やかに、雨の日は幽玄に、季節や天候、時間帯で異なる自然景観の奥深さが楽しめます。公園内は、春は菜の花、秋はコスモスに彩られ、多くの地元・観光客が訪れます。



Photo / Koichiro Fujimoto

## 花の森公園

### 四季折々の花が咲き競う広大な園地でピクニック

俵ヶ浦半島のほぼ中央に位置する花の森公園は、自然の地形を生かした5haもの広大な敷地で、自然樹林と九十九島を背景に、サクラ、梅、ツツジなどの花木など、四季折々の花が楽しめます。軽いアップダウンのある園内は、お散歩やご家族でのピクニックにも最適。鳥の声や足元の草花、林縁の小さなせせらぎに季節の移ろいを発見する、ドライブの休憩スポットとしても人気です。



Photo / Koichiro Fujimoto

俵ヶ浦半島は北西に九十九島、北東に佐世保港が見える、2つの海を味わうことができる絶景の半島。時間帯によってその表情は変わり、見る場所・見る時間によって何回でも楽しむことができます。また、複雑に入り組んだ海岸線は俵ヶ浦半島な

らではの豊かな自然環境を作り出し、多様な生物が心地よく暮らしています。ここでは、九十九島の大自然と美しい景観に彩られた俵ヶ浦半島を楽しめる主要なスポットをご紹介します。

俵ヶ浦半島のまちづくりはいまに始まったことではありません。半島地域を盛り上げようと始まったウォーキングイベントや展海峰ふれあい工房の立ち上げ、地域の課題に関する行政への要望活動など、俵ヶ浦半島の町内会のメンバーが中心となって俵ヶ浦半島開発協議会を組織し、一丸となって取り組んできました。俵ヶ浦半島開発協議会で長年会長を務めてきた尾崎嘉弘さんに、これまでの俵ヶ浦半島のまちづくりについて話を伺いました。

### 俵ヶ浦半島の生活環境の向上を目指して、俵ヶ浦半島開発協議会を立ち上げ。

今年76歳となる尾崎さんは生まれも育ちも下船越町。昔の俵ヶ浦半島は今のように車が十分に通れる道路があるわけではなく、ほとんど農道と似たような状況だったそうです。下船越町にはかつて炭鉱があり、長屋も建ち並んで多くの人が住んでいたそうですが、閉山後は人口減少が続きます。他の3町も農

業や漁業などの生業を中心とした集落で、その当時は半島一帯でまちづくりを、という雰囲気はまだなかったそうです。

きっかけは、野崎町に整備されることになった障がい者福祉施設「長崎県立コロニー」です（コロニーは民営化によりつくも苑となり、その後閉所。現在、跡地は観光公園の整備が進んでいます）。当時、半島には上水道は整備されておらず、井戸水を汲んで暮らしていました。生活に欠かせない道路や水道といった社会インフラが十分に整っていない中、俵ヶ浦半島の町内会が集まり、1971年に「俵ヶ浦半島開発協議会」を結成。住民の意見を吸い上げ、行政に陳情・要望を行う活動が始まりました。そのような活動の成果もあり、県立コロニーの建設をきっかけに半島内にも上水道が整備されることになったのです。現在も俵ヶ浦半島開発協議会は要望活動などを継続し、半島内の意見調整などを担っています。

### 地域の活性化に向け、展海峰ふれあい工房がオープン。

半島のまちづくりを語る上で欠かせないのが「展海峰ふれあい工房」。1999年頃から、庵浦町では折り紙陶芸（粘土と和紙を積層にして出来た陶芸紙を、折り紙のように折って造形し、焼成する焼物）を作る活動が始まりました。元々は庵浦町公民館が中心となり取り組まれていましたが、俵ヶ浦町にも適した粘土があり、地元の特産品のひとつとして売り出しているのか、という機運が高まります。

俵ヶ浦半島開発協議会では、展海峰を管理する佐世保市と交渉、2001年に展海峰の一角に「展海峰ふれあい工房」をオープンします。陶芸紙の製造や折り紙陶芸の作品の販売だ



これまで長きに渡り俵ヶ浦半島のまちづくりを支えてきた尾崎嘉弘さん。

けでなく、地域の生産者が野菜や漬物などを販売する店舗として運営を始めることになりました。そして、年に数回しか集まることがなかった協議会も、当時の会長を中心に、半島を盛り上げよう、と声をかけてふれあい工房に集まるようになったそうです。

## 地域の親睦会から始まったウォーキングイベントは、半島の魅力発信の場へ。

展海峰ふれあい工房は、各町内会の皆さんが交代で店番に立たれていましたが、十分な売り上げを確保するのは難しかったとのこと。そこで協議会では、展海峰の名物となっていた「菜の花」「コスモス」にちなんで、「展海峰菜の花ウォーク」と「展海峰コスモスウォーク」のイベントを開催。各町内会からおでんや焼きそば、押し寿司などのお店を出店し、その売上の一部をふれあい工房の運営資金に充てるようにしました。

2002年に始まったウォーキングイベントですが、当初はあくまで半島4町内会の親睦会として開催したそうです。しかし、俵ヶ浦半島の美しい風景を味わえるウォーキングコースは人気で、次第に話題を呼び、佐世保市のフリーペーパー

「ライフさせぼ」に紹介されたり、周辺の町内会にもチラシを配るなど、俵ヶ浦半島の名物イベントとして広がっていききました。

その後、つくも苑の移転問題が浮上。つくも苑に勤めている地域住民も多く、半島内の働き場所の喪失にも繋がってしまつたため、協議会は現地建替に向けて幾度となく話し合いや要望活動を行ってきました。残念ながらそれは叶いませんでしたが、跡地には現在観光公園の整備が行われており、新たな賑わいの場として期待されます。

俵ヶ浦半島開発協議会が立ち上がって約50年、尾崎さんが協議会の会長を務めたのはそのうち10年！

課題はたくさんありますが、尾崎さんが言うように、息の長い取り組みを目指して俵ヶ浦半島のまちづくりに取り組んでいきたいと思っています。



俵ヶ浦半島開発協議会の4町内会長とチーム俵で情報共有を行うネットワーク会議を毎月開催。



展海峰菜の花ウォークの開会式で挨拶される尾崎さん（当時は俵ヶ浦半島開発協議会会長）。



Photo / Koichiro Fujimoto

## 第2章

### 俵ヶ浦半島活性化の はじまり

## トレイルコースのはじまり

佐世保の歴史を物語る佐世保要塞の数々が点在し、自然豊かな九十九島と佐世保湾の景観が楽しめる、いわば佐世保のルーツともいえる俵ヶ浦半島。その魅力が着目されるきっかけとなったのが、佐世保の観光地づくりに取り組む(公財)佐世保観光コンベンション協会が主体となって取り組んだトレイルコースづくり。小さいながらも、入り組んだ海岸線や起伏に富んだ地形が生み出す豊かな景観は俵ヶ浦半島にしかない価値であり、景観を生かしたトレイルづくりをしたいと当時のコンベンション協会の担当者であった富田袖香子さん(その後、俵ヶ浦半島の集落支援員に着任)が、九州大学景観研究室の樋口明彦准教授に相談。景観研究室のOBである株式会社ルート・アンド・パートナーズの佐藤直之さんがトレイルマップづくりのディレクターに加わり、外部による推進チームが結成されました。

九十九島と佐世保湾に囲まれた半島の景観を目の当たりにし、外部のチームメンバーはすっかりその魅力に一目惚れ。単なる観光コースの整備に留まらず、半島に暮らす地域住民と一緒に景観まちづくりを進めることが重要だという樋口准教授のアドバイスをもとに、俵ヶ浦半島を舞台にした住民参加型のトレイルコースづくりが幕を開けました。

初年度の2013年度は、丸出山砲台跡や小首砲台跡、高後崎船番所跡などの豊富な歴史遺産が残る俵ヶ浦町でトレイルコースづくりがスタート。最初は地域住民も半信半疑でした

が、地域の魅力を語り合い、ルートを検討し、住民参加によるサイン制作・設置とプロジェクトが進んでいくに従って前のめりに参加するようになりました。プロジェクトを進める前提として、この動きを俵ヶ浦町だけでなく、半島全体に広げ、半島のまちづくりにつなげていこうという狙いが外部チームにはありました。俵ヶ浦町での取り組みを進める中で、俵ヶ浦半島を構成するその他の3町の公民館長にも呼びかけを行い、実際に活動を見ていただく機会も作りました。

その結果、2014年度には庵浦町が、2015年度には野崎町と下船越町名切地区が手を挙げてトレイルづくりに取り組み、3年かけて半島4町のトレイルコースを作ることができました。地域に根付く足元の魅力に気づき、半島を元気にするためのまちづくりは、このトレイルコースづくりから始まったのです。



九州大学との初顔合わせ。早速様々な意見交換が。

トレイルコースで紡ぐのは、俵ヶ浦半島の各地域に眠る資源や魅力。それを一番知っているのは地域住民ですが、その地域で当たり前のように暮らしているとなかなかその魅力には気づかないものです。では、どうやってその魅力を地域住民から引き出そうか。樋口准教授の提案から生まれたのが、地域の皆さんとの「昔語り」。

「皆さんは昔、この地域でどんな遊びをしていましたか？どんな思い出がありますか？」

大きな地図を机の上に広げて、地域住民に問いかけます。すると、「昔はここまで歩いて、佐世保港に向かう船に乗ってた」「ここでこういう遊びをしていた」「昔はここから十九島の景色が綺麗に見えた」と、地域住民の中に眠っていた思い出の記憶が次々に蘇ってきて、地図の上に可視化されていきます。気がつけば、そこかしこで思い出話が勃発して、収集がつかないほどの盛り上がり。瞬く間に、地域の魅力マップが出来あがっていきます。

この昔語りを4町それぞれですると、各地域で魅力や特徴が違って面白い。それぞれの個性が浮かび上がってきます。

昔語りをもとに、ルートを検討

昔語りをもとに見えてきたそれぞれの地域の魅力や特徴。次のステップとしては、昔語りで整理した地図を頼りに地域住民と現地を調査し、具体的なルートを検討していきます。

実際に現地を歩いてみると、昔語りでは見えてこなかった魅力が再発見。「ここは何があったんですか？」「ここはどういう歴史の由来があるんですか？」大学生の問いかけに、地域を知り尽くした住民が語りかける。そうすることで、地域の魅力が立体的に浮かび上がってきます。

二股に分かれるところはどちらに行った方が良いか、どこにどんな標識を置いた方が良いか、ルートやサインの細かな部分についても地域住民と話し合いながら決めていきます。昔語りの中で意見が出た「ここは伐採したら景観が綺麗かよ」という潜在的な景観ビューポイントや整備すれば通れる潜在的な魅力ルートも、将来的なトレイルコースとして計画することにしました。

こうした現地での検討を踏まえて、最終的には2時間以内のルートを設定しました。どのルートも、その地域の特徴を踏まえたものになりました。



昔語りでは、地域の老人会などにも参加。熱気あふれる会となり、圧倒される九州大学の学生たちの姿も。



現地調査のほか、九州大学が作成した立体模型を用いて、サイン設置箇所等を検討。

地域住民との対話や現地調査を踏まえて設定したルート。俵ヶ浦半島の来訪者がトレイルを迷わずに安心して楽しんでもらうためにルート沿いにサインを設置。地域住民が愛着を持って長く使い続けるために、樋口准教授の提案で、住民参加によるサインづくりを行いました。

サインの素材は、自然豊かな俵ヶ浦半島の景観に調和させるため、耐久性のあるエコアコール製の木材を採用。サインの柱や情報を記載する板面の準備は九州大学で行い、板面に記載する施設名や駐車場、進入禁止等の情報は下書きをした状態で地域に持ち込み、専用のルーターや絵具を用いながらのサインづくりワークショップを行いました。ワークショップには、地域の老若男女が集まってワイワイと。子供達は無心になって取り組む姿も。

こうして作られたサインの板面を一定期間乾燥させて、今度はサイン設置のワークショップを行いました。サインの設置となると男の力が必要！ということで、地域内の男性に加えて、佐世保の米軍関係者や海上自衛隊関係者にも協力要請してボランティア参加してもらいました。2年目、3年目となると、応援の輪も広がって、慣れた手つきでサインの設置が進んでいきました。

地域の女性陣も料理面で大活躍。ボランティア参加した人達におにぎりや豚汁、おかずの振る舞いをしていただき、交流の輪も広がりました。頭で考えるだけでなく、地域のみんなで地域をまわり一緒に汗をかいて、交流する体験が、地域のまちづくりに目を向けるきっかけにも。俵ヶ浦半島トレイルの4町のサインは、こうして全て住民による手作りで作られました。



地元のお父さん方はルーターを使って文字の穴彫り。



子供たちはお父さんたちが彫った穴にペンキを流し込む作業を。



マップを入れるボックスも手作りです。



昼休みは地域のお母さんたち手作りの絶品料理を参加者の皆さんと。



サイン設置の力仕事には、頼りになる米海軍の皆さんがボランティアに。



サイン完成の記念に集合写真を撮る。たくさんの方に参加いただきました。

俵ヶ浦半島来訪者が気軽にトレイルを楽しんでもらうため、昔語りによって浮かび上がった地域の魅力や資源、ルートが記載されたトレイルマップを制作しました。

マップづくりにあたっては、その地域ならではのトレイルの「個性」が伝わるように、トレイルコースのコンセプト名称と、そのコンセプトを体現するアイコンをデザインしました。俵ヶ浦町は、豊富に点在する佐世保要塞の魅力を楽しんでもらうことをコンセプトに「俵ヶ浦町 歴史遺産トレイル」と命名し、アイコンは象徴的な存在である丸出山観測所跡をモチーフにしました。庵浦町は、点在する新四国八十八ヶ所巡礼（通称…お遍路さん）の札所を楽しんでもらうことをコンセプトに「庵浦町 お遍路トレイル」と命名し、アイコンは地域の精神的な象徴となっている「御観音さま」をモチーフにしました。野崎町は、郷土料理の野崎寿司をはじめ、食の風景を楽しんでもらうことをコンセプトに「野崎町 ごちそうトレイル」と命名し、アイコンは畑と古民家、海、針尾無線塔の象徴的な風景をモチーフにしました。下船越町は、今も住民の手によって大切に受け継がれている水神様と山神様の文化や景観を楽しんでもらうことをコンセプトに「下船越町 水神山神トレイル」と命名し、アイコンは水神様の注連縄をモチーフにしました。

こうして、個性ある4町のトレイルコースの顔が決まり、マップのデザインができあがりました。小さな半島の中でも、見える景色も違えば、受け継がれた文化や資源も違う。トレイルコースづくりは、俵ヶ浦半島を知る第一歩となりました。



3年間で作成した4つのトレイルコース。  
俵ヶ浦半島ホームページにて公開 (<https://tawara99.com/play/>)

## 人口減少・少子高齢化

2013～2015年度まで取り組んだ俵ヶ浦半島のトレイルコースづくり。その中で、九州大学の樋口准教授を中心はずっと地元で訴え続けたことは、トレイルコースづくりは単なる観光ルート整備ではなく、まちづくりにつながる取り組みであるということ。

昔語りは、地域住民1人1人の中に眠っていた思い出や遊び場を発掘し、足元にある大切な地域資源を再発見する機会となりました。世代や地域の枠を越えたサインづくりやサイン設置は、一緒に汗を流し、半島の4町が交流して語り合うきっかけになりました。

専門家や外部の視点、地元の気づきによって俵ヶ浦半島の「可能性」が次々に浮かび上がってきた一方で、半島ゆえの課題や暮らしの困り事・悩み事に直面することにもなりました。トレイルコースづくりのプロジェクトを通じて、公民館を中心として地域住民への話し合いを行ってきましたが、その後さらに地域の運動会や直会、行事、消防団や地域の会合に参加し、延べ100名以上に及ぶ方々と対話を続け、俵ヶ浦半島の現状や困り事、関心がある事、大切な事を聞きました。

その中で見えてきた俵ヶ浦半島の1番の課題は、「人口減少・少子高齢化」でした。地域の行事の存続が困難になってきている事や増え続ける耕作放棄地、路線バスの減少、日常の買い物の困難さなど、出された多様な意見は総じて「人が減っていること・高齢化していること」に起因するものでした。

20年前に1800人程度だった半島の人口は、2015年時には約1100人程度まで減少。佐世保市が推計した人口予測によると、この減少ペースが続いた場合、40年後の2060年には人口は200人を切り、高齢者の割合も現在の倍の85%に迫る恐れがあることがわかりました。

## 小中学校の閉校

地域住民へのヒアリングを行った2016年当時、地域住民の最も大きな関心事であったのが、閉校が決まっていた3つの学校のことでした。野崎中学校、俵浦小学校、庵浦小学校と、長い間地域が慣れ親しんだ学校が少子化によって生徒数が減少し、周辺の小中学校への統廃合が決まったのです。野崎中学校と俵浦小学校は佐世保湾に面した高台に、庵浦小学校は入り江に位置し、どの学校も半島の風景を感じられ、地域の歴史を物語ってきたまさに俵ヶ浦半島のシンボルともいえる存在です。

それを物語る象徴的なことが、地域と学校が一体となって企画・運営してきた運動会でした。パン食い競争や玉投げ、組体操などの具体的なプログラムは地域と学校が一緒になって考え、子供と地域住民が楽しめる工夫が随所に散りばめられた。地域が一体となって楽しめる貴重な交流の場です。閉校が決まった後に開催された、俵浦小学校と庵浦小学校の最後の運動会では、集まった子供や学校関係者、地域住民で体育館がびっしりと埋まり、最後の交流を楽しんでいました。

そのシンボルが失われることは、子供達の遊び場や居場所がなくなるだけでなく、地域住民にとっても、地域を繋いできたコミュニティの場がなくなるとも辛いニュースだった

に違いありません。地域住民へのヒアリングの中でも、小中学校の休校に伴う子供の教育や通学の問題、子供の遊び場、運動会の継続、子育て環境の改善、保護者を中心に学校をサポートする育友会の交流の継続などの課題がたくさん挙げられました。

## 空き地・空き家問題

人口減少・少子高齢化による大きな影響として、空き地や空き家問題についても地域住民から多くの課題が寄せられました。以前は俵ヶ浦半島で農業を営む世帯もたくさんいらっしゃいましたが、子供達が進学や就職を契機に半島を出てしまいましたが、子供達が進学や就職を契機に半島を出てしまえば後継者がいなくなってしまうことや農業従事者の高齢化によって農業が続けられなくなったり、田畑を管理できなくなったりして、耕作放棄地が増えています。またそれに輪をかけて、イノシシが田畑を荒らしてしまう問題もあって、空き地の維持管理が深刻な状況であることがわかりました。

また、耕作放棄地だけでなく、空き家問題も深刻です。住み手がいなくなると管理ができなくなってしまう空き家は



児童の親族だけでなく、地域住民が多数集まる小中学校の運動会。

傷みも早く進行してしまい、老朽化に歯止めがかからなくなってしまうです。市街化調整区域のために、移住希望者が住むには非常にハードルが高いという声もたくさん聞きました。

空き地や空き家が増えていくことで、俵ヶ浦半島の財産である美しい景観が失われていきます。全国各地で空き地・空き家問題が深刻化していますが、ここ俵ヶ浦半島でも同じ問題に直面し、地域の暮らしの風景をどう守っていくかの対策が求められています。

トレイルコースづくりを通して俵ヶ浦半島の皆さんの魅力を再発見した一方で、地域の暮らしに影響する様々な課題が浮き彫りになりました。半島に根付く魅力も、こうした現実的な課題を解決することで守られ、次の世代へと継承することがわかりました。

そして、様々な課題に帰結するのは「人口減少」であり、地域の暮らしや景観を守ることやお祭り・行事・学校行事で培ってきた地域コミュニティや集落を維持していくことも、全て住む人がいて成り立つものだと思われました。全国各地の地方で人口減少・少子高齢化が進展する中で、大きな人口増加は見込めないでしょう。人口が増えないにしても、どのようにして俵ヶ浦半島の集落・暮らし・コミュニティを維持できる人口を確保できるか。俵ヶ浦半島が解決すべき1丁目1番地が明らかになりました。

暮らしを将来につなぐ「俵ヶ浦半島未来計画」づくりのはじまり

トレイルコースづくりを始めて3年。単なる観光ルートの整備に留まらず、俵ヶ浦半島の資源や魅力を生かし、暮らしの課題を解決するまちづくりへとつなげる動きは新たな局面を迎えることになりました。これまでの俵ヶ浦半島における住民主体の取り組みを踏まえ、まちなかからわずか15分の立地にある風光明媚な俵ヶ浦半島の可能性を感じていた佐世保市役所が、佐世保市の地方創生総合戦略のリーディングプロジェクトの1つに俵ヶ浦半島の活性化プロジェクトを掲げ、まちづくりを支援することがきまったのです。

その活性化プロジェクトとして最初に取り組んだのが、俵ヶ浦半島の未来を描いて具体的なまちづくりに取り組むための「俵ヶ浦半島未来計画」づくり。佐世保市政策経営課が担当部署となり、トレイルコースづくりでまちづくりの必要性を唱えてきた九州大学の景観研究室、株式会社ルーツ・アンド・パートナーズ、富田柚香子さんによるサポート体制を構築。2016年度より1年かけて、住民参加型による未来計画づくりが始まりました。

この未来計画の作成にあたっては、半島内の4町の出事や会合で、地域住民が日頃抱えている困り事や関心事、将来の不安を聞きながら、半島の現状・課題を把握しました。また、4町住民総出による「俵ヶ浦半島ミーティング」を3回開催し、俵ヶ浦半島の魅力、10年後の将来ビジョンや目標、未来を実現するための事業計画や組織づくりなどを語

りました。

この未来計画は、スローガン「ヒトがオモテ」が象徴するように、俵ヶ浦半島の住民の手で生まれたまちづくりの道標。未来計画が見据える期間は、次の世代が暮らす将来までを考えて2060年までとし、計画づくりの大命題として、俵ヶ浦半島に人口・定住・地域経済を生み出し、俵ヶ浦半島の宝である豊かな暮らしと美しい景観を将来につなぐことを決めました。その軸をぶらさずに、時代に左右されないまちづくりの目指す姿と時代・市場に応じた事業、地域住民主体の推進体制を掛け合わせることで、俵ヶ浦半島独自のまちづくりの実現を目指します。

半島のスローガンは「ヒトがオモテ」

2016年8月、4町住民参加の元で、第1回目の俵ヶ浦半島ミーティングを開催。

「10年後、どんな俵ヶ浦半島にしたいですか？」参加した約50名の地域住民が10年後の未来の姿や未来のためにやりたいことを語り合いました。

若い人、子供達にきて、住んで欲しい。生涯元気に健康で暮らせる街。外国人や障がい者に優しい街…地域住



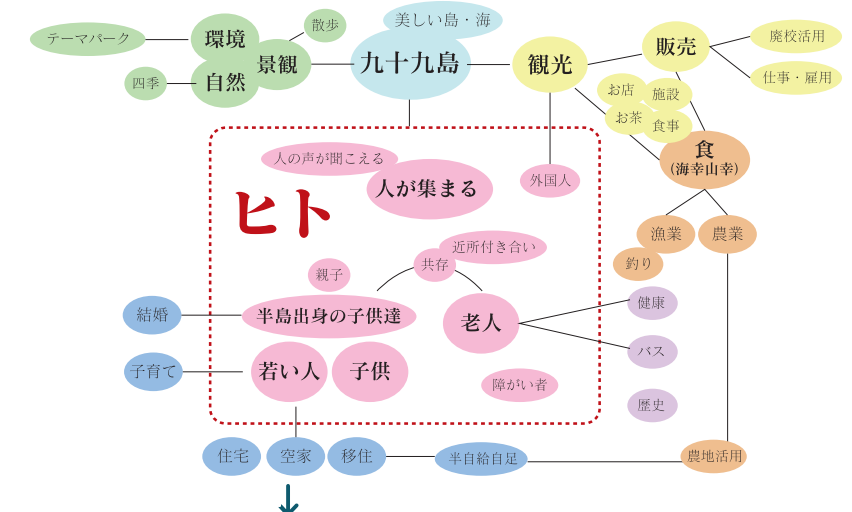
俵浦小学校の体育館を舞台に開催した俵ヶ浦半島ミーティング。熱気あふれる議論になりました。

民の中心には「ヒト」がいて、仲の良い人間関係やコミュニティが半島の自慢であり、残したい大切なものであることがわかりました。

この結果を踏まえて、俵ヶ浦半島の未来を語るキーワードを「人が主役のまちづくり」とし、俵ヶ浦半島の「俵」の漢字を活用して半島のまちづくりスローガンを「ヒトがオモテ」に決定し、スローガンロゴを作成しました。



第1回俵ヶ浦半島ミーティングにおける「10年後の未来」キーワード



〈俵ヶ浦半島の未来を語るキーワード〉  
**「人が主役」のまちづくり**  
 個性が生き、多様な暮らし・共存できるのが願い。  
 (若い人、子供達に住んで欲しい、老人が元気、観光客にきてもらいたい、など)

↓ 大切にまちづくりの理念  
 〈俵ヶ浦半島未来計画のまちづくりスローガン〉  
**ヒトがオモテ**  
 俵ヶ浦半島の「俵」という漢字を活用し、「人が主役の島」であることを伝える。



俵ヶ浦半島  
 △俵ヶ浦半島スローガンロゴ

## 半島の魅力は、 「景観、自然環境、食、歴史」

第1回目俵ヶ浦半島ミーティングにおいて半島の未来を語る時、地域住民は俵ヶ浦半島ならではの資源・魅力を守り、それらを生かした活性化を求めていることがわかりました。

その半島の魅力の源として、多くの人達の中心には「九十九島」の存在があります。その九十九島の恩恵を受けた「景観」「自然環境」そして海と山の豊富な「食材・食文化」、お祭りや歴史遺産による「歴史」の4つが、俵ヶ浦半島の活性化に残し生かすべき魅力だと言えます。

**景観**

- ・九十九島の眺望を活かした散策路
- ・美しい島、山を子供達に残したい
- ・海と景観が売りとした集客
- ・九十九島を活かした元気ある俵ヶ浦
- ・景観の良い場所でカフェレストラン
- ・海陸が一体となった観光フィールド
- ・港と九十九島を眺めるスポット、
- ・景観を楽しむ観光の促進、など

**自然環境**

- ・四季の花と九十九島が映える俵ヶ浦
- ・環境を活かした総合テーマパーク
- ・風光明媚な自然環境を活かした施設
- ・自然を活かした人の集まる場所
- ・自然豊かに子育てができる俵ヶ浦
- ・美しい自然の保存 (海釣り、山菜)
- ・半島全体を活用した自然体験・教育
- ・白浜キャンプ場のPR、魅力化、など

**食**

- ・旬の野菜、魚を食べさせたい
- ・自分で地域で育てたものの提供
- ・魚釣場とうまかもんが食べる俵ヶ浦
- ・農業・漁業・観光の3つの柱
- ・野崎寿司・郷土料理の発信
- ・6次産業加工品販売、食ブランド化
- ・地産地消のおばさん食堂
- ・そば栽培とそば道場、など

**歴史**

- ・古い歴史と美しい環境の俵ヶ浦
- ・郷土の歴史教育の推進
- ・歴史をたどるトレイルコースの活用
- ・お祭りや伝統・文化の継承
- ・丸出山観測所への展望所の整備
- ・地域の伝統行事の発信

半島文化を象徴するマーク ↓  
 往人島色  
**俵ヶ浦半島**

[ 俵ヶ浦半島の未来予想図 - 半島未来マップ - ]



# 半島ファンを増やし、豊かな人々の暮らし、景観を次代に繋ぐこと

「俵ヶ浦半島が将来こうなっていきたい」という地域住民の思いを詰め込んだ俵ヶ浦半島未来マップ。この未来を実現するための半島活性化の1丁目1番地は、「人に来てもらう、住んでもらうこと」。人と経済の流入によって俵ヶ浦半島に人口交流、定住、地域経済の波が生まれることで、俵ヶ浦半島が大切にしたい豊かな暮らしや美しい景観が後世へと繋がっていきます。

佐世保市が実施した人口推計によると、何もチャレンジをしなれば40年後には人口が今の1/5になり、5人に4人以上が高齢者のまちなります。しかし、地域住民が力を合わせて半島にとどまる人を増やし、新たに住む人を受け入れることで、その流れを食い止めることもできるのです。若年層・子育て世代を年間6〜12世帯留める、受け入れることでコミュニティの維持の1つの目安\*となる500〜1000人の人口規模と現在と同レベル以上の世代のバランスを保つことが可能です。

1人ずつ、1世帯ずつ半島ファンを増やすことが希望ある未来への近道。そのためには、他の地域との差別化を図り、「景観」「自然環境」「食」「歴史」による俵ヶ浦半島独自の魅力を活用した事業を進めていくことが不可欠です。

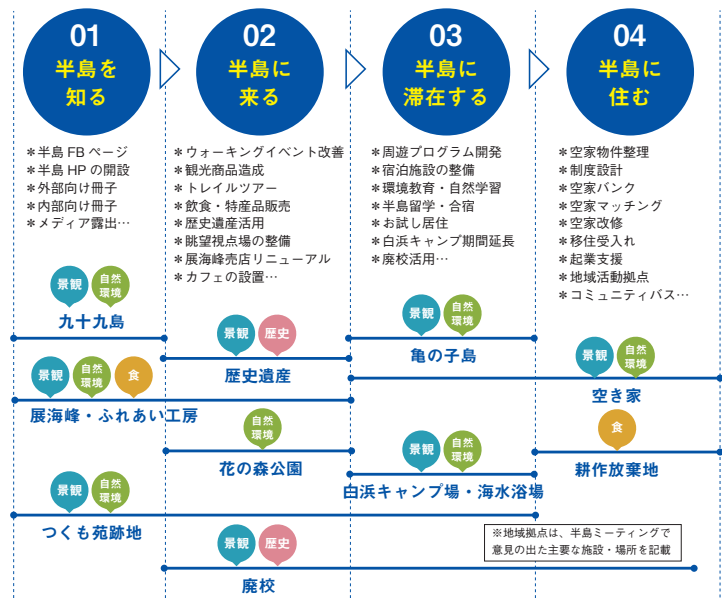
\*国土交通省「サービス施設の立地する確率が50%及び80%となる自治体の人口規模」

## 知る↓来る↓滞在する↓住むの循環を生み出すまちづくりサイクル

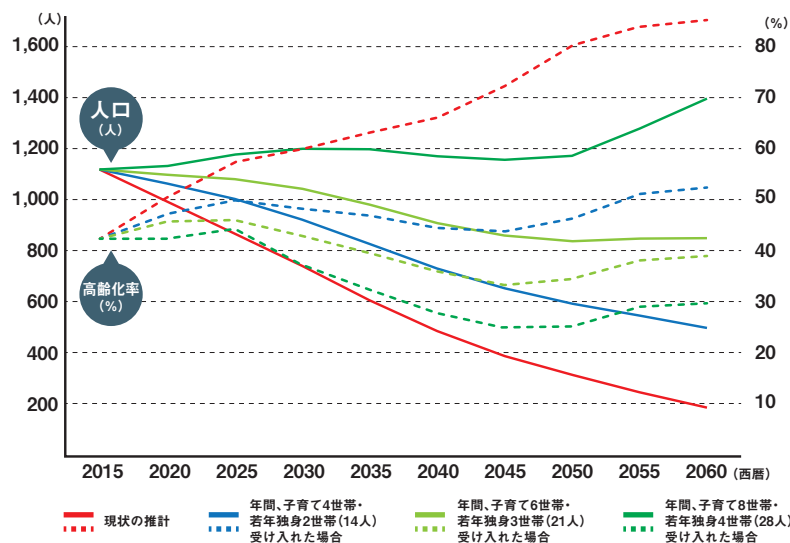
40年後の将来目標「500人〜1000人の人口規模の維持」を実現するためには、時代・市場に応じて適切な事業展開を可能とする事業のサイクルを作っていくことが望まれます。俵ヶ浦半島は九十九島と佐世保湾の恵まれた景観・自然環境とまちなかへの近接性を有しながら地域の知名度はあまりないことから、まずは半島の魅力やこれから進めるまちづくりの取り組みを発信して「知ってもらう」ことから始める必要があります。そして、将来的には俵ヶ浦半島の魅力を最大限に活用して人に「来てもらい」、「住んでもらう」ことを実現したい。

そこで、「半島を知る」↓「半島に来る」↓「半島に滞在する」↓「半島に住む」というまちづくりの事業サイクルを構築し、そのサイクルに沿った安定的なまちづくりや事業展開を進められる仕組みを作り上げることを10年後の目標とします。4つのサイクルのそれぞれの場面において、取り組みたいアイデアや活用すべき地域拠点を整理しました。地域住民が主体となって、外部サポーターや半島ファンの連携を可能にする適切な推進体制のもとで、優先順位を考えながら事業を進めていくことが大切になります。

### [ 目標達成のための取り組みフロー ]



### [ 俵ヶ浦半島の人口・高齢化率の推計 ]



# 俵ヶ浦半島の未来をつくるまちづくり会社「チーム俵」の自立

これまで俵ヶ浦半島の活性化に向けては、俵ヶ浦町、野崎町、庵浦町、下船越町の4町町内会長と役員で構成された「俵ヶ浦半島開発協議会」がまちづくりの推進役を担ってきました。ただ、人材の不足や高齢化によって負担が集中し、若手人材の参加が少ないことで、活動の広がりや資金調達、人材確保に悩まされてきました。

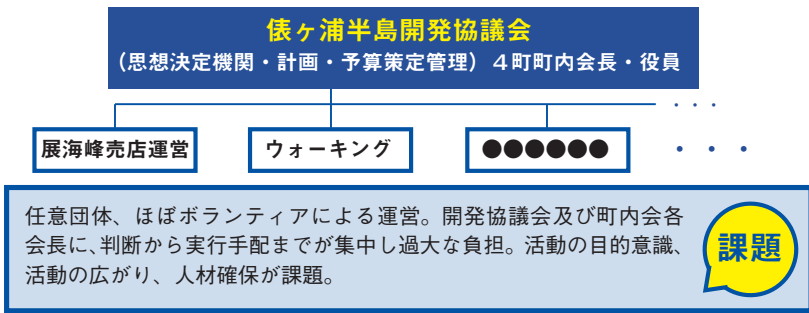
この俵ヶ浦半島未来計画づくりをきっかけにして、どのような目的でまちづくりを進めるのか、世代と4町の地域の枠を越えたまちづくりの推進体制をどうやって作っていくのか、半島ミーティングや地域の会合で議論を続けました。その結果、俵ヶ浦半島の未来をつくるため、地域・世代の枠を越えた横断的組織「チーム俵」を発足することに。「人口の交流・定住・地域経済を生み出す」という目的を共有し、将来的には自主財源を作って自ら事業を回していける地域のまちづくり会社を目指します。

目先の課題だけでなく10年後、40年後の俵ヶ浦半島の未来のために行動する。これまでのような行政に頼るまちづくりではなく、自ら事業を起こし、収益を生み出し、自主財源を作っていく。将来的には、活動の自主財源を作って組織の自立化を図り、地元の雇用や人材の確保、生み出した収益を活用した地域の困り事の解決を実現する地域密着・持続可能なまちづくりを目指していく。

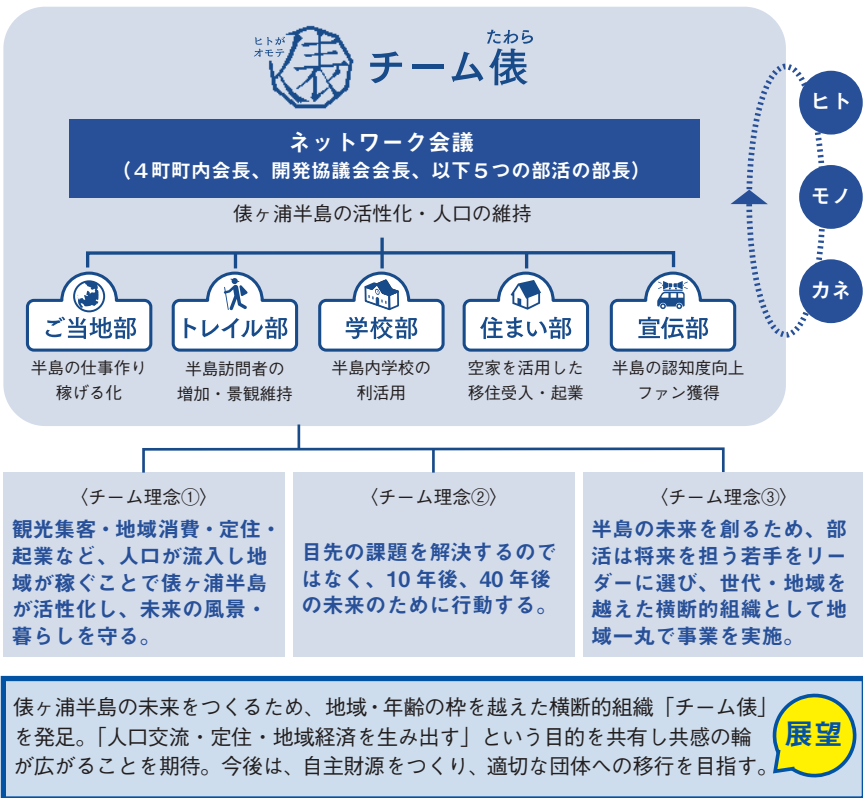
少子高齢化・人口減少が深刻化する中で、それらを実現するのは簡単な話ではありません。ただ、全国各地の地方では同じ悩みを抱えており、俵ヶ浦半島のまちづくりへの挑戦はきつと励みになり、これからのまちづくりを考える上でのヒントになるに違いありません。

## [ 目標を達成するための推進体制 ]

### < 現行体制 >



### < 俵ヶ浦半島未来計画の推進体制 >



## 5つの部活に沿った事業計画

チーム俵の組織づくりにあたっては、地元への関心度・必要性が高い5つの事業テーマをもとに、「ご当地部」「トレイル部」「学校部」「住まい部」「宣伝部」という5つの部活を結成。ワイワイ楽しみながら参加できて、1つの目標達成を目指してみんなで汗を流す「部活」のようなノリをイメージしました。また、ネットワーク会議を設置して部活間の情報の共有や連携を図るほか、地域内外の関係機関やサポーターとの連携体制も作り、まちづくりと共に汗を流す仲間を増やしていくことを考えました。各部活の概要は以下の通り。

**ご当地部**・・・地域資源や食材を生かして、俵ヶ浦半島ならではの魅力・商品づくりを行います。具体的には、展海峰売店のリニューアルや半島食材のブランド化、加工品・特産品の開発、郷土料理の継承、その他観光商品づくりに取り組めます。

**トレイル部**・・・これまで4町で作成したトレイルの活用・整備・商品づくりを行います。具体的には、ウォーキングイベントの開催やトレイルのPR・観光商品化、眺望確保、ルート整備、歴史遺産・公園活用、滞在拠点づくりなどに取り組めます。

**学校部**・・・閉校する3つの小中学校の活用や子供と地域の交流づく

りを行います（野崎中、俵浦小、庵浦小）。地域の活動・交流拠点、環境教育、合宿誘致、トレイル拠点、生産加工場など、活用方法は多数考えられます。

**住まい部**・・・人口減少・少子高齢化を解決するため、空き家を活用した移住・定住・起業支援を行います。具体的には、空き家物件の把握・活用・改修・情報発信、子育て支援、起業支援、耕作放棄地の活用などに取り組めます。

**宣伝部**・・・俵ヶ浦半島の様々な魅力を発信して、宣伝します。具体的には、地域で受け継がれる歴史やお祭り、食材、景観、自然、人など、半島の魅力を冊子やインターネットを通じて発信し、観光や移住に繋げるのが狙いです。



最初に部活毎の目標を決めるキックオフミーティングを開催。

### [ チーム俵・部活ごとの事業計画 ]

<p><b>ご当地部</b></p> <p>俵ヶ浦半島の仕事作り・稼げる化</p>	<p><b>【ミッション】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎農水産物のブランド化</li> <li>◎地域資源を活用した商品開発・販売</li> <li>◎展海峰ふれあい工場の売場改善</li> </ul> <p><b>【目的・目標】</b></p> <p>《1年後》地域資源の商品化、 《3年後》ふれあい工場の黒字化（年商5,000万円） 《5年後》つくも苑事業への地域参画</p>
<p><b>トレイル部</b></p> <p>俵ヶ浦半島訪問者の増加、景観維持</p>	<p><b>【ミッション】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ウォーキングイベントの強化</li> <li>◎トレイルルートの造成・観光集客</li> <li>◎景観整備、拠点整備・活用、維持管理</li> </ul> <p><b>【目的・目標】</b></p> <p>《年間》トレイルルート2コース/年。5年で10コース（菜の花、コスモスウォークで1コースずつお披露目） 《5年後》菜の花・コスモスウォーク参加者（300人→600人）、収益化（参加料、ガイド料、土産物）</p>
<p><b>学校部</b></p> <p>俵ヶ浦半島内の学校の利活用</p>	<p><b>【ミッション】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎学校活用策の検討、利活用</li> <li>◎学校の維持管理・運営</li> <li>◎地域拠点・コミュニティづくり</li> </ul> <p><b>【目的・目標】</b></p> <p>①放課後教室の利用人数（全児童の70%）・利用者の範囲（4町すべて）、②グラウンドの利用人数・回数、③防災拠点の整備（計画の検討）、④学校活用の事例勉強会（年に1～4回開催）</p>
<p><b>住まい部</b></p> <p>空家を活用した移住受入・起業</p>	<p><b>【ミッション】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎空家物件、耕作放棄地の改修・活用</li> <li>◎移住・定住の環境整備・受入れ</li> <li>◎空家を活用した起業支援・ビジネス創出</li> </ul> <p><b>【目的・目標】</b></p> <p>《1年後》1町・1軒活用できる空家確保（計4軒）、モデルとして1軒を掃除・片付け・活用 《3年後》6軒の空家を活用、 《5年後》10軒の空家活用</p>
<p><b>宣伝部</b></p> <p>俵ヶ浦半島の認知度向上ファンの獲得</p>	<p><b>【ミッション】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎地域内向け情報発信（半島TIMES）</li> <li>◎地域外向け情報発信、管理・運営（冊子、SNS、HP、など）</li> </ul> <p><b>【目的・目標】</b></p> <p>来訪者が毎年増加 → Facebookの「いいね！」の数やHPのビジット数（ハウステンボスの半分を目指す）</p>

## 若手リーダーを中心に、チーム俵が本格始動！

それぞれの部活において目的や目標、事業計画について検討した後、部活を先導的に動かしていくためのリーダー（部長）を選定。ご当地部部長には野崎町在住の中里竜也さん、トレイル部部長には俵ヶ浦町在住の山口昭正さん、学校部部長には野崎町在住の森宗幸彦さん、住まい部部長には庵浦町在住の山田信一郎さん、宣伝部部長には俵ヶ浦町在住の永末勝宏さんが就任することになりました。

各部活の部長は地元在住の30〜40代の若手が務め、町内会長・公民館長が部活の顧問として補佐して地域との橋渡し役に。それぞれの部活の部員（プロジェクトメンバー）は、関心があったりやつてみたかったり、各人の意向に合わせる形で地域住民に参加を募りました。こうして、地域の将来像から活用する資源、まちづくりサイクル、推進組織、具体的なまちづくりアクションプランまで描いた、ヒットがオモテの俵ヶ浦半島未来計画が完成しました。そして、俵ヶ浦半島の活性化プロジェクトを地方創生総合戦略のリーディングプロジェクトに掲げている佐世保市が、2017〜2019年度の3年間をかけて、この俵ヶ浦半島未来計画に沿ったまちづくりを重点的に支援することが決まります。

3章では、その3年間に実施された俵ヶ浦半島活性化プロジェクトについて、その内容やプロセスを明らかにしていきます。



### ご当地部部長／中里竜也さん



豊かな自然環境、景観、農産品、海産物、郷土の食文化をもっと生かして、半島で稼ぐ仕組みを作っていきます。まずは、皆さんの関心が高い展海峰ふれあい工房の販売力を高めるため、売り場をリニューアル、半島ならではの商品も開発し、訪れる方々だけでなく地域の皆さんにも、買い物や飲食を楽しんでいただけるよう改善していきます。

### トレイル部部長／山口昭正さん



平成25年度から3年間、各町の見どころを巡るトレイルルートが整備され、恒例となった「展海峰菜の花・コスモスウォーク」で多くの市民の皆様楽しんでいただいています。トレイル部では、樹木の伐採等による景観の改善や休憩スポットの整備、新たなルートの整備延長、モデルコースの紹介などの活動で、半島を楽しんでいただく環境を整えていきます。

### 学校部部長／森宗幸彦さん



半島の子供たちが学び、遊んだ3つの校舎を、半島の拠点として活用していきます。平成29年度は、野崎中学校跡を、地域防災拠点としての機能を維持しながら、子どもたちの放課後教室、地域住民のレクリエーションの場として活用。庵浦小学校、俵浦小学校跡を含む3校施設の有効な利用について、先進地の事例などに学び、計画づくりを行います。

### 住まい部部長／山田信一郎さん



あちらこちらに空き家が増えていく中、半島に魅力を感じて移り住んだ方もいらっしゃいます。住まい部では、まだまだ使える空き家について所有者の意向を確認し、半島に移り住む人を増やしていきます。市街化調整区域の制限についても、解決できるよう、市との協働体制で進めていきます。まず1年目は、1町1軒の貸家整備に向けてスタートです。

### 宣伝部部長／永末勝宏さん



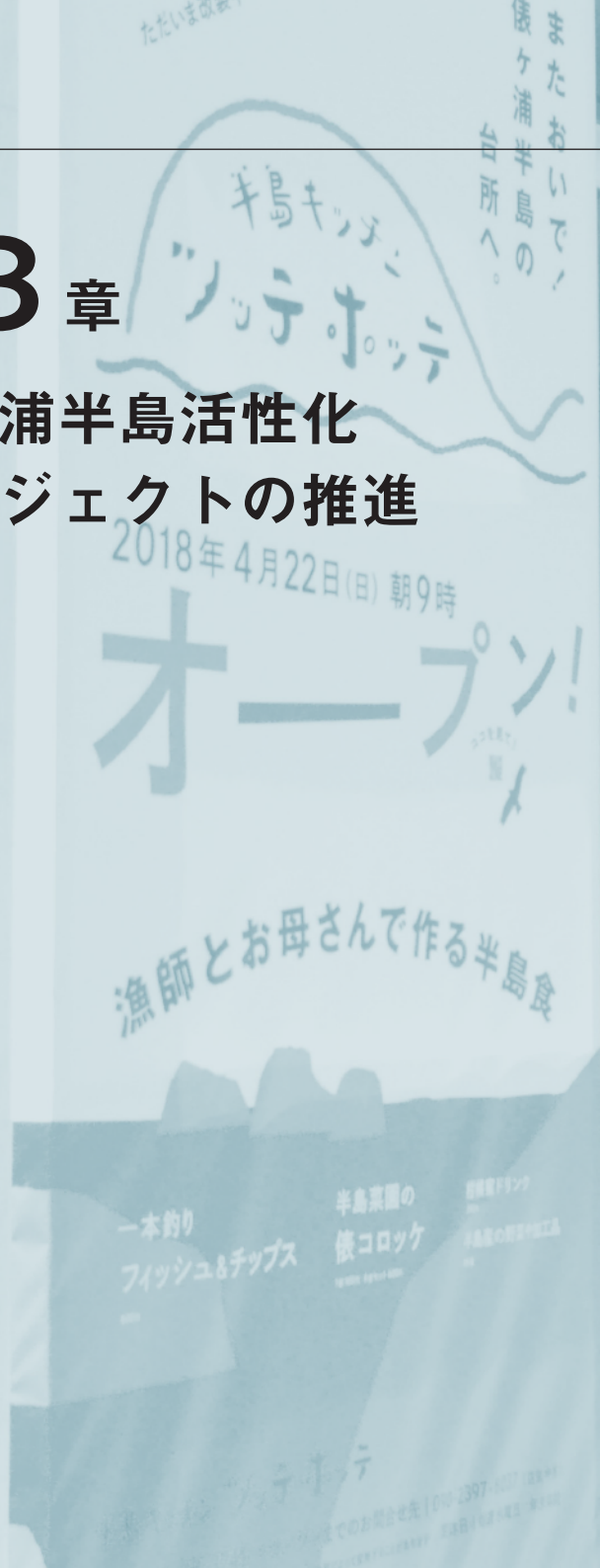
俵ヶ浦半島に来てもらう、楽しんでもらう、そして住んでもらうには、半島の魅力をしっかり伝えていくことが大事です。季節の話題、地域の祭り、日々の暮らしや人との交わり。ココに暮らす私たちだから知っている半島の魅力を、住民視点で発信していきます。地域内へのお知らせは、「俵ヶ浦半島 TIMES」で。部活の状況や貸家情報もお知らせします。



Photo / Koichiro Fujimoto

# 第3章

## 俵ヶ浦半島活性化プロジェクトの推進



プロジェクトは試行錯誤の連続

3年間のプロジェクトの変遷

2017年3月に策定した俵ヶ浦半島未来計画をもとに始まった、俵ヶ浦半島活性化プロジェクト。1年目は計画に掲げた「(一)当地部」「トレイル部」「学校部」「住まい部」「宣伝部」の5つの部活ごとに目標達成に向けた事業検討からスタートしました。「(二)当地部」では、俵ヶ浦半島活性化プロジェクトの1丁目1番地である、展海峰ふれあい工房のリニューアルに着手。店舗のリニューアルとともに、事業収入を確保するため新たに飲食商品の開発などを行ってきました。また「トレイル部」では、これまで各町内会の皆さんを中心に整備してきた「俵ヶ浦半島トレイル」を維持し、より良いものにしていくための整備手法を考える景観計画の策定に取り掛かります。(その他のプロジェクトは次ページの「変遷図参照」)

様々な地域の課題を解決すべく始まった5つの部活の取り組みは、計画どおりに順調に進んで行ったわけではあり

ません。プロジェクト推進・運営上の課題に突き当たるとも度々あり、その都度、事業内容や体制などを変えながらプロジェクトを進めてきました。特に、地域のマンパワー不足は今も大きな課題となっています。当初、他の部と掛け持ちする方も多く、役割が重複したり、部によっては活動継続が難しい状況にもなりました。また、例えば学校部では、廃校の活用という大きな問題に対し、地域には市から借り上げて事業を起こせるだけの力はありません。

各部活ともに新たな運営課題が顕在化していく中、2018年度は半島外の人材に注目しました。俵ヶ浦半島のファンを増やし、移住や起業を検討してくれるような関係人口の増加を目指すことで、マンパワー不足の解決を図ります。俵ヶ浦半島に関心を持つ外部人材の活用を積極的に行うことで、俵ヶ浦半島の可能性の新たな発見につながりました。

そのような試行錯誤しながら取り組みを進めていく中で、各部活から新たな発展の可能性を感じさせる「事業化のタネ」が見つかり始めます。地域住民も楽しみながら、出来るだけ負担も少なく、地域のスキルを活かし、今後の俵ヶ

浦半島のまちづくりの資金源にもなりうる取り組みです。2019年度は、それらの事業化のタネを育てていくことを中心に行い、その結果、部活単位の活動からプロジェクトベースの取り組みへと変化していききました。

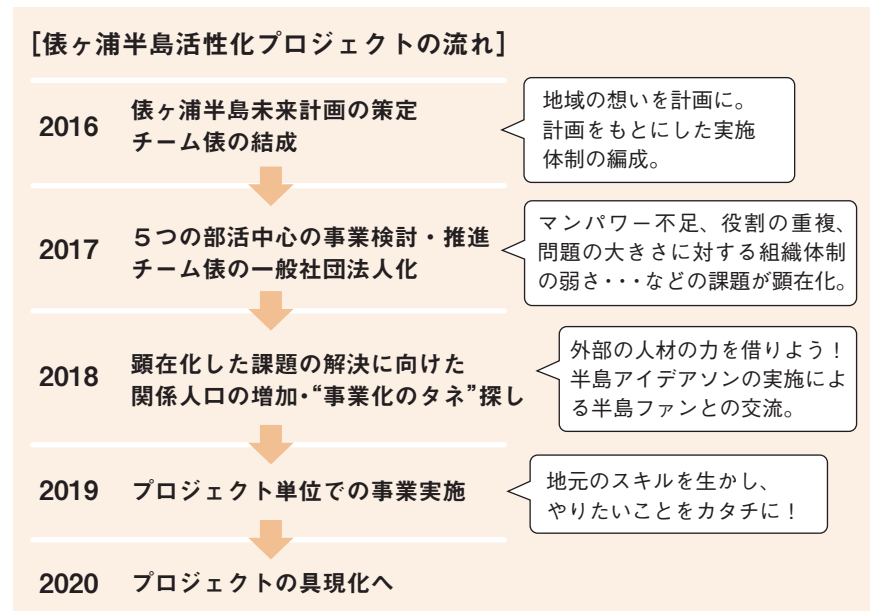
この章では、3年間の取り組みや進める上での課題、それに対する改善策など、各部活からそれぞれのプロジェクトへ変遷してきた経緯について、紹介していきます。



活動当初の部会の様子。公民館の会議室に集まり、各部意見交換を実施。



現在のプロジェクトの様子。現場に出て、専門家(写真左)に熱心に質問するメンバーの皆さん。



現在の主なプロジェクト

課題解決・改善に向けた取り組み

顕在化した課題

3-〇

・・・本章で紹介する項目番号

3-3

ハーブプロジェクト



**生産者意見交換会の開催**  
・重量野菜から軽量野菜への転換と、半島野菜のブランド化へ。

**俵ヶ浦半島の生産者との連携不足**  
・半島内生産者の商品が少なく、地域の稼ぐ化に繋がらない。

3-4

食の商品開発プロジェクト



**オペレーションの見直し・新商品開発**  
・新たな地域の作り手との連携など、地域のスキルに合う商品開発へ。

**インバウンド対応・商品需要の変化**  
・商品提供のスピード感など、オペレーションが複雑に。

3-5

木のものづくりプロジェクト



**スキルを活かした木工品の製造**  
・地域が楽しみながら資金調達できる伐採木活用商品の開発へ。

**ボランティアによる活動の限界**  
・景観保全の取り組みを継続させる担い手と資金が不足。

3-6

展海峰ウォーキングイベントの継続



**チーム俵がイベント主催に**  
・地域団体に代わり、チーム俵がイベントを主催。新たな企画も。

**ウォーキングイベントの人手不足**  
・主催していた地域団体の人手不足等により継続困難に。

3-8

遊漁船運航・釣り体験プログラム



**外の人材との協働・関係人口の増加**  
・新たな連携事業者・事業アイデアを探すアイデアソンの実施。

**廃校活用を地域で行うことの限界**  
・廃校活用した事業を地域で生み出すには地域力が不足。

3-9

空き家活用プロジェクト  
(移住体験施設検討)



**突破口として空き家活用事例の創出**  
・空き家を活用した農家民宿及び移住体験施設の検討へ。

**利活用の意向がある所有者が不明**  
・空家はあるが移住希望者に紹介できない。

3-10

SNS・YouTubeによる情報発信



**外部人材との連携による情報発信**  
・新たな地域人材との連携によるSNSを中心とした情報発信。

**地域住民による発信力の不足**  
・地域住民による発信には十分なスキルがない。

プロジェクトスタート時、  
2017年度の主な事業・成果

3-2

- ◎ツッテホッテ開店  
(ふれあい工房のリニューアル)
- ◎看板商品の開発



俵ヶ浦半島未来計画に掲げた  
5部活のアクションプラン

- ご当地部** 半島の仕事づくり稼げる化
- ◎農水産物のブランド化
  - ◎地域資源を活用した商品開発・販売
  - ◎展海峰ふれあい工房の売り場改善

3-5

- ◎景観計画の策定
- ◎景観保全のための伐採
- ◎伐採木の活用



- トレイル部** 半島訪問者の増加、景観維持
- ◎ウォーキングイベントの強化
  - ◎トレイルルートの造成・観光集客
  - ◎景観・拠点整備、維持管理、活用

3-7

- ◎廃校となる小中学校の利活用の検討
- ◎廃校利活用計画の策定



- 学校部** 半島内の学校の利活用
- ◎学校利活用策の検討、利活用
  - ◎学校の維持管理、運営
  - ◎地域拠点・コミュニティづくり

3-9

- ◎半島内の空き家の調査
- ◎移住受入に向けた検討
- ◎移住相談への対応



- 住まい部** 空き家を活用した移住受入・起業
- ◎空家物件、耕作放棄地の改修・活用
  - ◎移住・定住の環境整備・受入
  - ◎空家を活用した起業支援・ビジネス創出

3-10

- ◎俵ヶ浦半島 TIMESの発行、
- ◎俵ヶ浦半島 HPの作成



- 宣伝部** 半島の認知度向上ファンの獲得
- ◎地域内向け情報発信 (半島 TIMES)
  - ◎地域外向け情報発信、媒体管理・運営

半島が持たざる力を補う  
— プロジェクトをサポートするチームを編成 —

これまでまちづくり事業の経験がほとんどなかった地域住民だけで、これだけ多岐にわたる事業を推進するのは容易ではありません。活性化プロジェクトには、それぞれの事業推進をサポートする「サポートチーム」を編成。佐世保市まち・ひと・しごと創成総合戦略及び本事業の所管である佐世保市政経営課、空き家活用を支援する佐世保市都市政策課の市役所職員に加え、2017年度から俵ヶ浦半島の集落支援員\*として就任することとなった富田柚香子さん、2018年度から俵ヶ浦半島の地域おこし協力隊\*として就任した久米川泰伸さん、そして(株)ルーツ・アンド・パートナーズの佐藤直之さんなど、様々な専門家が、事業運営をサポートしました。

ただし、活性化プロジェクトの主役はあくまで地域住民。将来的にも取り組みが継続できるように、住民主体で事業を推進することが求められます。各部署ともに、月に1回程度の部会を開催。各部長を中心に部員である地域住民が集まり、状況の報告や意見交換などを行い、事業を進めます。また、俵ヶ浦半島内の4つの町内会の会長に状況報告を行うネットワーク会議を月に1回開催。町内会長たちに地域

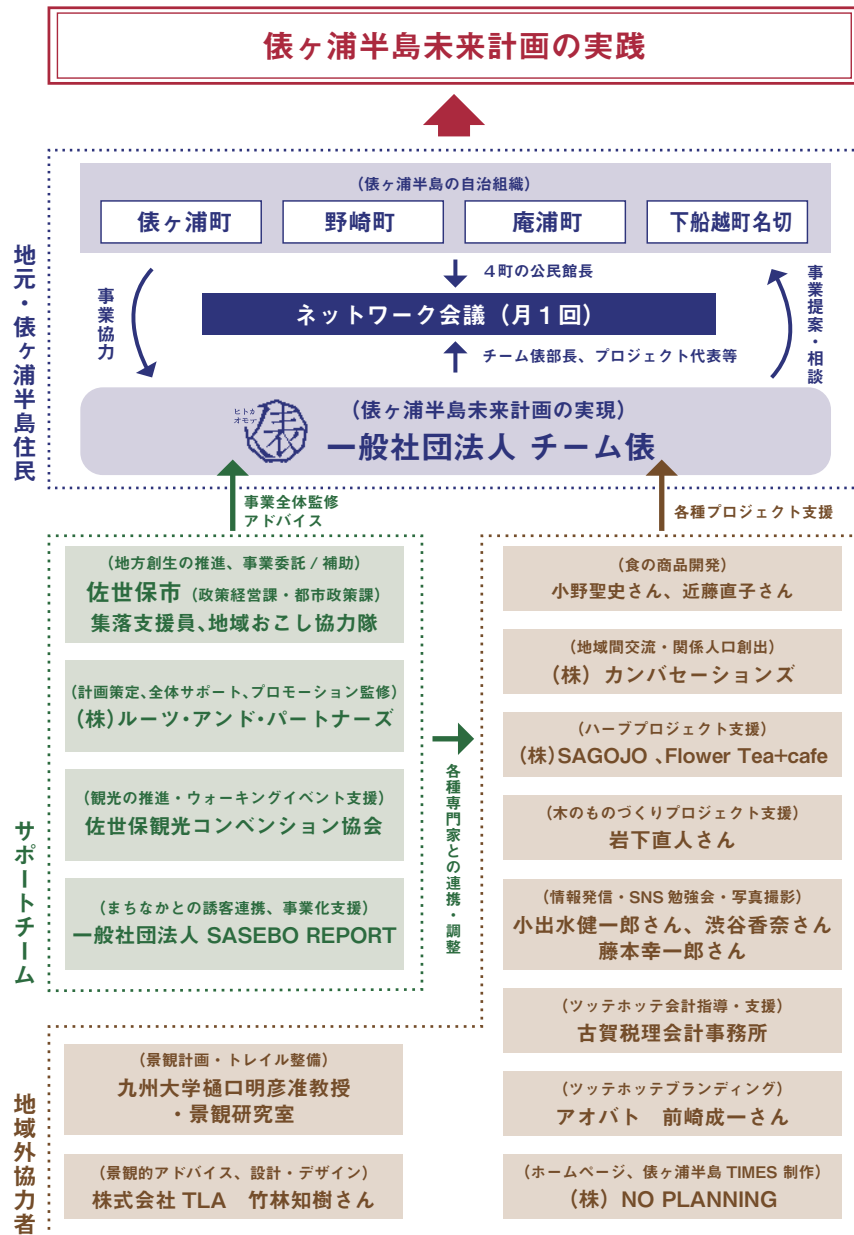
住民への情報共有や意見聴取、協力の呼びかけなどを行ってもらうことで、チーム俵と地域との間を繋ぐ役割があります。

40年後の俵ヶ浦半島の未来を住民の手で作ることを目的として結成した「チーム俵」ですが、結成当初は任意団体でした。しかし、収益事業の柱となる展海峰ふれあい工房のリニューアルオープンを契機に、責任や目的の明確化、ボランティアからの脱却、社会的な信用や事業の拡がりを確保するために組織のあり方を見直し、2018年4月に一般社団法人へと法人化を行いました。

\*集落支援員・・・地方自治体が、地域の実情に詳しく集落対策の推進に関してノウハウ・知見を有した人材を「集落支援員」として委嘱。集落支援員が集落への「目配り」として、集落の状況把握、集落点検の実施、住民と住民、住民と市町村の間での話し合いの促進等を行う。

\*地域おこし協力隊・・・地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱。隊員は、一定期間地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。

[プロジェクト実施体制]



## Interview Vol.1

「俵ヶ浦半島活性化プロジェクト」プロデューサー・佐藤直之さんが、  
 issue + design代表・寛裕介さんに聞く、「計画を実行する上で大切なこと」

2017年より進められてきた俵ヶ浦半島の活性化プロジェクトにプロデューサーとして関わってきたルーツ・アンド・パートナーズの佐藤直之さん。福岡に拠点を置き、俵ヶ浦半島以外にもさまざまな地域のまちづくりに関わっている佐藤さんがインタビュースるのは、数々の社会課題の解決に取り組んできたissue + designの代表で、地域活性化のためのデザイン領域の研究や執筆なども行っている寛裕介さんです。ブリックモールのさせぼを会場に公開イベントとして行われたインタビューでは、佐藤さんがプロジェクトを進める中で感じてきた課題や問題意識をベースに、寛さんにさまざまな質問を投げかけました。

なぜ地域と関わるようになったのですか？

Q. 私たちは、俵ヶ浦半島の未来の道標となる「半島未来計画」を、地域住民の方たちとつくりました。そして、この計画を実行していくまちづくり団体として、地元の若手リーダーたちを中心とした「チーム俵」を立ち上げ、町内会などとも連携しながらさまざまな活動に取り組んできました。私は、民間企業という立場からこの活動をサポート

するチームに加わり、プロデューサー的な役割を担っているのですが、今日は外部の視点からさまざまな地域づくりに関わられている寛さんに色々お話を伺いたいと思っています。まずは、寛さんが地域の仕事に関わるようになったきっかけからお聞かせ頂けますか？

寛.. 地域の仕事をするようになってから10年以上が経ちますが、もともと僕は広告のデザインの仕事をしていました。仕事自体は面白かったのですが、広告にはつくっては

消えていくような刹那的などころがあって、自分がつくったものが世の中に残り、役に立っていくようなことはできないのかと思っていました。周りの人たちに比べて、僕はそこまで広告の仕事が好きではないかもしれないと感じていたこともあり、もっと熱中できて、なおかつ他の人があまり足を踏み入れていない領域として、社会課題をデザインの力で解決するようなことはできないかと考え、issue+designを立ち上げました。そして、神戸で防災をテーマにしたデザインプロジェクトに関わったことがきっかけとなり、徐々に地域に関わりながら仕事をするようになっていきました。

Q. そこから生まれた「できますゼッケン」は、東日本大震災の時にも活用されていましたよね。もともとはまちづくりよりも、社会課題の解決が寛さんの大きなテーマだったのですね。

寛.. はい。その後、神戸で自殺やうつ病対策、孤独死の問題などに関わる仕事をしていく中で、日本の地域にはさまざまな最先端の社会課題があることが見えてきました。そして、地域というある程度限られたフィールドで課題解決に取り組んだ方が良い仕事ができるのではないかと考える



公開インタビュー時、壇上の寛裕介さん(右)と佐藤直之さん(左)。

ようになっていきました。その頃から、都市部よりも中山間地域や離島地域で仕事をやる機会が多くなり、社会課題から地域課題の解決に仕事のフィールドがスライドしていったんです。

**Q** 算さんは大学院に通われたり、数々の著作を出されたりしていますが、こうした研究活動と現場での仕事の関係については、どう考えていますか？

**算** 実践をしつかりしなければ、研究をしたり、理論を考えることもできないと考えています。また、親が転勤族で、僕は故郷と言える場所がない人間だということもあり、特定の地域に根ざして何かをするよりは、どの地域にも共通してあるような課題を解決する手段や方法を、できるだけわかりやすく、誰もが



災害時、ボランティアの力を最大限活用するために「自分ができること」を示す「できますゼッケン」。

ちとのワークショップや、町民の方たちへのヒアリングなどを行いました。その後2年にわたって、住民参加型のワークショップを計18回行い、最終的にはまちで最も大きなホールに約300人を集め、街の未来について話し合ってもらったワークショップを実現することができました。

**Q** 住民参加のワークショップは集客が大変だと思えますが、これだけ多くの人たちを巻き込むことができたのは、やはり住民の方たちと丁寧に関係性を築いていかれたからだと思います。

**算** ワークショップを始めたばかりの頃は、住民の方たちもそこまで乗り気ではなかったと思いますが、参加した人が楽しかったからと周りに声をかけてくれるようになったんです。僕は地域でプロジェクトを進めていくにあたって、とにかく住民の方たちが参加する場を充実させ、楽しい体験をしてもらうということを大切にしている、そのため設計を入念にしています。こうした積み重ねによって、ワークショップを重ねるたびにどんどん参加者が増えていきました。そして、最終的には、住民のみなさんがやりたいと思っていることをベースに、25のまちの未来像をまとめました。

使える形にして伝えることが自分の役割だと思っているところがあります。だから、さまざまな地域での実践から得られた知見を理論化し、本にするという作業が続いているんです。

**計画づくりのポイントは何ですか？**

**Q** 俵ヶ浦半島の未来計画づくりにあたって、算さんが指揮を取った高知県佐川町の総合計画についてまとめられた本などを読み、参考にさせて頂いた部分もありました。佐川町のプロジェクトでは、住民へのヒアリングを非常に丁寧にされている印象を受けたのですが、どのようなプロセスで計画づくりが進められたのか改めてお聞かせください。

**算** 佐川町には2013年から関わっているのですが、当時は街全体に活気がなく、地域のコミュニティもバラバラの状態でした。街に前向きな雰囲気がありませんでした。新しい町長が就任したのですが、町長がまちの未来のヴィジョンづくりを公約として掲げていて、そのお手伝いを我々がさせてもらうことになりました。1年目は役場職員の意識向上や地域住民との関係性づくりをテーマに、役場の方

**Q** 地域の仕事をしていると、ほとんどの地域が少子高齢化で人口が減少しているにもかかわらず、その土地で暮らしている人たちはあまりリアルな危機感を持っていないのが実態だと感じます。だからこそ、まちの未来のヴィジョンや計画は、いかに住民の方たちが自分ごと化できるようなものに落とし込めるかがポイントだと感じています。

**算** 役場の職員などは地域の課題を認識し、解決に向けて動こうとするのですが、地域住民にとってはそれがあまり重要ではなかったりするんですよ。だから、佐川町の25の未来像では、こんな未来を目指しますという書き方はせず、住民のみなさんがこんなことをしてこのまちを楽しみますという未来を描きました。結局計画というのは



インタビューは公開形式で行われ、平日夜にも関わらず佐世保市内外から多くの方が来場しました。

住民の方たちが実行していくものになるので、まずはその人たちが10年先にいまより楽しくこのまちで暮らせるかというところから考えていくべきだと思います。また、地域の未来ビジョンというのは、企業理念のように明確なゴールを設定するようなものではなく、ゆるやかにみんなが同じ方向を見ることができ、そこに何かしら自分に関係する内容が盛り込まれているということが大切なのではないでしょうか。

### 計画はどのように実行するのですか？

Q. 佐川町の25の未来像は、それぞれ実現に近づいているのでしょうか？

寛..25の未来像は、すべて実現に向けて取り組みが進んでいて、すでに形になっているものもあります。地域づくりの仕事をするようになって、東京などのビジネスの世界とはまったく時間の流れ方が違うということがわかったのですが、この未来像についても進捗具合はさまざまです。行政の担当者などは限られた時間内で何かしらの結果を出そうとしますし、僕自身結果を出さなければいけない立場

る予定です。

Q. 俵ヶ浦半島でもチーム俵の中のトレイル部というチームが、半島の景観を良くするために伐採した木でベンチをつくったことがあります。ただ、こうしたボランティアに近い取り組みは継続がなかなか難しいところがあると感じています。佐川発明ラボでは、林業から新しい事業をつくることを目的にされていますが、具体的にはどんな取り組みをしているのですか？



さかわ発明ラボ



住民がデザインから携わった個性豊かなベンチ。

でもあるので、最初は住民の方たちのお尻を叩きたい気分だったのですが(笑)、住民の方たちからすると1年という区切りには何の意味もないですよ。そんなことよりも、地域の人たちがやりたいと思うタイミングに合わせて、少しずつプロジェクトが立ち上がっていくという状態を大切にしたい方が良いということを、このプロジェクトを通して学ばせてもらっています。

Q. ゆるやかに進行している25のプロジェクトに対して、issue+designはどんなフォローをしているのですか？

寛..計画をつくってからの2年間は進捗確認の場を持つなど我々も色々サポートしていたのですが、いまは特別なフォローはしていません。ただ、25の未来像の中で、「ものづくり産業を育てる」「プログラミングとロボット教育」に関しては、我々がプレイヤーとなって計画の実行にあたっています。前者では、自伐林業から新しい仕事をつくることを目的に、「さかわ発明ラボ」というデジタルファブリケーション工房をつくり、後者については、小学6年生を対象に、地域の素材を集めて動物のロボットをデザインし、プログラミングで動かす「さかわロボット動物園」というプログラムを、来年度からまちのすべての小学校でスタートさせ

寛..この工房を通じて、まちに新たな熱を生み出すことを目指しているのですが、熱のつくり方というのはいくつかあるんです。まずは魅力あるヴィジョンをつくることで地熱のようなものが自然に生まれるというのが理想ですが、これはそう簡単ではありません。また、別の方法として、外からの新しい熱と混ぜ合わせるというアプローチもあり、さかわ発明ラボではこれを意識しています。その中で、地域おこし協力隊の枠で「発明職」というものをつくり、まずはインターンシップで2泊3日で佐川町に滞在し、まちの資源を活用して工房で色々な発明をしてみようという取り組みを行っています、結果的にアーティストなどさまざまな人たちがこの4年間で20名ほど移住しました。また、未来像のひとつとしてあった「散歩しやすいまちづくり」と連動する形で、散歩のために必要なベンチをつくるワークショップを住民の方たちと行ったりもしました。さらに、地元の事業者の技術と発明ラボのテクノロジーを掛け合わせて新しい事業をつくるような取り組みもしてきて、その中で昔からの住民と移住者の交流なども生まれています。

どうすればまちは動き出しますか？

Q. 寛さんのお話を聞いてみると、住民のアイデアや意欲を形にしていけることを非常に大切にされているように感じます。

寛..そうですね。あまり計画を忠実に実行している感覚はなく、出てきたアイデアはほとんど手を動かしながらみんなで取り組んでいきたいと思いますというスタンスですね。地域の中には、熱心に趣味の活動をされている方などもかなりいらっしゃいますが、あくまでもその人がやりたいことをベースに、それを外に開いたり、他の人とつなげるということを意識しています。まず地域に課題があり、それを解決するために人を探すと、この順番になりがちですが、それどううまくいかないケースが多いんですね。一方で、その人がやりたいことを後押ししていくという視点に立てば、まちなプレイヤーになりうる人というのはまだまだ多いんじゃないかと感じています。

Q. 俵ヶ浦半島でも、未来計画をつくり、チーム俵を中心にさまざまなプロジェクトを進めていく中で、ここにきてようやく地元の人たちが自ら動き始めたように感じていま

力を仰いでいるような印象があります。

寛..あくまでもそのプロジェクトをやりたいと思っている住民の主体性を尊重し、それを後押ししていく中でその人たちだけでは形にできない部分が出てきたら、地域の中の専門家や地域おこし協力隊などにつなぎ、それでも足りなかった時に初めて我々を含めた外部の人間がサポートするというケースが多いです。計画通りに物事は進まないという前提に立ち、あるタイミングで地域から湧き出るように何かが生まれてきた時に、それを後押しできるように準備を整えておくということが自分たちの役割だと思っています。まさにプロジェクトを起こしていくというのはそういうことなんだというのは、我々も地域と関わる中で勉強させてもらったことですね。



## PROFILE

インタビューされた人

寛 裕介 (issue+design 代表)

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科特任教授。博士 (工学)。一橋大学社会学部卒業。東京大学大学院工学系研究科修了 (工学博士)。2008年 issue+design 設立。以降、社会課題解決、地域活性化のためのデザイン領域の研究、実践に取り組む。著書に『持続可能な地域のつくり方』『ソーシャルデザイン実践ガイド』『みんなでつくる総合計画』『震災のためにデザインは何が可能なか』など。グッドデザイン賞、日本計画行政学会・学会奨励賞、カンヌライオンズ (仏)、D&AD (英) 他受賞多数。2019年7月より慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科特任教授。

インタビューした人

佐藤直之 (株式会社ルーツ・アンド・パートナーズ 代表)

大阪府生まれ。2004年に建設コンサルタント会社に入社、九州各地の公共交通の再生プロジェクトやまちづくりプロジェクトに従事。その後、九州大学の博士課程に入学し、NPO法人や地域活性化プロジェクトの事務局長を複数務めながら、地域密着型のまちづくりに携わる。2010年、唐津市のまちづくり会社に入社。商店街再生、集客事業、建物のリノベーション・再生をはじめとして、中心市街地活性化に関する様々なプロジェクトを企画・プロデュース。2013年にまちづくりプロデューサーとして独立、Rootsを開業、2016年に株式会社ルーツ・アンド・パートナーズを設立。「俵ヶ浦半島活性プロジェクト」では住民をサポートするチームのリーダーを務める。

す。例えば、半島では畑を持っている方が多いのですが、そういう人たちが歳を重ねて、もう重たい野菜はつくりきれないという状況の中で、ハーブをつくらうというアイデアが生まれ、地元の人たちが動き始めていますね。こういう自発的なチャレンジが生まれつつある中で、いかに楽しく続けてもらえるかがポイントになるのではないかと感じています。

寛..地域に足りないものを補うために外から人を呼んでも、あまりうまくいかないことが多いですね。逆にうまくいく時というのは、必ず必要なタイミングで必要なたとの出会いがある。だから自分が地域に関わる時は、そこにどんな人たちがいて、どういうチームで地域の課題に挑んだら最大のパフォーマンスが発揮できるかということに常に考えています。ひとつ先くらいまでのつながりの範囲内で行えることをやっていくことが最も大事で、それを続けているうちに、また新しいつながりやチャンスも生まれるのではないのでしょうか。

Q. 佐川町では、地元の人たちがやりたいことをベースにプロジェクトのアイデアやプロトタイプが生まれ、それをいよいよ可視化していくという段階で、初めて専門家に協

3-2

「半島キッチンツッテホット」のオープン

「倭ヶ浦半島の稼げる化」の1丁目1番地  
 | 展海峰ふれあい工房のリニューアル |

様々な課題を抱える倭ヶ浦半島。未来計画の実現には長い期間を要します。現在は佐世保市より、取り組みに対する金銭面・人材面での支援がありますが、それらが続くわけではありません。自ら稼ぎ、その利益によって倭ヶ浦半島の課題解決に活かし魅力的な地域にしていこうと、さらに地域にお金が落ちていく、循環型の取り組みを目指すことが求められます。

年間15万人（計画策定時）の観光客が訪れる展海峰はその可能性が十分にある場所です。しかしながら、その展海峰にあるふれあい工房では、集客・売上が伸び悩んでおり、従業員も一部地域のボランティアにより運営されていた状況でした。「倭ヶ浦半島の仕事づくり・稼げる化」をテーマに活動を始めたご当地部では、展海峰ふれあい工房の中でも重要施設として位置付けた、展海峰ふれあい工房のリニューアルオープンを目指して事業に着手しました。

橘蜜ドリンク「ミルク焼き芋」の4つを開発。「俵コロッケ」には、磯の恵が育んだアオサやひじきなどを使用し、俵型の4種類のコロッケに仕上げられています。



食の専門家である小野さんのアドバイスをもとに試作を重ねました。



地域の関係者を招いた試食・講習会を開催。



半島の土で育った農産品や磯の恵みのオリジナルソースを包んだ俵コロッケ4種。



魚は日替わり！半島自慢の一本釣りフィッシュ&チップス。



炭火で焼き上げた半島のサツマイモに焦がしミルクをアレンジ。



爽やかな香りの柑橘をとろりと煮込んだ4種の蜜、ホットやソーダ割りで。

まず、現在のふれあい工房の経営改善に向けた事業計画を検討。しかし、委託販売による手数料収入を中心とした農産品の直売だけでは、従業員を雇い、運営していくには厳しい状況があります。そこで、地域産品を活用した飲食商品を開発し、提供することになりました。展海峰ふれあい工房リニューアルの目指すべき姿は、「半島の台所」「地域のみんなのお店」。地域住民が作った農産品や倭ヶ浦半島でとれたものを使ったメニューを、地域住民が売る場所、とお店づくりの方向性を決めました。

収益の柱となるご当地商品の開発には、食の専門家である小野聖史さんにアドバイスをいただきました。ご当地部のメンバーと小野さんとの会議の中で、多くの観光客が訪れる展海峰にふさわしい商品とは何かを考え、海と山がある2面性、観光客が訪れるロケーション、地域拠点として必要な継続性などのキーワードが導き出されます。それらのキーワードから倭ヶ浦半島ならではの地域産品として「芋類」「海藻」「鮮魚」「柑橘」の4つに着目し、独自の看板メニューとして「俵コロッケ」「フィッシュ&チップス」「柑

## 【半島の持つ2面性とお店の主役・商品に光を当てたコンセプト】

### これまでの課題

- 工房と物販が一緒になった形でポジションがわかりづらい
- 商品が売れない
- 売れないから品増えが悪い
- 安い、商品に魅力がない
- 地元の人も寄り付かない

### ロケーション

- 展海岬という観光スポット
- たくさん観光客が訪れる
- 木を伐採するとお店のデッキからでも海が眺められる
- 夕日が綺麗
- 椅子を内・外に用意すれば、ゆっくり休める。
- 菜の花とコスモスも観れる

### お店の機能

- テイクアウトで半島の料理が楽しめる。
- 半島の美味しい魚を伝える
- 半島の美味しい作物を伝える
- 農作物や加工品が買える
- 半島の案内所
- 食を通して半島民が集う
- 一息入れる場所
- 半島土産も買える

### お店の展望

- 俵ヶ浦半島の旗艦店（名店）となる
- 半島ならではの高い実践の場であり、成功事例の場となる
- セミプロ集団が切磋琢磨する
- 半島民が誇りに思う場となる

# 半業

# 半島

コンセプト  
半島半業魂に火をつける!



飲食と直売  
本業と副業  
魚と農作物  
観光と日常  
日本と米国  
本土と島  
海と山

「とにかく  
旨い!!」  
と噂に

主役1  
竜也さん

主役2  
地元のお母さん達

二大看板商品

海魚の一本釣りフィッシュ&チップス

おふくろの薬園料理 俵コロッケ

自慢の料理を通して  
俵ヶ浦を伝える  
半島の案内所

新たな店舗づくりを進めていくために、ブランディングの専門家である前崎成一さんを招いて、ご当地部で勉強会・意見交換会を開催。店舗のブランドづくりに対する考え方の理解を深めるとともに、店舗に対する想いを語り合いました。その意見交換を踏まえて描いたコンセプトは「半島半業魂に火をつける!」。そして、その世界観を打ち出せる店舗として、店舗の名称は「半島キッチンツッテホッテ」に。漁師が一本釣りした新鮮な魚と、お母さんが畑で掘った旬の作物の、愛情たっぷりの半島食を提供する俵ヶ浦半島の台所です。

新しい店舗のオープンに向けて、店舗の改修にも着手します。建物のデザイン・設計は、トレイルの景観的アドバースをお願いでいた(株)TLAの竹林知樹さんをお願いしました。外観はこれまでのイメージを一新させる明るい白系で塗装。店内は、店舗の主役であるスタッフが立ち、看板商品が提供されるキッチンカウンターを主役にした空間に変えていきました。改修には、地元の若手大工や店長を務めるご当地部長・中里竜也さんをはじめ、地域住民の方々も外壁塗装の手伝いに来てくれました。そして2018年4月22日。半島キッチンツッテホッテはリニューアルオープンの日を迎えることができました。



完成した半島キッチン ツッテホッテのロゴ。



ご当地部メンバーを中心にブランディング勉強会を開催。



リニューアルオープンしたツッテホッテ。



地域住民が参加したDIYによる施工も。

客層に合わせた商品の変更へ

— インバウンド需要の取り込み —

4月のリニューアルオープン以降少し客足が伸び悩んだものの、佐世保港に寄港するクルーズ客船のインバウンド客が増加。店内の商品も外国人観光客に向けた唐揚げなどの軽飲食商品を追加したり、スナック類などの仕入れ販売を行うことで対応し、売上も増加に好転します。

夏から秋まではクルーズ船の寄港や展海峰のコスモスの開花に合わせて集客は順調に推移したものの、冬の季節や悪天候になると一気に客足は減ってしまいました。その期間、コンサートやクリスマス協会などのイベントを実施して集客・消費喚起に努めたものの、冬場の閑散期の売上は回復せず、10月のピーク時と、最も売上の低い1月を比較すると、7倍ほどの差が出てしまう結果となりました。

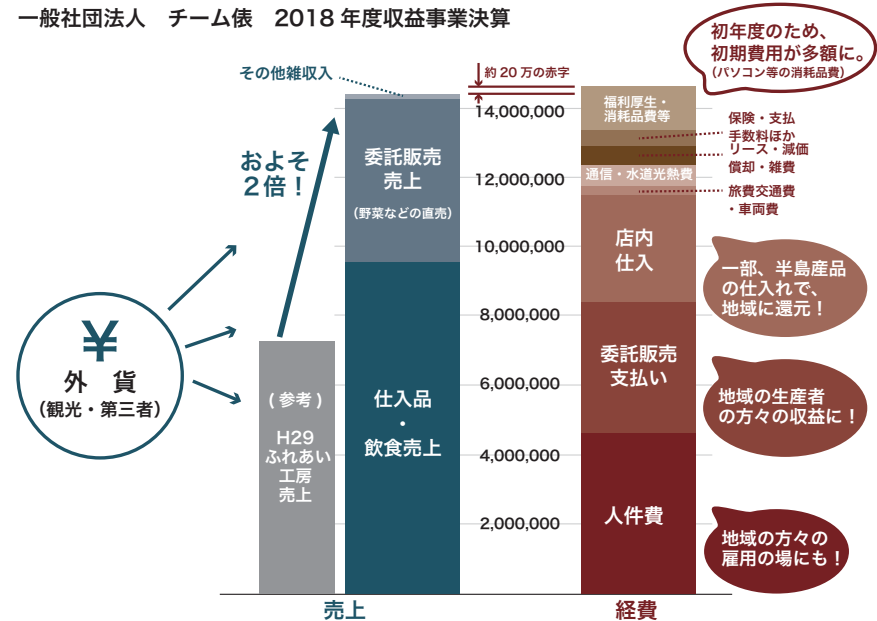
ただし大きな成果として、従前のふれあい工房時と比べるとおよそ2倍の売上となりました。開店時の設備投資で決算上は赤字だったものの、経常収支ではプラスに。地域の雇用創出の面でも、一般社団法人の理事1名、パートを3〜4名を雇用することができました。また、間接的にも俄コロッケなどの仕込みや釣った魚の買取、地元の農産品の売上など、俄ヶ浦半島への経済効果が生まれています。

一番の目的だった、地域に愛されるお店になれているか  
— 売上確保の一方で離れる地域住民との距離感 —

ツッテホットの1年目は、雇用や運営の基盤づくりの第一歩として成果を出すことができましたが、新たな課題も増えてきました。クルーズ船の寄港増加に伴い、ツッテホットには何台もの大型バスで外国人観光客が訪れました。外国人観光客は農産品を購入しないため、クルーズ寄港時には商品の構成を変えて対応しました。外国人観光客への対応は売上の確保のためにも必要なことではあったのですが、一方で、これまで訪れていた地域住民や農産品を置いている地元生産者が利用しやすい環境とは言えない状況がありました。一般社団法人チーム俄がツッテホットで行っている収益事業の目的は、「組織として収益を増やして俄ヶ浦半島全体の暮らしやすさを守っていくための活動資金を作ること」と「地域住民の活躍の場・収入を得る場を作ること」にあります。経営改善のために一方に注力した結果、地域住民が訪れやすい環境を作ることが十分にできなくなったことは大きな課題でした。

また、ツッテホットのオープンに向けて開発した軽飲食商品についても、課題が見えてきました。俄コロッケはスタッフが手作りしていたのですが、手間ひまかけた商品で

一般社団法人 チーム俄 2018年度収益事業決算



営業時間外にも仕込みを行う必要があり、その分原価が高くなっていました。またフィッシュ&チップスも冷凍すると味が落ちてしまうことがあり、売れ残りも問題となります。俄コロッケは仕込みを外注、フィッシュ&チップスも水イカのフライに商品を変更して対応することになりました。俄ヶ浦半島の名物となることを目指した商品開発でしたが、実際に提供する場合の店舗スタッフのスキルや、当初想定できていなかった顧客層への対応、ニーズに合わせた提供スピード・調理オペレーションの工夫の重要性に気づく結果となりました。



半島キッチン ツッテホットの直売所コーナー。

もう一度、生産者と向き合おう！  
― 生産者意見交換会の開催 ―

「俵ヶ浦半島の仕事づくり・稼ぐ化」をテーマに活動するご当地部では、ツツテホツテの運営と並行して、食を活かした住民参加の仕組みづくりを担っています。しかし、前項に述べたように、農産品の販売をはじめとする地域住民の活躍の場や収入を得る場を作ることが十分にできていませんでした。そこで、農林水産省の補助事業を活用し、俵ヶ浦半島における農産物を活用した活性化計画づくり、仕組みづくりに着手しました。まず農産物生産者と栽培状況の把握のため、ツツテホツテの出荷計画表などをもとに、生産品目や出荷量を調査。また、地域住民が参加して地域の食ビジネスを展開している宮崎県高千穂町秋元集落に視察に行き、6次産業化の取り組み・資源の活かし方などを、ご当地部を中心とした主要メンバーで学びました。

そして、実際に俵ヶ浦半島の農産物を活用した活性化の方向性や具体的な取り組みアイデアを探るため、俵ヶ浦半

キャベツや芋類などのいわゆる「重量野菜」は高齢の生産者の肉体的負担も大きく、出荷用の農産物の生産を徐々にやめてしまっているのだそうです。

そこで挙げたのが、重量野菜から軽量野菜への転換です。合わせて農産物を生かした加工品づくりや半島野菜のブランド化の可能性についても話題となり、特にアイデアとして挙げたハーブの栽培は参加者も高い関心を示しました。



生産者意見交換会には15名の生産者が集まり、活発な議論となりました。



俵ヶ浦半島では赤土で育った根菜類が多く栽培されています。(photo: Koichiro Fujimoto)

島の生産者を招いた「俵ヶ浦半島農産物生産者意見交換会」を2019年1月に開催。1回目は農産物の生産の現状・課題の整理を行うとともに、個人や半島全体における今後の想いについて意見交換を。2月に開催した2回目では、1回目に特に関心の高かったテーマをもとに、具体的な取り組みについて意見交換を行いました。

俵ヶ浦半島の農業を支える耕作地は、海に面した斜面に開墾された日当たりの良い段々畑。赤土の土壌環境を活かして、キャベツや玉ねぎ、芋類などの野菜のほか、ミカンやびわなどの果物が栽培されています。生産者は、個人で少量・多品種の農産物を生産されている方が多く、ほとんどが家庭用に生産したり、個人販売だけを行っている状況です。個人のため、生産力や栽培に関する知識不足や、少量生産のため販売先や利益の確保も課題でした。

中でも、近年特に問題となっているのは、俵ヶ浦半島の生産者の高齢化。高齢化により畑の手入れが十分にできずにいると、生産力自体が落ちてしまいます。また、斜面に作られた小さな畑では車や重機の進入が困難な箇所もあり、

### 3 農産物の課題

#### 生産力・知識の不足、販路の不足、加工品のハードル高さ。

- ・売り先の確保。少量だと利益が上がらない。ブランド化をしたい。
- ・同じ時期に同じ野菜があると、地元は買わない（予約制にして購入）。
- ・キズモノも売り物も同じ手間がかかっているのに金額につながらない。
- ・加工品づくりは届け出制のハードルが高く、設備を整えてまでできない。ツッテホッテでは仕様が限られるが検討の余地はある。品目によって基準が異なり、条例改正の動きもある。
- ・多肉植物の苗づくりはなかなか難しい。
- ・畑によって品質が異なる。
- ・野菜の知識不足（最適な肥料、農作物にとって適当な時期）。
- ・冬はお客さんがいない。
- ・野菜が欲しいけど、ツッテホッテに何も無いのが残念。
- ・畑の草の始末をしたい。見かけを良くしたい。
- ・高齢化によって畑の手入れが面倒になっている。生産力が落ちている。

### 4 個人の方向性

#### 軽量野菜、農作物を生かした加工品づくり・ブランド化。

- ・高齢化で、重くない野菜を作りたい（軽量作物）。
- ・ツッテホッテに気軽に持ってこれるようにしたい。
- ・お客さんが求める野菜を作りたい。
- ・軽量作物を作りたい。稼げる農業を目指したい。
- ・半島のブランド化（ピワ、かぼちゃをアイスに）。農産加工品を作りたい。
- ・使われていない野菜の活用・利用（主にキズモノ）。
- ・ごぼう、里芋を作ってみたい。

### 5 半島活性化の方向性

#### 農産加工品・ブランド化、食体験、ツッテホッテ販売促進。

- ・農作物の加工品を作りたい。
- ・子供たちの声が聞こえる、集まるような半島に。
- ・宣伝かけてブランド化。味・物量を安定させたい。半島のブランド化。
- ・梅干しや味噌作りを体験料をもらってできないか。
- ・明るい半島になって欲しい。
- ・軽量野菜の今後の展開も考える。
- ・半島で美味しいと評価が高いのは重量野菜のじゃがいもとキャベツ。
- ・ツッテホッテで野菜を持ち寄って地元の交流ができるように。
- ・個人ではできない。みんなで取り組むと違った方向が見えてくるのではないか。
- ・ツッテホッテで「野菜の日」を決めて販売する（認知度が高まれば買ってもらえる）。
- ・出荷できないキズモノを活用して、サツマイモスティックなどの加工品を作る。
- ・空家や学校を活用して加工品づくりができないか。
- ・ツッテホッテで1年中売れる・出荷できる状態にしたい。そのためには、集客できるような定期的なイベントを開催してはどうか。
- ・個人では限界がある。漬物やらっきょう漬けなど、ツッテホッテでまとめて加工できる体制ができないか（キムチ教室も）。
- ・昔作っていてブランド化の可能性があるのはサトウキビ。ハーブ関係も軽量作物で可能性はある。
- ・外国人を視野に入れるなら、ツッテホッテでお茶の実演販売も良い。
- ・生産者（作る）とツッテホッテ（売る）の役割分担を明確に取り組む。

## 俵ヶ浦半島農産物生産者の意見交換による地域活性化の方向性

### 1 検討メンバーの概要

#### 俵ヶ浦半島内で野菜・果物を生産する生産者の皆様15名。

- ・俵ヶ浦町・・・佐伯公子さん、山口等さん、山口昭正さん、山口郁さん、長谷川紀美枝さん、長谷川澄子さん、佐野サト子さん
- ・庵浦町・・・吉村恵子さん、大谷好子さん
- ・野崎町・・・森宗美津子さん、森宗カツ子さん、中里和子さん
- ・下船越町・・・富永恵子さん、岩崎純子さん、岩崎民子さん

### 2 農産物の現状

#### 少量多品種の農産物を生産。家庭用・個人販売が多い。

- ・里芋、サツマイモ、大根、じゃがいも、キャベツ、白菜、スイートスプリングを作っており、市場・ツッテホッテに出している。
- ・玉ねぎ、キャベツ、春かぼちゃ、びわ、米（個人予約のみ）を主に作っており、青果市場やエレナに出している。
- ・コスモス、菜の花のみ出荷している。
- ・売るほど作っていない。
- ・自分の家で食べる分だけ作っている（過去に漬物は作っていた）
- ・個人販売のみ。梅干しを作りたいけど、今は作れない。
- ・野菜は個人が食べる分だけ作っている（くり、しいたけ、たけのこ...）。
- ・野菜は自宅のみ。多肉植物の寄せ植えを行なっている。
- ・家庭菜園作りをしている。アオサを作っているが、温度によって変化するため安定しない。自分のところだけ。
- ・スイートスプリング、ザボン、甘夏、ハーブを作っている。
- ・畑を広く作っているけど、1人で作っているのでは作れない。
- ・大根、ネギ、キャベツ、人参、白菜、いもを作っているが、上手ではない。
- ・みかん、スイーツスプリング、かぼちゃ、ボンカン、伊予柑、パール柑、デコボン、びわを作っている。
- ・温州みかん、スイーツスプリング、ボンカン、びわ等の柑橘類を生産。
- ・キャベツ、じゃがいも、かぼちゃ、いも、カリフラワー、玉ねぎなど。ほとんど青果市場に出している。

## 半島のブランド化を目指して

### ― ハーブプロジェクトのはじまり ―

生産者意見交換会では、講師を招いた勉強会や半島内農家の交流会によるスキルアップ、料理人を招いた勉強会や試食会の実施、飲食店向けの半島食材のPR・販路開拓、キズモノを活用した加工品づくりなど、様々なアイデアが挙げられました。ただし、農産物の生産に対する体力的負担が大きな課題であったため、実施する取り組みは、生産者が無理なく楽しくできることが重要です。そこで、意見交換会で特に盛り上がったハーブの栽培について、「俵ヶ浦半島ハーブプロジェクト」と銘打ち、実験的に動き出すことになりました。

意見交換会での盛り上がりが冷めないうちに次の展開に移らなければなりません。俵ヶ浦半島の生産者やサポートチームには、ハーブ栽培や加工に関するノウハウを持った人はいません。適切な専門家を至急探す必要があった時、佐世保市役所政策経営課の嘉福洋平さんがちょうど名刺交換していた株式会社SAGOOJOに相談することに。SAGOOJOは全国の「旅人」のネットワークを持つ会社で、様々な特異なスキルを持つ人と地域をつなぐ取り組みをされています。

SAGOOJOの石田奈津子さんとの連携により企画を詰めていき、意見交換会からわずか1ヶ月、2019年3月18日に「俵ヶ浦半島ハーブプロジェクト」のスタートアップミーティングを開催することになりました。この会は、専門家を招いた勉強会を通じて生産者のやる気を後押しし、ハーブ栽培のその先を具体的にイメージできるようにする狙いがあります。招いた専門家は、福岡のハーブアーティストのKANAMEさんと出張料理人の志田浩一さん。本格的なハーブ料理を味わいながら、ハーブと軽量野菜について、食の活用・栽培育成・マーケティングなど知識と興味を深めてもらいました。

スタートアップミーティングでは、最初に石田さんより佐世保市内でハーブや軽量野菜を使用するイタリア料理やフランス料理店などにヒアリングした結果報告がありました。佐世保市内では、特殊なハーブや彩りに用いるマイクロ野菜などを安定的に入手することが難しく、仕入れに苦労されているとのこと。また、安定的に仕入れることができるのであれば使用量を増やしたいという声も。

ハーブアーティストのKANAMEさんからはハーブの種類や効能、栽培や活用する方法について説明していただきました。なかでも生産者の関心を集めたのは、日本在来品種である和薄荷（ニホンハツカ）。圧倒的なメントール含有

量を持つ個性的なミントですが、現在は岡山県や北海道の一部でしか栽培されておらず、とても希少な品種になっているそう。その和薄荷を俵ヶ浦半島で栽培することでブランド化にもつながるのではないかと、ハーブ栽培に対する前向きな意見交換がなされました。

この日まではハーブ栽培に漠然としたイメージしか抱いていなかった生産者たちでしたが、専門家の話を聞き、料理を味わい、ハーブの可能性を知りながら次第に前向きになっていく姿がありました。



スタートアップミーティングでは、KANAMEさんが実際に栽培している様々なハーブを前に、その可能性について学びます。



KANAMEさんは製造・販売しているハーブ商品も持参。生産だけでなく、加工までを見据えて勉強。



出張料理人の手によるハーブを使った料理が多数並び、イメージを膨らませる参加者の皆さん。

## 俵ヶ浦半島でできる生産方法を模索 ― ハーブの栽培・商品化に向けて ―

このスタートアップミーティングの熱気冷めやらぬ翌日、旧野崎中学校の花壇でKANAMEさんによるハーブ苗の植え付けと育て方の実習が行われました。また、後日スタートアップミーティングで要望が多かった和薄荷の苗も仕入れ、合計で14軒の生産者により、俵ヶ浦半島内の9箇所畑で試験栽培の植え付けを行いました。

2019年度に入り、植え付けした和薄荷の生育状況の確認に合わせ、収穫・乾燥方法に関する講習会を開催。これまで順調に育っていたかに見えましたが、KANAMEさんに確認してもらおうと交雑が発覚。購入した苗自体が交雑しており、当初植え付けていた苗は全て廃棄処分し、すぐに新たな植え付けを行うことになりました。和薄荷としてブランド化して販売するためには、品質の確保が重要となります。栽培は容易な品種ではありませんが、交雑に注意することはもちろん、付加価値をつけるための無農薬での栽培は基本、大きくなりすぎるとメンテナンス感覚が薄まるため有機肥料の使用量にも注意が必要です。

香りが重要な和薄荷は、収穫にも注意しなければなりません。葉に少しの刺激を与えただけでも発酵が始まりイモ

臭が出るのが分かりました。そのため葉についた土を落とす洗浄作業や梱包など、生産者の皆さんが共通して行うルールづくりも出荷や製品化に向けて必要となります。

和薄荷生産と並行して、販路開拓に向けたモニター調査を実施。2019年10月に開催した「展海峰コスモスウォーク」では、乾燥させた和薄荷を使用したハーブティを休憩ポイントで試飲提供を行いました。歩き疲れ始めた頃にすっきり飲めるハーブティは好評で、販売を希望する声も。

また、11月に収穫した和薄荷の8割は、SAGJOの石田さんが探してきた大阪のレストランに購入していただき、和薄荷を使用した料理やデザートとして提供されました。地域の食材に着目したレストランで、和薄荷だけでなく、俵ヶ浦半島の食材の活用も見据えており、今後の展開が期待できる結果となりました。

スタートアップミーティングから1年、生産者の皆さんもこれらの結果に気持ちも後押しされ、新たな地域のメンバーも増えていきました。2019年度最後の会議では、ハーブの栽培だけでなく、和薄荷のハーブティの商品化もやりたい！と、皆さん。今後、フレッシュのハーブの出荷方法の確立やハーブティの加工・パッケージなど商品化に向けた具体的な取り組みを進めていきます。



最初の実地研修では、旧野崎中学校の花壇を利用して、ハーブの植え方について学びました。



和薄荷を活用したハーブティやスイーツなど加工の可能性についてのレクチャーも。



コスモスウォークの休憩スポットには毎年多数のウォーキング参加者が振る舞いを楽しみに。



休憩スポットでアイスハーブティを提供。参加者の反応を直接伺いました。



和薄荷を活用した商品開発に向け、パッケージの方法、注意点などを学びます。



1年間の活動を通して、参加者のモチベーションも高まり、次第に参加者も増えてきました。

来訪者が俵ヶ浦半島に求める食とは？

— 新たな新商品の開発に向けて —

ツッテホッテのオープン後も、俵ヶ浦半島の地域産品の販売・活用による稼働化を目指して引き続き飲食商品の検討を行いました。まず、観光客の俵ヶ浦半島のゲートウェイとなっている展海峰に来訪する人に対し、その特性や佐世保市における観光の状況、食の嗜好などについて把握するため、聞き取り調査を行いました。佐世保の食に対する期待として「魚介類」「佐世保バーガー」が多く、実際に佐世保バーガーは昼食として食べている方も。また、ツッテホッテに求める機能としては「買い物」「飲食」がほぼ同数の結果となりました。

新商品の開発にあたっては、俵ヶ浦半島の食材の美味しさが味わる、その魅力が伝えられるメニューでなければなりません。また、普段なかなか味わえないような、他の地域とは違う特色を出していくことも重要だと考えています。活用する地域産品の選択、飲食メニューの検討などは、

頼することで、作業負担の軽減、安定した提供の体制の確保を図ります。

### 背伸びしない商品開発を

— 俵コロッケ・スープの反省 —

開発した3種類のお魚だしのスープとおこわは、その後の試食アンケートでも非常に好評な結果となりました。し

フードコンサルタントの小野聖史さんに加え、料理家の近藤直子さん、佐世保市内で地元食材にこだわったメニュー提供をしている飲食店REPORTの中尾千草さんにアドバイスをもらいながら進めてきました。

展海峰に来られるお客さんからは、コロッケと一緒に食べられる主食的なメニューや魚介類を使った商品希望される声も挙がっていました。そこで、風味が濃厚な牡蠣や俵ヶ浦半島の旬の野菜を活かせるメニューとして、お魚だしの「スープ」と「おこわ」の開発に絞り込むことに。いずれも素材の旨みを十分に引き出すことができ、旬の食材を活用することで季節感や地域感を出すことができます。また、佐世保には、「いりこ」や「あご」のように極上の出汁が取れる材料があります。最近では自宅で出汁をとる家庭も少なくなっていると聞きます。出汁にも地域産品を積極的に活用することで、その普及にも役立てられれば、との思いも込めました。

ツッテホッテでの課題となっている調理工程に関しても工夫が必要なため、仕込み過程の一部をREPORTに依頼し、増えるクルーズ船観光客への対応やツッテホッテの経営改善が急務となり、実際にスープやおこわを販売できる準備が整っておらず、現在も提供はできていない状況です。それには、ツッテホッテのスタッフも通常営業に対応しながら、作り慣れていないスープメニューを一から学び提供できるようにするには負担が大きいことも理由としてあります。3-2でも述べましたが、ツッテホッテオープン時に開発した俵コロッケなどについてもメニューの変更をせざるを得ない状況となりました。



お魚出汁の深い旨味をストレートに味わうコンソメスープ。



半島産の甘い玉ねぎを煮込んだトマトの赤いスープは、季節の野菜や海産物を具材に。



スパイシーな白いスープは、パンチの効いた辛さと半島野菜の甘みが絶妙なハーモニー。

地域産品にこだわった飲食メニューの提供には、必然的に手間がかかります。一部の工程を外注することも可能ですが、その分コストに影響することになります。展海峰に訪れる現場の顧客やスタッフのスキルだけを考慮すると、高単価の商品を提供は難しい状況です。160円の俵コロッケの販売価格に対し、地域住民から高いのでは、という声が届くことも。

商品の値段とその価値を理解し、購入してもらえるターゲット層に対するマーケティング調査などが十分にできていなかった点も反省点として挙げられます。ツッテホッテには、展望台目当ての国内観光客やクルーズ船の外国人観光客、俵ヶ浦半島の自然環境を知りその豊かさを求める人、そして地域住民と様々な人が訪れます。この問題は、売り上げの比重としても多くなったクルーズ船観光客への対応と、お店のコンセプト、働くスタッフのスキル、提供する商品のバランスなどが乱れてしまった結果だと思われれます。今後、地域産品を活用した商品開発には、ツッテホッテの運営とは切り分けた形で、地域の特性を理解し調理スキルを持ち、商品を製造してくれる方との連携が必要になりました。

## 新たな作り手の誕生

### ― マザーズたわらんだとの連携 ―

そうした中、俵ヶ浦町の女性グループが調理施設をつくり「マザーズたわらんだ」を結成しました。最初は地元の会合に料理を出していましたが、その美味しさが評判となり、今では市内の直売所に卸すようにもなりました。そこで、マザーズたわらんだの皆さんと一緒に新たな飲食メニューの開発を進めていくことに。

2019年10月には、翌日に控えたコスモスウォークでの試験販売に向け、マザーズたわらんだの皆さんと新たなおこわの試作を行いました。専門家と相談しながら食材を出し合った結果、旬の秋ナスとミョウガのおこわ、俵ヶ浦半島の特産品であるジャガイモとひじきのおこわ、ジャガイモと青菜のおこわの3種類を作ってみることに。おこわは、それぞれ食材を活かすためにひと工夫。ジャガイモには柚子の風味を加え、ナスは皮をきんぴらにして、食感も楽しめるようにしています。この日はおこわの他にも新鮮なエソを使った「魚ロッケ」も試作。食べ比べながら、さらなる味の工夫に向けて議論を重ねました。

そして迎えたおこわの試験販売当日。前日に試作した3種のうち「秋ナスのおこわ」に絞って調理・販売を行いま

したが、大好評であったという間に完売となりました。魚ロッケも早々に売り切れ、新商品に対する期待度の高さが伺えます。

マザーズたわらんだで、チーム俵ご当地部のメンバーでもある長谷川紀美枝さんは、「おこわと言えば山菜や赤飯のイメージでしたが、ナスやジャガイモなど、いろんなメニューが作れるのは意外。私自身もおこわを蒸す機会が減りましたが、お客さんも普段食べられる機会が少なくて売れたのでは。魚ロッケも俵ヶ浦半島らしく、分かりやすくて良かったのかもですね。」と振り返ります。



半島で採れた旬の食材をたっぷりを使用したごちそうおこわ。



ナスやジャガイモを使用した秋のおこわ。



近藤さんに調理の工夫を学ぶマザーズたわらんだの皆さん。



おこわの試作販売したコスモスウォークでは、すぐに完売。

俵ヶ浦半島特産のジャガイモやひじきに加え、秋はナス、冬は牡蠣……と俵ヶ浦半島の旬の食材に合わせて様々な味わいが楽しめる「俵ヶ浦半島季節のおこわ」。現在、新たな季節の食材を使った試作を行っており、今後も調理や提供、販売の方法などの検討も引き続き進めていきたいと思っています。

## トレイルコースの魅力アップへ

## ― 眺望を確保する伐採と伐採木の活用へ ―

チーム俵において、「俵ヶ浦半島訪問者の増加と景観維持」をテーマに活動するトレイル部では、これまでに作成した4町の「俵ヶ浦半島トレイル」をベースとして、景観づくりや地域資源の保全に取り組みます。

2016年度に策定した「俵ヶ浦半島未来計画」では、その策定過程において、景観、自然環境、食、歴史という半島固有の価値を保全していくことが重要であると再認識しました。「俵ヶ浦半島トレイル」は、地域住民の昔語りから引き出された様々な景観スポットや歴史遺産などの地域資源をつなぐルートとして考案したため、トレイルルート上の景観や地域資源を住民自らが維持し、活用することは、結果として地域に対する愛着・誇りを高めていく重要な活動とも言えます。

2017年度は、「俵ヶ浦半島トレイル」づくりに引き続き、九州大学景観研究室の樋口准教授の協力のもと「俵ヶ

浦半島景観計画」の策定に着手しました。この計画は、ト

レイル部の活動を通じて地域住民が自立的・計画的に景観や地域資源を保全していく手引きとなるように作成しました。単なる景観保全だけでなく、伐採木の活用による収益事業への可能性、木工作家との連携、自然環境をフィールドにした滞在コンテンツづくりなど、トレイル部の活動が生み出す地域への効果を検討。景観計画を片手に、楽しみながらトレイルの活動を継続することで、地域の未来を拓いていくことを目指します。

景観計画の策定後、早速、景観計画をもとにトレイルコースの整備に取り掛かります。一度にすべての箇所を整備するのはマンパワー的にも難しいため、現地調査により優先順位を確認。ツツテホッテのオープンに向けて準備をしていた展海峰ふれあい工房裏手の樹木の伐採から行いました。伐採はトレイル部の男性陣に加え、呼びかけに乗ってくれた手練れの方々。普段から俵ヶ浦半島内の伐採を行っていたため、十数メートルに成長した樹木の伐採も何のその。スムーズに作業を終え、これまで木陰で暗い雰囲気だった

ふれあい工房からも、九十九島の美しい風景を望めるよう

になりました。今では展海峰の人気スポットのひとつ。ツツテホッテで購入したドリソク片手にベンチに座って休憩するお客さんの姿も見られます。

トレイル部は、伐採木の活用にも乗り出します。菜の花ウォークを控えていたため、休憩ポイントに設置するためのベンチづくりをすることに。ここでも地元のお父さん方が大活躍。丸太の形状をうまく活かしたベンチが出来上が

りました。

トレイル部は、地元の子供たちを対象とした木育事業にも取り掛かりました。佐世保市内で自然体験活動やクラフトを行っている岩下直人さんに講師をお願いして、子供達を対象とした「積み木ワークショップ」を開催。植林された森と自然の森の違いを知り、森には何かがあるかを考える。そして、大量の積み木に埋もれて感触を確かめ、積み木で森を作りました。子供たちには、考えを誘導したり、知識



展海峰・ツツテホッテ裏の眺望を確保するため、樹木を一部伐採。

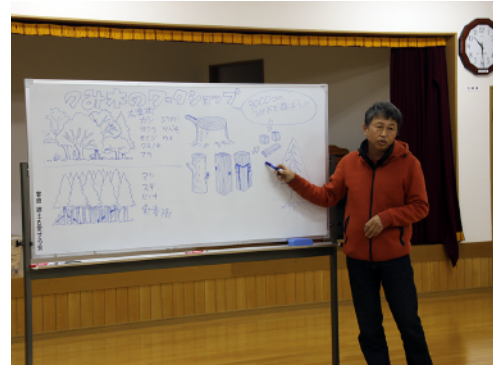


眺望が確保されたツツテホッテ。景観スポットにはベンチを設置。



伐採した樹木の活用のため、旧野崎中学校の木工室を利用し、ベンチづくりを実施。

を植え込むことはせずに、森の形や木に触れる体験、積み木で森をつくるプロセスを通じて、景観や森の環境、ここに生きる生物を意識するきっかけづくりを目指しました。このワークショップの後には、トレイル部のお父さん方が作ったベンチの仕上げ作業にも子供たちは参加。森の資源が形を変えて生活に役立つものになる過程を体験し、森の環境と普段の生活が繋がっていることを実感してもらいました。



ワークショップでは、最初に講師の岩下さんより、森の環境や木の成長についてレクチャー。



大量の積み木を使って、自分だけの形を作っていく子供たち。大人も一緒になって積み木の森を制作。



トレイル部のお父さん方が作ったベンチにヤスリがけ。学びと遊び、体験を通して俵ヶ浦半島の自然環境を学びます。

## ボランティアの限界も

### 活動継続のための担い手と資金の不足

景観計画の策定に始まり、景観改善のための伐採、伐採木の活用、子供たちを対象とした木育事業など、様々な事業を実施することができましたが、一方で課題も顕在化しました。このような活動を続けていくための担い手や資金の不足です。木の伐採には、活動を担う方々の人件費はもちろん、チェーンソーの燃料や替刃などの実費もかかります。これまでは環境省の助成事業などに応募して実施してきましたが、これらの助成がずっと続くわけではありません。伐採やベンチづくりなどを今後続けていくための活動の収益化の仕組みづくりも並行して行う必要があります。

## 地域住民のスキルを活かす！

### 木のものづくりプロジェクトの始動

そこでトレイル部では、景観改善のために伐採した木を使ってオリジナル商品を作ろうと、「木のものづくりプロジェクト」を始動します。岩下直人さんに講師をお願いして、まずはアイデア出しから。地元のタブやカシ、マテバシイ、

ヤブツバキなどの自然木から、みんなで楽しく作れて、俵ヶ浦半島に遊びに来る人達にも喜んでもらえるものを考えました。大きな材は丸太のまま使ってベンチに、子供たちが安心して遊べる積み木は？、俵ヶ浦半島で遊んでもらえるバードコールもいいねーと、たくさん出されたアイデアから、まずは「バードコール」の試作品を作ってみることに。旧野崎中学校の木工室を借りて、手持ちの工具や照明を持ち寄りました。

最初に岩下さんから、木の特徴や乾燥について、製造工程や工具の使い方、けがをしないように注意点などのレクチャーを。そして早速バードコールづくりへ。材料は展海峰のツツテホツテ裏の眺望を確保するために伐採し、乾燥させていたヤブツバキを活用しました。様々な枝ぶりの中でも、虫喰いがなく、手頃な形状の箇所を探しながら、それぞれイメージする大きさとカットしていきます。

バードコールを作ろうと決まった後、すぐにたくさんの試作を始めていた中里孝喜さんは、日曜大工が趣味とあって、慣れた手つきでみんなをリード。同じくすでにバードコールの試作をしていた金子享さんは、「うちの近くの裏山で鳴らしてみたら、すぐ鳥が鳴いて上空に飛来しましたもんね。」と楽しそう。俵ヶ浦半島には野鳥も多く、半島の自然環境を楽しむツールになりそうです。



ワークショップに引き続き、岩下さんに指導を。



楽しい雰囲気なか作業が続きます。



コスモスウォーク時に試験販売を実施。



紐をつけて商品に付加価値を。鳥の形は中里孝喜さんの力作で、非売品。



俵ヶ浦半島の「俵」の刻印をして、半島オリジナル商品として販売。



自前の工具を持ち込み、慣れた手つきで制作する中里孝喜さん。

作業時間は10分程度で、開けた穴にアイボルトをねじ込むと完成。すぐに綺麗な音があちこちで鳴り始めました。あとは削ったり磨いたりしながらオリジナリティを出していきます。参加した皆さん、商品化に向けてイメージを膨らませます。久しぶりの木工作業に熱中してあつという間に予定の2時間となりました。

トレイル部副部長で木のものづくりプロジェクトの主担当、長嶺達夫さんは、「今日はみんなに楽しんでもらえてよかったです。続けていくためには、俵ヶ浦半島の皆さんに楽しんでもらうことが最初の一步ではないかと思っっています。ただ、これからは売り方が大事で、説明書きやパッケージのデザインなども大事だと思います。実際この商品をどのように売り出していくか、今後検討していきたいですね。」と振り返ります。

講師の岩下さんからは、「販売の方法や数量などによって手間のかけ方も変わってきます。伐採木の乾燥も数年かかるので、計画的な材料の確保も必要ですね。継続的にやっていくためには、俵ヶ浦半島に適した生産方法を検討していかねばなりません。」と、アドバイスを。

木のものづくりプロジェクトは、商品化に向けた次のステップへ。俵ヶ浦半島ならではの商品をお披露目できるよう、引き続き検討を進めていきます。

3-6

展海峰ウォーキングイベントの継続

展海峰ウォーキングイベントは半島の一大イベント

― チーム俵が主催を受け継ぐ ―

展海峰を発着地点として、毎年10月のコスモスと3月の菜の花の時期に開催する俵ヶ浦半島の人気イベントとして定着したウォーキングイベント。俵ヶ浦半島の4町内会の親睦の場として2002年にスタートしたこのイベントは、各町内のお母さん方が腕によりをかけて作った手料理の屋台が並び、近隣の多くの人が楽しみにする恒例イベントとして成長してきました。イベントで歩くコースは、各町の住民の皆さんが見どころなどを出し合って作ってきた俵ヶ浦半島トレイルの4コース。それぞれが町の魅力を伝えるもので、ウォーキングイベントは、参加者の皆さんと一緒に俵ヶ浦半島の魅力を楽しみ貴重な機会となりました。

一方で、イベントの準備は、広報から始まり、各方面への連絡調整、コースの草刈りや清掃、各町からの屋台出店やふるまいの準備、当日の運営や警備など、多くの人手が必要でした。

必要です。町内会の行事はウォーキングイベントだけでなく、各町内独自のお祭りや会議、草刈り清掃など様々あり、それらの地域活動を担う町内会の皆さんも人口減少・高齢化によって、各個人の負担が重く感じられるようになっていました。そこで、2018年度から実施主体をチーム俵に移し、各町内会の協力で開催するよう体制を整え、新しい企画も少しずつ盛り込んでいくことになりました。

地域が一丸となって来訪者をおもてなし

― 各プロジェクトのお披露目の場としても ―

大きなイベント開催の経験値のないチーム俵でしたが、町内会長をはじめ地域の先輩がこれまで培ってきたノウハウを伝授してもらいながら、企画や準備を進めました。イベント当日には多くのスタッフも必要となるため、各町内会との新たな役割分担の仕組みを整理。新たに参加料を徴収することとし、参加者保険への加入や天候判断のルールづくりなど、今後の継続に向けた企画の改善を行いました。

参加する皆さんに楽しんでいただけるように、新たに景品が当たる抽選会企画や振る舞いのぜんざいなどを用意。地域で採れた果物や野菜など、抽選会の景品にと持ち寄り



イベントで歩くルートは、俵ヶ浦半島の美しい風景を楽しむことができるトレイルコース。



コスモスや菜の花が咲き誇る展海峰からスタートするウォーキングイベント。



主催者を代表して、森宗幸彦さんが開会のご挨拶を。



コースの途中の休憩スポットでは、町内の皆さんによる振る舞いのおもてなしも。



毎回300名ほどの参加者が集まります。



毎回人気の鶏の炭火焼も。



参加者への振る舞いぜんざいは、主催が変わっても引継いでいます。

てくれる方もいて、地元の皆さんに支えられながら準備をしてきました。

多くの人が集まるウォーキングイベントは、進めてきた各プロジェクトの成果のお披露目や試験販売を行うのに打ってつけの場所です。2019年10月のコスモスウォークでは、受付で「木のものづくりプロジェクト」で製作したバードコールの販売を、休憩ポイントでは「ハーブプロジェクト」で栽培している和薄荷を使ったアイスハーブティの試飲を、ウォーキングを終えた方々には屋台で「食の商品開発プロジェクト」で開発したおこわなどの商品を販売し、盛り沢山の内容に。ツツテホツテも多くの来訪者で終日賑わい、レジに行列ができるほど。トレイル部で伐採したツツテホツテ裏の景観スポットも、多くの人たちが昼食・休憩場所として利用されていました。

若手中心のチーム俵による新たな挑戦。地元のお父さん、お母さんの力を借りながら、これまでの地域らしさをしっかりと残した形で再スタートを切ることができました。今後は運営資金を増やし、コストを抑えながら、継続できるイベントとしてさらに磨きをかけていきたいと思っています。



ウォーキングイベントのフライヤーは、半島や周辺の町内会をはじめ、市内各所に配布。



3-7

俵ヶ浦半島廃校利活用計画の検討

俵ヶ浦半島のシンボルである学校を残したい！

― 地域主導で廃校利活用を検討 ―

チーム俵において、「俵ヶ浦半島内の学校の利活用」をテーマに活動する学校部では、俵ヶ浦半島のシンボルであり、思い出の詰まった学校を利活用することで俵ヶ浦半島を元気にしていくことを目指しています。

俵ヶ浦半島には、野崎中学校、俵浦小学校、庵浦小学校の3つの学校がありました。旧野崎中学校体育館の一部は、放課後子ども教室としての暫定利用が決まりましたが、それ以外は佐世保市も活用に向けた青写真を持っていませんでした。一言に廃校利活用とは言え、学校を継続的に維持管理・運営するために財源等はどうすれば良いか、半島全体の活性化を考えた場合、3つの学校校舎をどのように役割分担すべきか、学校の改修・活用に向けて地域と行政の役割分担・連携は、などといった課題は山積みです。

学校は佐世保市教育委員会の財産であるため、目的外利用を行うためには計画性や実現可能性、地域との連携など



身近な学校の問題でもあり、ワークショップには多くの住民が参加。



廃校活用の状況を学び、イメージを共有するため、福岡県の「ゆいぎらら」へ視察。

**学校部**

俵ヶ浦半島の3つの学校跡の活用方針を決める大切な機会です。ご意見をぜひ届けてください。

**STEP1**

学校跡活用の目的や活用アイデア、地域の関わり・運営形態について、7月31日に話し合いました。

**STEP2** 現在

俵ヶ浦半島における学校跡の活用に関する地域独自のルール  
野崎中・俵浦小・庵浦小の3校の役割分担・活用の方向性について話し合います。

**9/28 (木) 19:00～、野崎中学校体育館で開催**

お仕事や家事、子供や孫のお世話・送迎で会議に参加できない方も多くいらっしゃると思います。「会議は出られないけど、意見は言いたい!」という方は、右側の用紙にご記入いただき、ご意見をお寄せください。FAXまたはE-mailでご連絡ください。

**STEP3**

廃校活用の先進事例調査を踏まえて、3校の具体的な活用計画、改修・活用の優先順位、改修イメージ、運営方法を考えます。

**GOAL**

平成29年度中に俵ヶ浦半島学校跡の具体的な活用・運営計画を作成し、次年度以降に設計・改修して本格的な活用を目指します。

FAX : 0956-68-2789 (チーム事務局: 兼部)  
E-mail : hitogaomote@gmail.com

俵ヶ浦半島学校跡についてのアンケート調査用紙

居住地 性別	居住するものに☐をつけてください。 俵ヶ浦町 野崎町 庵浦町 下船町	居住するものに☐をつけてください。 男性 女性
年代	居住するものに☐をつけてください。 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上	
学校跡の活用条件	学校跡の活用を定める上で、「地域でこれを守りたい」「地域でこう関わりたい!」という、3つの学校跡に共通する地域の方向性についてご自由にお願いします。	
3つの学校跡の活用テーマ 内容	3つの学校跡の特徴を基かして、野崎中、庵浦小、俵浦小をそれぞれどういう風に役割分担し、活用していきたいか、ご自由にお書きください。(1つでも構いません)。 野崎中学校 俵浦小学校 庵浦小学校	
学校跡に関するご意見	その学校跡活用についてご意見がありましたらご自由にお書きください。	

※9月までには9月1日に話し合ったワークショップの結果報告も実施します。  
お問い合わせ: TEL: 080-5206-9506 (チーム事務局: 兼部)

俵ヶ浦半島に住む子育て世代を中心にアンケート調査を実施し、ワークショップの意見を補完。

明確な理由づけが必要となります。2017年度は、放課後子供教室による暫定利用を通じて活用の意識を高めつつ、3校を具体的にどう活用するかの青写真「廃校利活用計画」を作り、次年度以降の改修・本格活用を目指しました。廃校利活用の計画づくりにあたっては、地域住民のニーズを十分に反映した計画づくりのプロセスを設定。ルーツ・アンド・パートナーズの佐藤さんの協力のもと、地域住民が気軽に参加して意見が出せるワークショップの開催や、ワークショップに参加できない子育て世代の声を拾うためのアンケート調査、利活用のイメージを膨らませるための先進事例調査を実施し、地域の声の「見える化」に努めました。

ワークショップ等では、様々な意見が出されます。元々の役割としてあった「地域の活動・交流拠点や、地域の避難場所としての役割を残したい」という意見をはじめ、「企業等に活用を丸投げするのではなく運営や管理にも一部関与したい」、「働く場所の確保や地域への収入等の利益還元を」、「地域の豊かな自然環境の活用」など、廃校を活用し

103 3-7 俵ヶ浦半島廃校利活用計画の検討

第3章 俵ヶ浦半島活性化プロジェクトの推進 102

て地域を盛り上げていきたいという想いも多数挙げられました。

そこで導き出された俵ヶ浦半島の廃校利活用のコンセプトは、「自然 × 創造力」自然と共に生き、感性を育む俵ヶ浦半島。働き方や環境を重視する起業家、自然をテーマにした企業、自分で旅をカスタマイズしたい旅行者、子育て環境を大切にする若者世代など、暮らし方・過ごし方・働き方・育て方にこだわる層をターゲットに、俵ヶ浦半島の将来目標である「定住人口の増加」につなげます。そしてそのコンセプトのもと、自然体験やロングステイを目的とした「宿泊施設」、創造力や感性を生み出す「教育施設・保育園」、新たな経済やものづくりの現場となる「クリエイターオフィス・スタジオ・工房」の誘致を目指すこととしました。

これらの計画の具体化は、チーム俵をはじめ地域住民だけで行うには企画力や人材ネットワーク等が足りず、非常に困難です。廃校利活用によるの事業展開・企業誘致に向けて、影響力のあるアドバイザーの設置や人材のサウンディング（発掘調査）はもちろん、他地域との差別化を図るためには訴求力も必要となります。人材や企業募集のための「俵ヶ浦半島〇〇スクール」などの起業家向けイベント企画を通して俵ヶ浦半島の魅力を知っていただき、適切かつユニークな人材を確保していく方法を提案しました。

具体的な検討着手は見えないまま  
— 廃校を相手に、地域力の限界 —

策定した「俵ヶ浦半島廃校利活用計画」は、教育財産を所有する佐世保市に要望として提出。計画実現のための事業展開にあたっては、チーム俵や地域としても協力して進めることを伝え、検討の主体を佐世保市にバトンタッチしました。佐世保市は、地域の想いを汲んだ上で検討を行い、その結果、事業者公募のタイミングをしばらく待つ判断をしました。その時点において、つくも苑の跡地については、観光公園化することを県・市・俵ヶ浦半島開発協議会（4町で構成）で覚書を交わし、造成工事の設計は進んでいたものの、公園内などのような機能が付加されるのか不透明でした。また、隣接地に動植物園の移転も検討されはじめ、その結果如何では、俵ヶ浦半島全体に必要とされる機能や、活用主体となり得る事業者の反応や期待も大きく変わる可能性が考えられることから、一旦保留することになったのです。

地域が主体的に検討できることは計画の策定をもって一旦区切りをつけ、今後は、市が具体的検討に入った際に、地域としても必要に応じ集まることとし、学校の活動は休止することとしました。

## [ワークショップの結果から導き出された廃校利活用のテーマ]

### 廃校の利活用は、半島への人口交流・地域経済・起業・定住を一体的に生み出す半島活性化の生命線

俵ヶ浦半島の強み・チャンスを生かきされるかが、廃校利活用への注目を集め、集客・人材誘致につなげる最大のポイント

俵ヶ浦半島・3校に共通する廃校利活用コンセプト

#### 自然

地形美・景観  
生態系・植生  
海幸山幸

「自然 × 創造力」自然と共に生き、  
感性を育む俵ヶ浦半島

#### 創造力

デザイン・芸術  
音楽・自然体験  
ものづくり

働き方・環境を重視する起業家、自然をテーマにした企業、自分で旅をカスタマイズしたい旅行者、子育て環境を大切にしたい若者世代など、暮らし方・過ごし方・働き方・育て方にこだわる層をターゲットに、将来目標である「定住人口の増加」につながる活用テーマを考える。

俵ヶ浦半島の強み・チャンスを生かした廃校利活用のテーマと事業者イメージ

### 宿泊施設（自然体験・ロングステイ）

<ul style="list-style-type: none"> <li>本格的な自然体験が楽しめる宿泊・体験施設</li> <li>釣り客・キャンパーのための宿泊施設</li> <li>進出企業・長期滞在者のロングステイ施設</li> <li>企業研修の誘致・プログラムの提供</li> <li>子供達のスポーツ合宿の誘致、自然学校</li> </ul>	(事業者イメージ)	
	アウトドア企業	宿泊・リゾート企業
	自然学校・体験企業	スポーツ関連企業

↓ 自然体験プログラムの提供

### 教育施設・保育園（創造力・感性）

<ul style="list-style-type: none"> <li>保育園から大人まで、創造力・感性を育むことができる教育施設（デザイン、アート、音楽、芸術、ものづくり、自然体験など）</li> <li>世界中から優秀な講師・生徒が集まり、育成するユニークなプログラム</li> <li>放課後子ども教室における実験的な取り組み</li> </ul>	(事業者イメージ)	
	文化プロデューサー	クリエイター・芸術家
	プロデュース企業	教育関連企業

↑ プログラム講師・PR・人材支援

### クリエイターオフィス・スタジオ・工房

<ul style="list-style-type: none"> <li>デザイン・映像・IT関連企業のシェアオフィス</li> <li>芸術家・音楽家の制作スタジオ</li> <li>ものづくり作家の工房・販売所</li> <li>起業家支援スペース</li> </ul>	(事業者イメージ)	
	デザイン・広告企業	芸術家・音楽家
	IT・映像企業	ものづくり作家

## 新たな出会いを求めて俵ヶ浦半島を出る

— 東京と佐世保ミーティングの開催 —

2017年度に策定した俵ヶ浦半島の廃校活用計画は、単に遊休資産となった廃校を活用することが目的ではなく、廃校活用を通して半島全体の活性化につなげていくことを目指していました。計画の推進は一旦ストップしましたが、チーム俵としては将来的な廃校活用を視野に入れ、俵ヶ浦半島を好きになって応援してくれるファンや俵ヶ浦半島での新たなプロジェクトを生み出してくれる事業者とのつながり（＝関係人口）を作ることを2018年度の活動目標としました。

俵ヶ浦半島の地域性を理解していただき、全国を対象に関係人口を生み出してくれる事業パートナーを探していた際、佐世保市役所政策経営課の前任の中尾大樹さんと株式会社カンパセーションズの狩野真実さんが出会います。カンパセーションズは、「問い」をカタチにするインタビュメディア「カンパセーションズ」の運営とともに「地域間

交流」をテーマに地域と地域を結びつける出会いの場づくりを行われています。今回、新たにカンパセーションズの狩野真実さん・原田優輝さんとタッグを組み、主体的に動いていただけの現地のプレイヤーの発掘に向けて取り組みました。

そのキックオフイベントとして開催したのは、「東京と佐世保ミーティング」。首都圏に暮らす佐世保出身者や佐世保にゆかりのある人たちと、俵ヶ浦半島に暮らすチーム俵のメンバーとのミートアップイベントです。いつかは故郷に帰りたい、佐世保に何らかの形で関わりたいと考えている首都圏在住の出身者・関係者と現在の佐世保をつなぐことで、自発的なプロジェクトや事業の創造につなげることを目指します。

「東京と佐世保ミーティング」は東京・渋谷の coworkingスペース COHSA SHIBUYA で2018年10月19日に開催。東京佐世保会やフェイスブックの長崎関連のグループページなどへの書き込みやサポートチームのネットワークもフル活用しながら募集した結果、定員を超

える39名が参加。キャンセル待ちも出るほど興味を持っていただきました。

イベントは3部構成。第1部はサポートチームがプロジェクトの概要を説明した後、チーム俵のメンバーが活動に対する想いや悩みなどを本音で話しました。第2部ではグループに分かれ、佐世保の料理やお酒を楽しみながら、参加者同士の自己紹介や佐世保でやりたいと思っていることをプレゼン。そして第3部は会場内で自由に交流していただきました。参加者からは、自分のスキルを生かして佐世保で事業をしたい、という具体的な話も。チーム俵のメンバーと参加者との関係づくりにつながり、参加者アンケートからも満足された様子が伺えるイベントとなりました。



東京に行けなかったメンバーはオンラインで報告。



第2部は同会場の2階に上がり、グループごとに意見交換を。



第2部の意見交換では、早速佐世保で実行したいアイデアをプレゼンする人も。



大変な盛り上がりのもと、イベントは終了。このまま残って話を続ける人も。

新たな事業化の種を撒き、関係人口づくりへ。  
— 俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソンの開催 —

「東京と佐世保ミーティング」での出会いを広げて新たな事業展開につなぐため、次の展開として俵ヶ浦半島に関心を持った人たちが実際に半島を訪れる「俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソン\*」を開催。現地における地域住民との交流や体験を通じて、俵ヶ浦半島における事業化の可能性、具体的な取り組みについて考える機会を作りました。

事前にサポートチームとカンバセーションズで設定した課題・テーマは3つ。「移動する宿づくり」では、市街化調整区域にある俵ヶ浦半島のハードルをプラスに捉えた半島ならではの宿泊施設の可能性を、「食・一次産業の価値向上」では、半農半漁が根付く俵ヶ浦半島において、その一次産業の価値を向上して持続させるための可能性と取り組みアイデアを、「俵ヶ浦半島での学びの可能性」では、「持続可能性」「生涯学習」など様々な観点から俵ヶ浦半島における未来の学びの可能性を考えます。

また、それぞれのテーマごとに、プロジェクトリーダーとなる3人のゲストをコーディネート。「移動する宿づくり」では、東京・永田町で都市型バンライフを実践し、シェア時代の働き方や暮らし方を模索している、渡鳥ジョニー

こと池田秀紀さん。「食・一次産業の価値向上」では、鎌倉で人気の「朝食屋 COBAKABA」を運営し、人、街、自然がゆるやかにつながる場をつくり続けている、ウッポンこと内堀敬介さん。「俵ヶ浦半島での学びの可能性」では、先住民技術から最新のデジタルファブリケーションまでさまざまな知識や技術を持ち、日本最大級のファブラボ「ダイナミックラボ」を鹿児島で運営するテンダーさんにプロジェクトリーダーを務めていただきました。

「東京と佐世保ミーティング」でできたネットワークなども活用しながら募集を行い、2018年12月8日、学生、アーティスト、不動産、脳神経外科医、旅館経営者など20〜60代の多彩なバックグラウンドを持つ13名が集まりました。

1日目は俵ヶ浦半島内でフィールドワークを行い、地域住民との交流・懇親会を通してアイデア創造のための情報をインプット。2日目は1日目の俵ヶ浦半島ツアーを振り返りながら、この俵ヶ浦半島でどういったことができるのか、可能性があるのか、など、プロジェクトの種を見つけて出すアイデアソンを実施。個人ワークとグループワークにより、どんどんユニークなアイデアが生まれてきます。最後は地域住民を招いての発表会と意見交換。

1泊2日という限られた時間でしたが、夜遅くまで議論

を繰り返すなど非常に密度が濃く、たくさんの方々が共有できた2日間となりました。会の終了後も参加者からは「すっかり俵ヶ浦半島のファンになりました」「すぐに実践しよう」「など嬉しい言葉をたくさんいただきました。

\*アイデアソン：アイデアソンとは、アイデアとマラソンを掛け合わせて造られた造語。特定のテーマを決め、そのテーマについてグループ単位でアイデアを出し合い、その結果を競うイベント。



1日目は廃校など、半島内でフィールドワーク。



夜は地域住民との懇親会。楽しみつつ、地域の課題などを聞き取りする参加者。



2日目は朝から事業の検討を。短い時間ながら、中身の濃い議論ができました。



最後は、地域住民の前でチーム毎に事業アイデアをプレゼン。



伊ヶ浦半島ツアー＆アイデアソンに参加した皆さんとの記念撮影。

アイデアソンを経て、新たなプロジェクトへ！  
 ─ 釣り体験プログラムの検討 ─

伊ヶ浦半島ツアー＆アイデアソンでの出会いから、早速新たなプロジェクトが始動します。半農半漁の暮らしを實踐する農家でありトレイル部部長である山口昭正さんと、アイデアソンに参加した佐世保でツアーガイドを行うウエーブピークの堤正年さんが連携し、九十九島をフィールドに、シーカヤックと釣り体験を行うモニターツアーを開催しました。

山口さん自身、本業である農業の農閑期に来訪者をおもてなしする事業ができないかと、遊漁船の運航や釣り体験プログラムの商品化などを検討し始めていました。しかし、実際に販売するには、商品造成や集客、安全面の確保、受入に関する事務等のノウハウがありません。それらの課題を地域外の人材とコラボすることで、地域ビジネスとしての展開を目指します。

モニターツアーには、九十九島の無人島・黒子島と白浜キャンプ場を舞台に佐世保市内から親子2名2組と女性グループ2名1組の計6名が参加。ツアー全体の評価は高く、特に無人島へのカヤックツアーの満足度が高い結果となりました。また、「また来たい」と全員が回答し、リピーター

## 【伊ヶ浦半島アイデアソン・プロジェクトアイデア】

### 01 「ユドネとウラボリ」の復活による半島排水浄化作戦！

半島の下水が未整備な現状で、資金をかせず、破壊的な技術を使わずに下水問題に着手。ユドネ…生活排水を貯めレンコンを栽培、かつ雑排水を浄化する技術。ウラボリ…雨水を貯める池で魚を飼い、中水としても利用。

### 02 廃校ファブラボプロジェクト

伐採した雑木による加工品制作、3D プリンタなどの技術力の向上、ファブラボによる横のつながりの強化。

### 03 大人のホームステイ ～習慣を見直す21日間プログラム～

60代前後のリタイア層がセカンドライフを迎えるにあたり、伊ヶ浦半島に滞在しながら医療や福祉、趣味や金銭面などの疑問に答える講座を提供し、自分も講座を持っていただく相互学習のプログラムを実施。

### 04 映画を作ろう！ 伊ヶ浦グーニーズ（九十九島グーニーズ）

理想の半島を自由に発想し、映画作りのプロの指導の元に一本の映画を半島で作りに上げる。映画の中に登場するデザインスクール（社会課題解決のラボ）を廃校を利用して実際に作り、理想の半島に近づけていく。

### 05 リタイア後・病後の役割を再発見する、廃校活用・学びプロジェクト

廃校を活用して介護予防プログラムを定期的に開催。廃校のプロジェクトに参加すること自体がリハビリテーションであり、社会参加となる。（注文を間違える料理店（認知症の方が働くレストラン））

### 06 子どもへの郷土教育

教科書がわりに絵本を制作。小中学校の総合学習において、絵本を活用した教育カリキュラムを実施。その他、郷土料理を作る調理実習などを実施。

### 07 体験型宿泊施設・ツアー

学校や空き家を改修した家で宿泊。地域の昔話（国語・社会）やトレイルウォーキング（体育）、木工作品の制作（技術）、オイルサーディンやオイスターソースなどの加工品作り（家庭科）などの体験型プログラムを提供。

### 08 1泊2日の「伊」の暮らし体験。

特に農業や漁業に興味のある若者向けに、農業体験や漁師体験のプログラムや廃校でのクラフト体験などを提供し、半島の方々の交流の場を設ける。半島で暮らすイメージを持ってもらう。

### 09 「伊」の海と農のブランド化

伊ヶ浦産のシールを作り、美味しい理由やストーリーを発信。周辺の直売所への共同出荷や共同加工場の設置など、ブランド力を強化。福岡などの発信力の高い施設やフェアへの出店を行い、農水産物をブランド化していく。

### 10 食を支える暮らしをつなぐ ～九十九島の暮らしを知って体験する～

地域の食材を使った料理会を開催。「その時美味しい食材を余すことなく使い切る」をコンセプトにしたコース形式のイタリア料理を学ぶ。生産者をクローズアップして紹介し、食材だけでなく暮らしも知ってもらう。

### 11 想いを育てる亀の子島真珠

亀の子島にある旧真珠養殖場で、時間をかけた贈り物を作りたい人が、真珠の核入れ体験をし、数年のサイクルで訪れてもらう。

### 12 空き家を使って人が集まる場所に。 （アトリエ・ギャラリー・カフェ）

空き家を活用して木工作家のアトリエ・ギャラリー・カフェを設置。半島内の食材を利用した料理や、間伐材を使用した作品の販売などを行い、地元住民や観光客が集まる場所に。

### 13 自然と共に自分で作って販売する 職業体験＋異文化交流

半島内の木を活用し、木材を調達。廃校へと木材を運び、加工。専用の Web サイトに出品し、収益の一部は伊ヶ浦半島に整備に活用。プロジェクト中、地域の外国人の方と一緒にいき、異文化交流にもつながる。

### 14 世界初！半島全体の絶景 “停めホーダイ”の動くホテル

「もし客室が移動できたら、この半島全体がホテルになる。」快適なベッドとソファ、最低限の設備を持った大型バンで半島を巡り、気になる場所で Park&Stay。トイレなどは廃校などを活用。食事は地域の方がお届け。



俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソンに参加した、ツアーガイドの堤さんからは九十九島の説明を。



シーカヤック初心者でも十分楽しめる九十九島の海には可能性がたくさん。



宿泊は白浜キャンプ場にて。

述べたハーププロジェクトや釣り体験プログラムのように、俵ヶ浦半島の素材や人材と、外部事業者の人材やノウハウの化学反応を生み出すきっかけをうまく作り、地域ビジネスの具現化・仕組み化に向けて取り組んでいかなければなりません。

俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソンには他にも多数の事業アイデアが生まれましたが、その後のフォローは十分にできておらず、具現化の見通しも立っていない状況です。俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソンには半島内や市内からの参加者が少なかったこと、そのために具体的な事業実施に向けた理解を深められなかったことが課題として挙げられます。地域ビジネスは、外部事業者だけで遠隔でできることは少なく、地域人材との連携が欠かせません。新しい地域ビジネスを始動するためには、地域住民等との定期的な会合を持つなど、理解の促進を図ることが必要となります。先に

### 単発で終わらない関係人口づくりへ

#### ― 半島発地域ビジネス創出の仕組み化の必要性 ―

につながる可能性も。一方で、佐世保や九十九島の海ならではの体験や説明、自由時間の確保など、さらに魅力的にするための改善点も明らかになりました。釣り体験を軸とした俵ヶ浦半島ツアーに手応えを感じた山口さんも、遊漁船運航のための遊漁船業務主任者の資格を取得。今後の事業展開に向け、商品造成に取り組んでいきます。



モニター参加者に釣りのレクチャーを行う山口さん。

## Interview Vol.2

「チーム俵」トレイル部部長／農家・山口昭正さんが、  
 「新鹿果物」代表（三重県熊野市）・近藤久史さんに聞く、  
 「持続可能な生業のつくり方」

俵ヶ浦半島で農家として働きながら、地元の若手メンバーによって結成された「チーム俵」でトレイル部の部長を務めるなど、地域活動にも積極的に参加してきた山口昭正さん。両親が営んでいた農業を自らの生業に選び、さまざまな問題意識や悩みを抱えながら、新たな挑戦を始めようとしている山口さんが、三重県熊野市の新鹿町で果樹園を営む近藤久史さんのもとを訪ねました。地域おこし協力隊としてこの地に移り住み、現在はみかん農家の他にSUPインストラクターとしての顔も持ち、さらにゲストハウスの運営もスタートさせようとしている近藤さんに、同業者である山口さんが、持続可能な生業のつくり方や、地域活動へのスタンスなどについて話を聞きました。

なぜみかん農家になったのですか？

Q. 近藤さんは、地域おこし協力隊として新鹿町に来られたそうですが、なぜこの地域を選ばれたのかを教えてください。

近藤..海がそばにあったことと、実家からの距離が近かったというのが大きな理由です。もともと、オーストラリア

や東南アジアなどにサーフィンをしに行くくらい海が好きで、以前に東京で働いていた頃も神奈川県の高津海岸に住み、波乗りをしてから有楽町の職場に通っていました。だから、自分にとっては日常の中でサーフィンなどができる環境というのが何よりも大切だったんです。

Q. そうなんですね。私が住んでいる俵ヶ浦半島にも朝釣りをしてから、市内の造船所に勤めている人がいます。

近藤..当初は移住先として沖縄なども視野に入れていたんです。一方で、住まいが実家から近いというのは何かと便利なんです。ここに来る前は、妻の実家がある三重県の伊賀で農業をしていて、僕も同じ三重の津出身なのですが、いまも地元でイベントをしたりしていて、色々なつながりがあるんです。そういう意味では伊賀もとても良いところでしたし、有機農業も盛んな場所だったので色々な学びもありました。ただ、いかに近くに海がなくて（笑）。いま振り返ると、自分の人生の中で最も海から離れていた時期だったかもしれないですね。

Q. 新鹿に移住をして、果樹園を営むようになるまでにはどんな経緯があったのですか？

近藤..当初はみかん農家になろうとは特に考えていませんでした。ただ、もともと農業をしていたので、新鹿で農家になるならこの地に適したものを育てたいという思いは漠然とあって、そのひとつとして柑橘類というのがあったんです。もともとこの果樹園は、80歳を超える地元の農家さんのものだったのですが、最初にみかん畑をやってみないかと言われて連れてこられた時に、この景色にとっても感動したんです。また、かつてこの辺りにも段々畑のみか



インタビューは、近藤さんの果樹園を臨む場所で和やかに行われました。左から、近藤久史さん、山口昭正さん、山口郁さん、近藤明美さん。

んを育てていた農家さんがたくさんいたのですが、作業効率の悪さなどからとんどん辞めてしまい、いまではこの果樹園を残すだけでした。この素晴らしいみかん畑は未来に残す価値があると思っだし、その農家さんもとても良い方だったので、自分がここを引き継ごうと決心したんです。

**農業だけで食べていけますか？**

**Q.** うち両親も農家なのですが、この畑を守っていききたいという思いは、私が農業をしている動機のひとつになっています。土地の歴史などを知れば知るほど、そう簡単にやめるわけにはいかなくなるんですよね。一方で、農業は自然災害などで作物が収穫できない時などもありますし、専業で取り組むのは非常に厳しい仕事でもあると感じています。そうした理想と現実のギャップを埋めて、収入的に



近藤さんは、定期的に地元・津をはじめ、各地のイベントに出店。

もメンタル的にも安定させるために、農業以外の仕事も持つておきたいという思いがあり、遊漁船の営業を始めようかと考えているところです。近藤さんは新鹿に来て、農業の他にSUPのインストラクターなどもされているそうですが、農業とそれ以外の仕事のバランスはどのように考えているのですか？

**近藤**.. 仰るように農業という仕事はとても難しいところがあるし、ビジネスとして考えると効率は非常に悪いですね。ただ、それらとは比べられない魅力もある仕事で、僕が農業を好きな理由のひとつは、周囲の人間関係などに左右されず、自然と向き合う中で自分の軸が持てる場所なんです。やはり自分としては、みかん農家を軸に生きていきたいという思いが強く、この畑を残すためにSUPなどの仕事を通して現金をしっかりと得ていこうと考えていますし、常に複数の財布が持てるように意識しています。今後の財布が増えすぎってしまったらどうなるんだろうという心配も若干ありますが(笑)。

**Q.** これからゲストハウスの運営もされるそうですね。

**近藤**.. はい。そのために物件を購入したのですが、2階を

ゲストハウスとして通年で営業し、1階は夏季限定で飲食営業をしようと考えています。熊野に来てすぐに別の場所で民泊をしたことがあるのですが、ゲストハウスというのは極端な話、チェックインの時に「ハロー」と言ったら、あとはチェックアウトの時に「グッバイ」と言えば良くて、意外と手間がかからないんです(笑)。これからは宿泊客をSUPにも誘導したいと思っていますのですが、どちらもみかんをつくるよりはるかに効率が良いんですね。非効率だけど自分が好きな農業を生業にしているからこそ、効率の良いビジネスを並行させることでバランスを取っていきたくて考えています。今後は収入的に農業よりも観光業が上回る可能性もあるかもしれませんが、自分の気持ちの軸は常に農業に置いておきたいと思っています。

**Q.** 巷では六次産業ということも言われていますが、サービス業との組み合わせはますます大切になってくると感じています。その時に、この新鹿町や私が暮らす俵ヶ浦半島というのは、勝負がしやすい環境にありますよね。実は、以前に農業と並行して福祉関連の事業をやっていた時期があったのですが、自分たちの見通しが甘かったこともあり、続けていくうちに心労ばかりが溜まってしまい、結局上手いきませんでした。だからこそ今回は、自分の趣味でも



半島での農業の話をする山口さん。

あった釣りを仕事につなげられないかと考えたんです。

**近藤**.. 複数の仕事を持つ時には、そうしたモチベーションも大切ですね。農業は魅力的な仕事ですが、リスクも大きいからこそ、何かをきっかけに簡単に嫌いになってしまいう仕事でもあると思うんですね。実際に伊賀にいる時に有機農業推進協議会の事務局を担当したことがあり、そこで農家を辞めてしまった人たちの話もたくさん聞きました。だからこそ、農業を嫌いにならないように他の仕事でバランスを取ることが大事だと思うし、僕の場合はそれをもっと好きだった海でやっているんです。また、農業に関し

でも、各地のイベントに積極的に足を運んで直接お客さんとコミュニケーションを取ることがモチベーションになるし、日々の農作業についても、かつてサーフィンをしによく行っていたインドネシアの雰囲気も少しでも思い出すために、畑にバナナの木を植えてテンションを上げていたりするんです(笑)。

**どうやって時間をやり繰りしていますか？**

**Q**・農業以外の事業を並行していくためには、当然その分の時間をつくらないといけないわけですが、仕事をうまく回していくために工夫していることがあれば教えてください。

近藤..まずは先ほど少し話したように、あまり手間がかからない仕事を選んでという前提がありますが、もうひとつ僕の場合は、季節によって仕事を分けているところがあります。みかん農家の繁忙期は11月から4月までで、夏場の主な仕事は草刈りなどになるので、空き時間にコツコツやればなんとか対応できるんです。また、ゲストハウスに関しては、宿泊客を1組限定にするつもりです。とい

必要になる「リクエスト制」があり、サイトの運営サイドには、なるべく即予約OKにしてほしいと言われるのですが、僕は農家をしているのでそちらの状況次第で対応できるかどうかを判断できるようにしています。また、普段から波の状態などを見られる場所で働いているということも大きくて、もしこれが畑から離れた場所まで行かないとサービスが提供できないという形だったら、負担的にもかなり厳しいだろうなと。

**Q**・時間のやりくりが大きな課題だと思っていたので、とても勉強になります。今後遊漁船をやるとしたら、仕事をしない夜の時間帯に、夜釣り用に船を出すのが良いかなと考えています。もしかしたら、朝夜2便出すということも考えられるのかもしれないですが、その辺はある程度慣れできてからかなと。

近藤..その方が良いと思います。僕も当初はSUPを1日3ラウンドやっていて、お客さんはたくさん来てくれるのですが、炎天下で3回同じ説明をして同じコースに出ると、さすがに草刈りをする体力が残らないので(笑)、いまは最大でも2ラウンドまでにしています。あと、仕事の他にも本を読んだり、映画を観たり、やりたいことはたくさんあ

うのも、例えば宿泊料金を均一で15,000円にしておく、4、5人で使えばゲストハウスの相場程度の金額になりますし、逆に余裕がある人は1、2人でも貸し切りにしますよね。要は、確実に15,000円以上収入が得られるということがわかっていれば、こちらとしても農作業を中断して対応する価値があると。少しいやらしい考え方ですが(笑)、自分の行動の値段を決めるということです。よね。安定した収入を得ることが副業の目的なので、その辺はシビアにやらないと難しいですよ。

**Q**・SUPの方はどのような形で運営しているのですか？

近藤..SUP体験は一人6,400円で、登録しているレジャー・アウトドア体験の予約サイトから申し込みられる方が多いです。このサイトには、ユーザーが日時を指定できる「予約制」と、サービス提供者にスケジュールの確認が

るので、いかに時間を効率良く使えるかということは常に考えますね。例えば、農薬散布など時間がかかる作業がある時には、SUPの時間から逆算して朝4時からいから作業を始めるなどしています。そういう日はさすがに午後にはフラフラですが(笑)。

**地域活動には参加していますか？**

**Q**・私たちは、俵ヶ浦半島の地域おこしを目的にした「チーム俵」という若手のグループをつくって活動しているんですね。一方、半島には僕らよりも年上の方たちを中心とした町内会的な存在もあり、世代の異なるグループ同士がいかに良い関係性を築けるかということが大切だと感じています。近藤さんは、こうした地域との関係づくりという点では、どんなことを意識していますか？



新鹿海水浴場は波が穏やかなので SUP には最適。



近藤・僕は地域おこし協力隊として移住してきたので、当初は新鹿のことを知りたいという思いが強く、地域にかなり深く入っていきましたが、協力隊の任期を終えたいまは、適度な距離感というものを意識しています。僕も青年団などに入っているのですが、いまは地域活動よりも自分がやっていることをしっかり表現することを優先したいので、忙しい時は休みますと気兼ねなく言えるようなスタンスを取っています。何者かもよくわからない人間としてではなく、みかん農家やゲストハウスを運営している近藤久史として、地域の活動に関わっていきたいという思いがあるんです。まずは自分のバックグラウンドがあった上で、力になれそうな地域活動には関わりたいですが、完全なボランティアとして地域に関わるというのは継続性が生まれにくいですし、少し違うかなと思っています。

Q. 非常によくわかります。とはいえ、どんなに仕事が忙しくても、立場に出ているかといかない地域活動などもあり、その辺はなかなか悩ましいところですね。私たちの地域でもボランティアで草刈りをしていたところがあったのですが、高齢化が進むにつれて参加できる人が少なくなり、継続が難しくなりました。そういう作業は行政にお願いするか、あるいは自分たち「チーム俵」の事業と

より良くなってほしいのですが、最近移住者を募るための成功事例として扱われるようなことも多く、それはちょっと違うかな。僕は成功しているわけでも余裕があるわけでもなく、いままさに挑戦中なんです。これからの地域活性というのは、そこできっかりとお金が循環し、新しい仕事が生まれるようなものにしていくべきだし、関わる人たち全員に興味があるような関係性を、地域と築いていきたいですね。



## PROFILE

### インタビューされた人

#### 近藤久史さん 「新鹿果物」代表 / 三重県熊野市

三重県津市生まれ。オーストラリアに4年間留学し、“海のある暮らし”を経験したのち地元津市に戻る。有機農業の研修を受けながら、2012年から仲間と地元を盛り上げるため「久居げんき会」を結成。現在も続く「グリーンフェスティバル(久居まつり)」に実行委員長として携わる。津市は内陸で海がないため“海のある暮らし”を求め、2015年に熊野市へ移住。地域おこし協力隊時代に後継者がいない果樹園を引き継ぐ。「人と人、食卓と地域をツナゲル」をコンセプトに農業×観光業を営む。果樹園経営のほかには大好きな海を活用したSUP体験や集落案内といった「アウトドア体験サービス」も提供中。農産物を活用した海のみえるcafe&guesthouseの開設も進めている。<https://newdeer.jimdo.com/>

### インタビューした人

#### 山口昭正さん 「チーム俵」部長、農家

長崎県佐世保市生まれ。大学卒業後、佐世保市のスポーツ用品店に就職、30歳で家業を継ぎ就農。俵ヶ浦半島は、昔から半農半漁で暮らしてきた地域で、海が風気で潮の良い日には漁に出て機で獲れるウニや天然牡蠣も家計を支えている。子供たちが「ここに帰ってきたい」と思えるような暮らしをどうやって作ってあげればいいのか、半島だからこそ実現できる暮らしを模索中。資格を取得して遊漁船業にも挑戦する。

して受けていけないかと考えています。

近藤・僕はお神輿が好きで、移住してきた時に地域の人たちと深くつながるひとつのきっかけにもなったのですが、この辺りでも同じように高齢化が進み、最近はずぎ手不足という課題があるんですね。それを解決するための自分なりのアイデアというのを実は持っているのですが、自分がもう少し新鹿で継続的に事業を営み、近隣の人たちから信頼が得られた段階で、改めて地域に対して提案ができるようになると思っています。

Q. 地域の中での発言力を高めたいという思いがあるので、最後に、行政との関わり方に関して、何か意識していることがあれば聞かせてください。

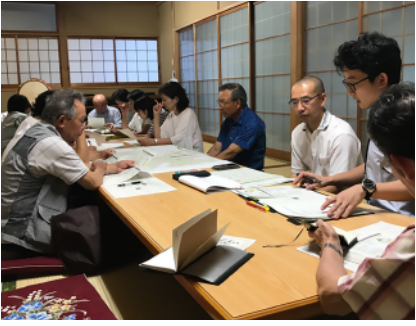
近藤・最近行政の方が相談に来てくれる機会も多く、もちろん協力できることはしたいのですが、一方で自分がやりたいこともあるのでお断りすることも少なくありません。仲が悪いわけではないのですが、いまは協力隊ではなく、個人事業主として動いていることもあって、自分がワクワクできないことや未来が見えないことには参加しないようにしています。もちろん、自分が住み続けていく地域には

あるはずの空き家がない？  
 — 活用できる空き家が不足 —

「空き家を活用した移住受入・起業」をテーマに活動する住まい部では、豊かな歴史・自然環境を持つ恵まれた住環境を最大限に生かし、空き家・空き地を活用して移住者・定住者を呼び込むことを目指します。「俵ヶ浦半島未来計画」策定時のワークショップでも住まいに関するキーワードが様々な方から挙がりました。大きく分けて意見は2つ。1つは「空き家や耕作放棄地がたくさんあるけん、活用したらどうやろうか」という意見。もう1つは、「俵ヶ浦半島は市街化調整区域やけん何もできん」というものでした。

空き家の活用については、各町内会長と連携し、俵ヶ浦半島内の空き家を調査するところからスタートすることに。もう1つの市街化調整区域の問題については、所管する佐世保市役所都市政策課の宮崎大さんに教えていただきながら活用できる方法を探ることから始めました。

市街化調整区域とは、都市計画法で土地利用に関して定

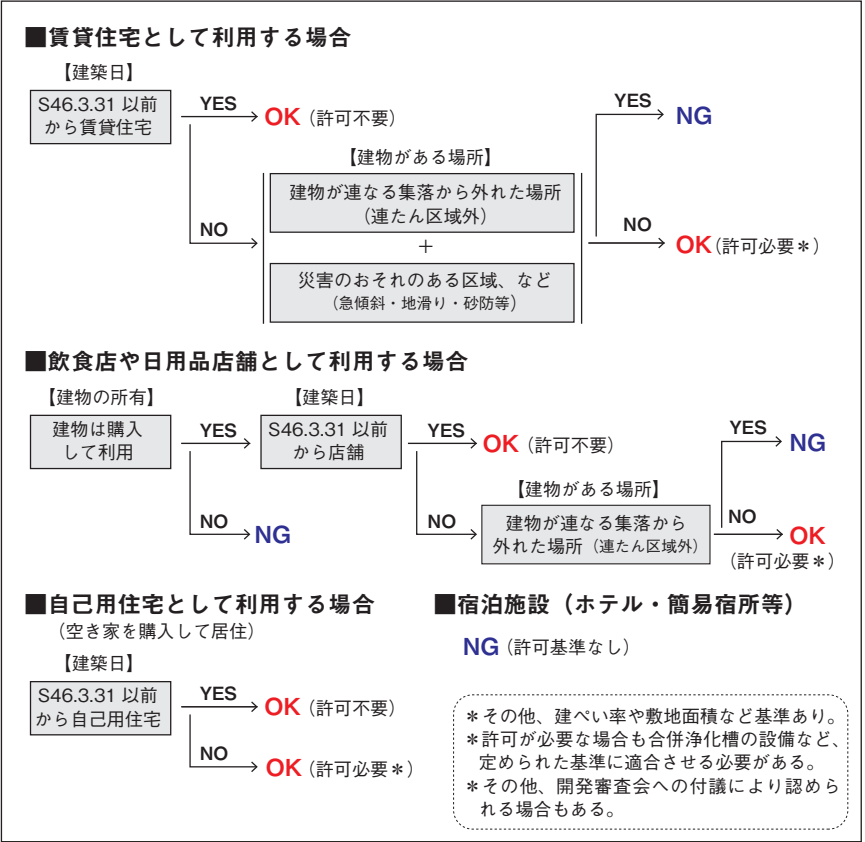


都市計画法の規制に関する勉強会を開催。



俵ヶ浦半島内の空き家を調査を実施。

**[市街化調整区域の規制概要]** (移住者など、俵ヶ浦半島外から来た人が利用する場合)



められた区域で、市街化調整区域は自然環境や営農環境を守るため建築等の行為が制限されています。俵ヶ浦半島は全域が市街化調整区域に指定されていますが、全く建築できない、というわけではありません。一定の許可基準を満たせば住宅の建築は可能です。また日用品や飲食店などの店舗も、集落などエリアは限られますが、事業を行うことができます。しかしながら、空き家となった住宅を貸し出す際には「賃貸住宅」として許可を取り直す必要があったり、借家では事業を行うことができなかつたり、建築物の場所や建てた年代、住む人やその用途によって異なる複雑な基準となっています。1軒1軒条件が異なるため、「できる・できない」の判断は地域の人には難しいところですが、ワークショップ時の「何もできん」という発言もこの事から出たものだと思います。

「市街化調整区域から外してもらえないか」と行政に要望する意見もありました。しかし、都市部の人口密度を維持する事を目的とした法律のため、人口減少下においては、厳しくすることはできても緩和することは困難であるとの

【地域の皆さんに対する空き家活用の啓発（抜粋）】

Needed

移住者の受け入れ・俵ヶ浦半島の活性化のため、  
空き家活用のご協力をお願いします！

俵ヶ浦半島においても、人口減少により空き家が増加しています。チーム俵では、半島の魅力を活かし、人に来て住んでもらえるよう取り組みを始めました。アパート等がない半島に移住者・定住者を受け入れるためには、**既存の住宅を活用しなければなりません。**

また、空き家は、住まいとしてだけではなく、コミュニティ施設や観光拠点など、様々な形で活用できる**まちづくりの資源**です。**自身のため、地域のために、空き家を活用してみませんか？**

空き家を放っておくとどうなるの？

建物は年月の経過とともに傷んでいきますが、特に人が住まなくなった空き家は傷みの進行が早くなります。また、空き家を放置すると、瓦の落下や放火・自然発火などのリスクの増加、地域の景観の悪化など、周辺エリアの治安に悪影響を及ぼすことがあります。

空き家そのまま放置すると・・・/



空き家活用 Q&A

- Q.** 古い家は誰も使ってくれないのでは？  
**A.** 一概にそうとは言えません。たとえば、ポロポロでも価格が安いほうが良いという方がいます。自分で大工仕事して住まいを良くしたい人、工房のような使い方をしたい人などもあります。他都市では、廃屋に近い状態から、**借り手の改修で目違えるように生まれ変わった事例**なども増えつつあります。また、俵ヶ浦半島に移住を希望し、実際に物件を探している方もいます。
- Q.** 市街化調整区域だから活用できないのでは？  
**A.** 市街化調整区域の**住宅建築の緩和制度**があります。諸条件があり許可が必要ですが、**人に貸すことができる場合**もあります。
- Q.** 借り手にどんな使い方をされるか不安です。  
**A.** 貸すときの契約に注意すれば大丈夫です。**契約の際に改造してもいい範囲、元に戻すべき範囲の約束**をすることが大事です。
- Q.** 一度貸したら返ってこないのでは？  
**A.** 期間を決めて貸すこともできます。「**定期借家契約**」といって、**あらかじめ賃貸借の期間を決めることができます。**再契約も可能です。

こと。また、市街化調整区域に指定されていることで、乱開発が起きず、俵ヶ浦半島特有の美しい自然環境が守られています。基準を満たせば空き家の活用はできるため、佐世保市に協力を仰ぎ、物件ごとに活用可能かどうかの判断していただくこととしました。

空き家の調査においては、町内会長と各町内を巡り、空き家の場所やその所有者などの情報を分かる範囲で教えていただいた結果、42軒の空き家を確認しました。しかしながら、使っても良いと所有者の意見が確認できたものはほとんどなく、老朽化していたり、家財道具が残っていたりするため、所有者自身が空き家の利活用に対して消極的な状況でした。また、そもそも所有者がどこに居るかわからない、相続の問題で親族間の合意が取れないなどの課題がある物件もあります。住まい部としては、空き家はたくさんあるものの移住希望者に紹介できる賃貸住宅も空き家もない、という厳しい状況に突き当たります。

移住希望者の受け入れのためには、初期費用が少なくなく、**空き家は地域の資源であることを伝えるも・・・**  
—— **地域住民への空き家活用の啓発** ——

俵ヶ浦半島 空き家 おそうじ大作战!

平成30年 3/21 (水・祝)

第1回 空き家おそうじワークショップ 会場  
 時間: 10:00~(9:50開始) 場所: 佐世保市役所3階 308 (佐世保中央バス停4分)  
 14:30(予定) 15:00(予定) 15:30(予定)  
 ※参加費無料です。

第2回 空き家おそうじ 会場  
 時間: 14:30(水) (おそうじ終了後) ~ 15:30(水) (予定)  
 ※参加費無料です。

お申し込み・参加費等について  
 ●お申し込みは先着順となります。定員に達した場合は下記までご連絡をお願いします。  
 ●参加費はご自身で準備します。  
 ●お申し込みは「おそうじ」の参加費は無料です。  
 ●お申し込みは「おそうじ」の参加費は無料です。  
 ●お申し込みは「おそうじ」の参加費は無料です。

主催: チーム俵 佐世保市役所 協力: 佐世保市役所市政課

ワークショップはチラシを作成し、ニュースリリースも含め幅広く呼びかけを実施。

済む空き家の活用は欠かせません。紹介できる物件がない現状を打破するために、**空き家活用の啓発に取り掛かりました。**「空き家の活用に関するご協力をお願いします」と題して、**空き家のままにしておくことの問題点や空き家の活用方法**などを紹介するパンフレットを作成。俵ヶ浦半島内の世帯に配布し、**地域住民からの情報提供を依頼**しました。

また、空き家が利活用される姿を地域住民に直接見てもらうことも必要だと考え、「俵ヶ浦半島空き家おそうじ大作战！」と題し、お掃除ワークショップを開催。空き家の掃除を通して、昔ながらの暮らしの工夫が感じられる古民家の良さを感じていただき、**空き家の可能性を共有・発信**することを意図して企画しました。

お掃除ワークショップには、住まい部メンバーや俵ヶ浦半島の住民に限らず広く募集を行い、半島内外から合計27名の参加者が集まりました。空き家の掃除も、湿らした新聞紙や米ぬかなど、地元のお母さん方直伝の身近な材料を使った方法を採用。掃除の後は1日限りの「空き家カフェ」をその場に設え、お茶を飲みながら俵ヶ浦半島の空き家の利活用について語り合いました。お掃除ワークショップの様子は地上波テレビや新聞に掲載され、幅広いPRにもつながることができました。

町内会長への相談や啓発活動を実施した結果、新たに数軒の空き家情報が得られました。これまで同様、立地や状態はあまり良くありませんでした。一方で、その他の部活や取り組みの成果もあり、俵ヶ浦半島に移住したいという相談を受けることも増えてきました。住まい部の山田部長と地域おこし協力隊の久米川さんを中心に案内しましたが、俵ヶ浦半島の暮らしの情報と空き家の位置程度しか伝えることができず、移住希望者を引き止めることはできていません。

空き家の活用にはハードルが高い状況ですが、例えば、消極的な所有者に何度も交渉しても俵ヶ浦半島に移住したい！とまで思わせるような情報発信や移住体験の提供を行う必要があると考えています。また、チーム俵に

は移住希望者の案内等を常時できる人はいないため、外部事業者との連携など、移住希望者の受入体制の整備についても検討を行っていく必要があります。

### 空き家を活用した農家民宿を！

#### ― 山口さんと久米川さんがタッグを組む ―

そのような中、チーム俵の理事でありトレイル部部長の山口昭正さんが、自宅に隣接する空き家となっていた建物を所有することになりました。遊漁船ビジネスを検討されている山口さんは、利用者が釣り体験の前後でくつろげ、地域住民とも交流できる「たまり場」となる場所を、この空き家を活用して作りたいと発案します。さらに、地域おこし協力隊の任期満了が近づいていた久米川さんも空き家活用に参画。地元京都でゲストハウスを経営されている久米川さんは俵ヶ浦半島にも拠点を作りたいと考えていたため、2人を中心に空き家を活用した宿泊滞在施設の整備の検討を始めました。

市街化調整区域ではゲストハウス等の宿泊施設は認められていませんが、山口さんのような農家が行う農家民宿で



農家民宿の開業を目指している俵ヶ浦町の空き家。



湿らせた新聞紙を使った畳掃除の体験。



空き家を大勢で掃除している風景に、周囲の方も注目。



掃除後は、その場でお茶菓子を楽しみながら空き家の活用方法について意見交換。



住まい部だけでなく、俵ヶ浦半島内外から幅広く参加。



誰でも参加可能な古民家DIYのイベントを実施。



地域おこし協力隊の皆さんは貴重な機会ということで、積極的に参加。



地元の方も自前の道具を持参して手伝いに。



室内の真ん中は土間内に改修し、地域住民と利用者が集える空間に。



農家民宿の開業を目指す、久米川さん（左）と山口昭正さん。（右）

あれば立地は可能です。農業体験や漁業体験を通して地域住民と触れ合うことを目的としている農家民宿は、現在俵ヶ浦半島で進行している様々なプロジェクトとも親和性が高く、移住希望者が一時的に滞在して俵ヶ浦半島の暮らしを体験する場所としても使うことができます。ストップしている空き家活用・移住者受入の突破口としての役割も期待されます。

この空き家は築年数も古く、家主が不在となつてから数年経っており、老朽化や雨漏りなども見られます。現時点で改修予算はないため、DIYによる改修から着手。久米川さんが県内の地域おこし協力隊に呼びかけ、古民家DIYワークショップも開催しました。木のものづくりプロジェクトに参加する中里孝喜さんと地元の大工さんも余つた資材を持って駆けつけます。地域住民の協力のもと、現在も空き家改修が継続中。2020年度のオープンを目指します。

俵ヶ浦半島に限らず様々な地域で課題となる「マンパワー不足」。山口さんは「半島 Meets」のインタビュアー訪問記でこのように感想を話しています。

「自分は農業の他に遊漁船のビジネスを始めようとしています。自分も、代々農業をする家庭に生まれて、他の事業に手を出していいのかという葛藤や不安がありました。だけど、

近藤さんのライフスタイルを見て、『自分の進もうとしていた考えは間違っていないんだ』と思えました。俵ヶ浦半島では現在、様々なプロジェクトが動き出そうとしています。若手と言われる私でも戸惑いを感じる時がありますが（笑）、そんな時は今回学んだ『地域が楽しいことって何だ？』『自分自身が楽しいって何だ？』という視点を思い出したいと感じました。農業に限らず、仕事はしんどいことが多いじゃないですか。だからこそ、やっぱり自分が楽しいと思えることをしないと続かないですね。」

俵ヶ浦半島未来計画は、地域の課題解決を中心とした推進体制になっていました。そのことでメンバーそれぞれ、責任感とともに大きな負担を感じる時もあったと思います。ですが、3年間の活動を通して幅広い視点を心得て、「やるべきこと」と「やりたいこと」、「やれること」の方向性が重なるものが見つかってきたのだと思います。現に、この農家民宿のプロジェクトはチーム俵としてではなく、個人のプロジェクトとしてスタートされています。俵ヶ浦半島でもこれに続いて、たくさんさんのプロジェクトの種が芽吹いてくれることを期待します。

# 魅力発信プロジェクト

## 対象を分けた2つの情報発信

### ― 俵ヶ浦半島TIMESの発行と

### ホームページの開設

「俵ヶ浦半島の認知度向上・ファンの獲得」をテーマに活動する宣伝部では、チーム俵の各部活で取り組む事業や俵ヶ浦半島の楽しみ方・暮らし方・イベントなどを発信し、プロモーションを展開しました。情報発信の内容は大きく2つ。1つは、未来計画に沿って実施するチーム俵の取り組みを俵ヶ浦半島の皆さんに対して発信し、地域づくりへの関心向上を促し、仲間を増やすことを目的とした地域内向け情報発信。もう1つは、俵ヶ浦半島の暮らしや人、観光の魅力、チーム俵の取り組みを半島地域外に発信し、認知度向上と来訪のきっかけをつくる地域外向け情報発信です。

俵ヶ浦半島未来計画の策定に着手した2016年、ワークショップへの参加呼びかけや仕事や子育てなどで参加できない方にも計画づくりの状況を伝えていく必要があったため、サポーターチームが中心となり「俵ヶ浦半島TIMES」

の発行を始めました。俵ヶ浦半島TIMESは、計画づくりの内容だけでなく、俵ヶ浦半島の歴史や文化などの魅力、移住者の声や地域の問題などを特集し、デザインも手に取りやすく読みやすい紙面構成となるよう配慮しました。俵ヶ浦半島の皆さんには閲覧板での配布となるのですが、毎月多くの文書が回るので目立たせる工夫が必要となります。年に4回の季刊誌として発行しましたが、毎号色違いのタイトルにすることで収集する楽しさも。

当初は地域向けに発行した俵ヶ浦半島TIMESですが、余った部数を市役所や観光情報センターなどの市内主要箇所でも配布したところ、多くの方に手に取っていただき俵ヶ浦半島の認知度向上にもつながりました。また、2年目は紙媒体による半島外への情報発信の必要性も高まったことから、中面の紙面構成をリニューアル。俵ヶ浦半島トレイルやツツテホテなど、観光客向けの情報も大きく取り上げ、俵ヶ浦半島の魅力を発信しました。まちづくりの情に興味を持つ人もいるため、まちづくり情報の発信の役割も引き続き残しています。



俵ヶ浦半島のまちづくりの取り組みを発信する季刊紙「俵ヶ浦半島TIMES」を計12号発行。



俵ヶ浦半島の食・暮らし・遊びの情報やこれまでのまちづくりの情報を発信している俵ヶ浦半島ホームページ。(https://tawara99.com)

計画策定まではトレイルマップや俵ヶ浦半島T I M E S など、紙媒体を中心とした情報発信を行ってきました。その後、ツッテホッテのオープンや移住希望者向けの暮らしの情報など、インターネットを通じてより広く俵ヶ浦半島の情報を発信する必要があることから、ホームページを制作。俵ヶ浦半島の情報のプラットフォームとなり、まちづくりの取り組みをアーカイブとして残せる場所としての役割も持たせています。また、口コミによる情報の広がりや日常的な情報更新の容易性、コスト削減のため、SNSも立ち上げ活用しています。

当初の目的だった地域内の認知度も高まり、ホームページやSNSなどの媒体もできたため、合計3年間計12号発行した俵ヶ浦半島T I M E S は一旦終了。発行には予算も必要となるため、今後は地域内への情報は簡易的なかから版を作成して周知を図ります。

### 地域主体の情報発信の難しさ — 情報発信体制の不足 —

情報発信を担う宣伝部を立ち上げ活動してきましたが、発信内容の検討や制作は専門性も必要なことから、主にサ

ポートチームが担い、会議では内容の確認程度でした。辛い多様なプロジェクトの展開により多くのメディアに露出することができ、知名度向上につながることができましたが、地域主体の情報発信体制の構築はできていません。気軽にできるSNSも、ツッテホッテは中里部長が更新していましたが、それ以外の場面で地域住民による情報発信ができません。SNS勉強会などの企画も検討しましたが、何を、どのように、誰に対して発信すべきかと考えることは、ある程度の経験がなければ難しくもあります。地域住民自身が「伝えたいもの」がはっきりしない状況の中で、俵ヶ浦半島の情報を発信し続けることは簡単ではありません。今後は、プロモーションの戦略をきちんと定めて、プロジェクト毎に戦略的に発信する人材・体制の確保と、その仕組みづくりを行い、経験値を積んでいく必要があります。

情報発信には、外部の人材と連携する方法もあります。2019年9月から研修員として着任した五島大督さんが俵ヶ浦半島の農業・漁業の魅力をYouTubeで発信。五島さんは佐世保のまちづくりに取り組む株式会社えびすの社員でもあり、「佐世保ベース」というYouTubeチャンネルを通じて佐世保市の魅力を発信されています。チーム俵としては取材場所やネタの提供を行い、株式会社



フェイスブックやインスタグラムを活用した情報発信。ツッテホッテのInstagramはツッテホッテの中里さんが。俵ヶ浦半島のフェイスブックは地域おこし協力隊の久米川さんが主に投稿。

えびすが自ら発信する連携体制を取ることで地域の負担は少なく情報発信が可能となりました。将来的にはつくも苑跡地に観光公園が完成します。公園を管理する企業との連携による情報発信も提案していく必要があると思います。



俵ヶ浦半島を舞台に、農水産業や暮らしの魅力を動画におさめる五島さん(右)。

新たな化学反応を生み出す、ツッテホット酒場！

— 気軽な意見交換の重要性 —

地域住民と一緒に考え、策定した俵ヶ浦半島未来計画。住民の皆さんにはその後も5つの部活に参加いただいていたが、ツッテホットをはじめ各プロジェクトが具体化していくなかで、メンバーが固定化され、次第に地域住民が参加できる機会が少なくなっていました。俵ヶ浦半島の4町内会長に対してはネットワーキング会議の場で毎月報告をしています。改めて活性化の取り組みや、部長たちの想いを地域住民に伝え、語り合う機会が必要と考え、「俵ヶ浦半島活動報告ミーティング」を開催しました。

2019年6月11日に開催した「俵ヶ浦半島活動報告ミーティング」では、俵ヶ浦半島未来計画の振り返りにはじまり、これまで5部活が取り組んできた内容を報告。特にツッテホットは地域の先輩方が大切に守ってきたふれあい工房を受け継いでオープンした場所です。ツッテホットの売上の状況や地域への貢献度などは具体的に説明を行い

ました。また、現在取り組んでいるプロジェクトについては、チーム俵だけでなく、参加しているお母さん方からも想いを語っていただきました。

報告後の質疑応答では、参加者からも多数の意見が寄せられました。皆が参加していたトレイルコースづくりから始まったまちづくりがここまで発展してきた過程に「良い話を聞いた」と喜んでいただいた一方で、「ツッテホットになってから足を運ぶ機会が少なくなった」という厳しい意見や、トレイルコースに関する地域の困りごとの要望まで、幅広く意見が挙がりました。その中には「ツッテホットで九十九島に沈む夕陽を眺めながら、皆で俵ヶ浦半島のまちづくりについて語り合う会をやろう！」という新しいアイデアも。

ツッテホットがリニューアルオープンして1年半。地域住民と話をする機会をなかなか持ていなかった反省を踏まえ、俵ヶ浦半島のまちづくりに対する想いなどを語り合いながら、飲んで、食べて、楽しく過ごせるイベント「ツッテホット酒場」を計画しました。

事前の企画会議では、20〜30名くらい参加してくれば、と話していましたが、蓋を開けてみると50名もの方が参加。8月11日のお盆シーズンということもあり、帰省中の方やお子さんを連れての参加もありました。また、「木のものづくりプロジェクト」に参加する方は自作のバードコールを持参して、集まった方々にお披露目を。

— 普段、町内会単位で集まることはあるものの、4町の垣根を超えて語り合う機会はあまりありません。家族の近況から俵ヶ浦半島の未来について、それぞれに話が盛り上がりました。活動報告ミーティングでの意見から始まったツッテホット酒場ですが、地域住民の理解を深めるだけでなく、新たな事業アイデアが生まれ、部員の広がりも期待できる場となりました。俵ヶ浦半島を舞台にまちづくりプロジェクトを進めるためには、このような化学反応を生み出す場が必要だと強く感じた1日となりました。



活動報告ミーティングにて、地域住民の前で説明を行う森宗幸彦さん。



地域住民からも様々な意見が。



プロジェクトの話題に花を咲かせる皆さん。



「ツッテホット酒場」には、予想以上の来場があり、次回開催を熱望する声も。

## Interview Vol.3

「レポート」代表・中尾大樹さんが、  
 「まちの灯台 阿久根」代表（鹿児島県阿久根市）・石川秀和さんに聞く、  
 「地域の仲間を巻き込む方法」

俵ヶ浦半島の未来に向けて、住民参加のワークショップなどを経てつくった「俵ヶ浦半島 未来計画」。今回インタビューとなる中尾大樹さんは、佐世保市役所の当時の担当者として、地域住民との関係性を築きながら、この計画づくりに尽力した人物です。その中尾さんがインタビューするのは、京都で古ビルのリノベーション事業などを手がける会社を経営した後、鹿児島県阿久根市に移住し、現在は観光連盟の機能を引き継ぐ形で新設された株式会社「まちの灯台阿久根」の代表を務めている石川秀和さんです。役所の担当者としての役目を終えた後も、一般社団法人REPORT SASEBO（以下、レポート）を立ち上げ、俵ヶ浦半島に継続的に関わっている中尾さんが、石川さんに聞きたいことは？

どんな活動をしているのですか？

Q. 佐世保にある俵ヶ浦半島は、自然豊かな九十九島の海と、米海軍や海上自衛隊が基地を置く佐世保港・軍港としての海に挟まれ、佐世保のアイデンティティが現れているとても面白いエリアです。僕は市役所の職員として、半島の未来計画づくりに関わってきましたが、担当を外れたいまは、新たに立ち上げた法人、レポートのメンバーとともに、俵ヶ

浦半島と佐世保の市街地という2つのエリアを活動のフィールドに据え、地域の魅力を発信していくような活動をしていきたいと考えています。活動を進めていくにあたって、仲間の巻き込み方や活動資金のつくり方という部分が課題になっているので、今日はその辺のお話を伺えればと思っています。まずは石川さんの阿久根での活動についてお聞かせ頂けますか？

石川..僕は現在、阿久根市の観光連盟の役割も兼ねたまちづくり会社「まちの灯台阿久根」の代表を務めています。一方、阿久根に来るまでは京都でリノベーションの仕事をしてきたこともあり、リノベーションや建築を軸にした場づくりの仕事を依頼されることもあります。具体的な例を出すと、まちづくり会社では阿久根の道の駅の改修・運営などを行い、個人の仕事として、阿久根の水産加工会社が運営する施設「イワシビル」のプロデュースなどを手がけています。

Q. 行政が建物を新しくつくったものの、蓋を開けてみたらあまり有効に活用されないというのはよく聞く話ですが、石川さんはリノベーションや場づくりの仕事で大切にしていることを教えてください。

石川..リノベーションで最も大切なのは、何のためにその場所が必要なのか、どんなことを達成したいのかということとを、そこに関わる人たちみんなが共有することなんです。例えば、先ほどご紹介したイワシビルは、阿久根で三代続く干物屋さんが新しくつくった施設なのですが、その背景には、それまであまり若い人たちが働きたいと思っていなかった干物屋を、プライドを持って働けるような仕事



インタビューはイワシビルの中にあるラウンジスペースで行いました。  
 左から石川秀和さん、中尾大樹さん。

に変えたいという3代目の熱い思いがあり、それを叶える手段として1階にカフェとお土産屋、2階に工場、3階にホステルが入った。職場をつくりました。僕はリノベーションというものをコミュニケーションツールのひとつだと考えているのですが、ポイントを間違えてしまうと、伝えたいことが届かないということが起きてしまうと感じています。

Q. コミュニケーションをする相手もかつていた京都と、いまの阿久根ではだいぶ異なるような気がします。



古ビルを改装した「イワシビル」。



1階のカフェとお土産屋さん。

石川：京都の時は、クライアントやパートナーにクリエイティブ業界の人たちが多かったですが、阿久根では1次2次産業の人たちとの関わりが多く、土地の価値をついている人、地域資源を抱えている人の対象が違うというところは感じます。また、京都には観光関連のメディアもたくさんありましたが、阿久根にはそういうメディアはほとんどありません。そうした中で建築の仕事などでは、年数を重ねていくほど価値が高まるもの、芯の強いものをつくるということをこれまで以上に意識するようになりました。それによって東京の雑誌などがわざわざ阿久根まで取材に来てくれたりということが実際に起きていて、自分の仕事の説得力や信頼度が増すことで、地域に応援してくれる人が増えるという側面は少なからずありますね。

どうやって人を巻き込んでいますか？

Q. まちの灯台阿久根では、地元の若い人たちが「ただいま」と帰ってきたくなるまちづくりというミッションを掲げていますが、具体的な未来の目標なども設定しているのですか？

出資してくれている40〜50代の人たちとも共有しているのは、自分たちが中継ぎの世代となり、希望の光をつかっていくために投資をしていくという意識です。現状では、阿久根で新しいアクションが起こり、雇用が増えたというようなモデルケースはまだ少ないので、僕らの役割は、いまの阿久根にない業種をつかって雇用を生んだり、限られた資源の中で新しい商品を開発していくことなどを通して、お手本を示していくことだと思っています。

Q. こうした活動では地域のさまざまな人たちを巻き込んでいくことが必要だと思いますが、そうした部分で意識していることがあれば教えてください。

石川：ソーシャルデザインなどの文脈では、「コミュニティ」というものがポジティブに語られることが多いですが、これまで仕事にしてきた経験から、町おこしという観点においてコミュニティというのはむしろマイナス要因になりやすいと感じています。地域のコミュニティというのは、一緒にいて心地良い「同一者集団」で形成されていることがほとんどで、地域の人たちは自分が所属しているコミュニティをセーフティネットにしています。それは当たり前と言え当たり前前のことなのですが、まちづくりという視点

石川：まず前提として、この会社を新たに立ち上げるにあたって、地域の企業などに株主になってもらうということにこだわったんですね。それによって覚悟を持って関わってくれる人を増やしたいという思いがあったし、僕自身は、自分のことをいつでもクビにしてもらっていいというスタンスで仕事をしています。いま自分が持っているリソースが10年後に通用するとも思っていないし、その頃にはいまと別の課題も出てきている可能性があるから、その時は誰かがこの立場を引き継ぐという前提で、代表をやらせてほしいという話は関わってくれているみなさんにはしています。そして、ご質問の内容に戻ると、僕が代表を務めている間に、未来のまちを担う30代前後の若いキープレイヤーを10人くらいはつくりたいということが具体的な目標です。

Q. そこから先はまた次の世代が担っていくという考え方はですか？

石川：無責任かもしれませんが、そう思っています。若い人たちが地元に戻ってくるといっても、急にUターン者が増えたり、地元での就職率が極端に上がるというのはあまり現実的ではないと思うんですね。その中で、いま会社に

で見ると、こうしたコミュニティは閉鎖性を生みやすいとも言える。僕らのようなまちづくり会社は、世代、性別、信条などの違いを乗り越えて、普段であれば会わない人たちが重なり合う機会をデザインしないとイケないと思っています。それを僕はコモンズデザインという言葉でとらえています。これを会社のメンバー全員に強いると心が壊れてしまう。だから、組織の中にひとりそういうことを担える人がいれば良いと考えています。

### 資金づくりのポイントは何ですか？

Q. これから自分たち「リポート」が活動をしていく上で、地域の仲間を巻き込んでいくことと同時に、活動資金をくくっていくことも大きな課題になっています。資金ゼロからのスタートなので、まずは稼がなければいけないという意識が働き、なかなかその先に進めないという状況なんです。

石川.. スモールスタートで良いと思いますし、いまいるメンバーで先に繋がりそうなことをまずは始めていかないとイケないですよ。そして、そのためには、自分たちの究

市街地での飲食店やゲストハウス事業など稼ぎが出せる事業と、自分たちがやりたいこと、応援したいものに投資していくような事業を分けて考えるというのはアリなのかもしれないですね。特に資金的な準備がまだ整っていない現時点で、いきなり俵ヶ浦半島に拠点などをつくることはリスキーだと思うので、まずは市街地の事業でしっかり稼げるような形をつくっていきけると良い気がします。

Q. 大半が市街化調整区域に指定されている俵ヶ浦半島は、新しい事業を起こしにくいという現状もあります。

石川.. それだけ特徴が異なる2つのエリアが同じ市内にあるというのはある意味とても面白いことですね。だからこそ、お金に対する考え方も完全に変えてしまい、僕の京都時代の会社ではないですが、営利／非営利を明確に分けてしまいうくらいでもいいかもしれない。例えば、俵ヶ浦半島



中尾さんが中心となって運営しているカフェ「RE PORT」。

極の目的とは何か？ ということを改めてメンバーで議論した上で、それを実現するためのミッションとは何か？ そのミッションを実行するためにはどんなプロジェクトをつくると良いのか？ ということを洗い出した方が良いでしょう。その中から、現状の人や資金、ネットワークなどを踏まえて、何から始めるのかということをもメンバー全員で決めていくことが大切なのだと思います。自分自身、いまのまちづくり会社にしても、リノベーションの会社にしても、そのようにスタートしています。

Q. 実は一般社団法人と同じ「RE PORT」という名前のカフェを、僕の妻が主体となって運営していて、今年で4年目を迎えました。今後はこの場所もうまく活用しながら、俵ヶ浦半島というフィールドも視野に入れて、新しいことに取り組んでいきたいと考えています。

石川.. 僕が京都でリノベーションの会社を経営していた時は、古ビルのリノベーションやコンサル事業でお金を稼ぎ、その資金でクリエイター支援という目的のもと、アートギャラリーの運営などをしていたんですね。事業で得た利益を、お金になりにくいものに投資するという企業としては少しおかしな構造だったのですが(笑)、リポートに関しても、

の生産者などを巻き込んで、特産品を販売したり、イベントを開催するような飲食店兼ゲストハウスのようなものを市街地に展開してお金を稼ぎながら、半島を応援するようなことができると思いますし、半島の取り組みについては、うまく助成金なども活用していくというのもひとつの手だと思えます。

### 地域のプレイヤーはどこにいますか？

Q. 僕は市役所の職員として働きながら、一般社団法人の代表も務めています。石川さんのもととは地域おこし協力隊として阿久根に入り、役所で働かれていますよね。現在の行政との関係性はいかがですか？

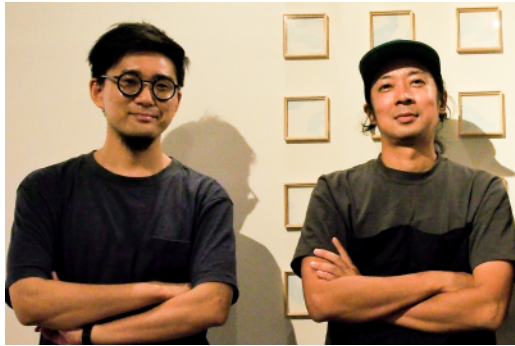
石川.. 阿久根は人口2万人程度の小さな自治体ということもあって行政との距離感は近いですし、役場の若い職員などにはこちらから積極的に声をかけて色々巻き込もうとしていて、例えば、地域おこし協力隊の研修制度を活かした呼びかけやアテンドなどもしています。役場としても、若い職員のモチベーションを高めていくような仕組みづくりをしたいのですが、現状ではまだ上手くできていな

いので、自分としてもお手伝いをしていきたい。先ほどの同一者集団の話と同じで、役場には役場のコミュニティというものが出来上がっているからこそ、彼らが外の世界ともつながれるようなコーディネートをして、インプットの機会を増やしていくということは大切だと思っています。

**Q.** コモンズデザインという話もありましたが、民間から行政まであらゆるところに種をまき、関係性をつくっているのですね。

**石川** 京都の会社の時から僕は、質の高い偶然性を生むために、質の高い計画を練るということを徹底してきました。場づくりの仕事をしていると、ある時突然、自分たちが想定もしていなかったハッピーな出来事が連続的に起こることがあるんですね。そういう体験をしてきたからこそ、いまの仕事をやめられなくなってしまうところがあるんです。そして、そういうことが起こる背景には、徹底した仕込みと積み重ねというものが必ずあって、だからこそどんなに小さなプロジェクトでも妥協をせずに準備をした上で、まちに落とし込んでいくということを大切にしています。その積み重ねによってまちの空気が高まり、質の高い偶然が生まれてくると思っています。そういう意味で自分の仕

まで僕も、自分たちの強み、周りにいる人たちが地域の資源などをしっかり把握した上で、いまだんな役割が足りていないのかということを考え、行動するということを続けてきました。そういう意味でも先ほど話したように、リポーターのメンバーで話し合っただけでそれぞれ夢を書き出し、そこに向けて何をしていくべきかを考えていくことが大切です。しっかりした計画と熱意さえあれば、人やお金も集まってくるのではないかと思います。



## PROFILE

インタビューされた人

**石川秀和** 「株式会社まちの灯台阿久根」代表

千葉県生まれ。京都の家具製作工房や不動産会社を経て 2007 年に建築デザイン事務所「sahou design」、2008 年に株式会社 HLC を設立。2015 年に京都市から阿久根市へ地域おこし協力隊として移住。専門領域はリノベーション、コミュニティデザイン。協力隊任期中は「イワシビル」「阿久根と鎌倉」「PARK-PFI」など、地域資源を活用した地域おこし事業を企画。協力隊退任後、阿久根市観光連盟事務局長に就任。2019 年 4 月に「お帰りなさいをつくる」をコンセプトに同観光連盟を民営化。自主財源運営と若者が働きたくなる雇用作りを目指し日々奮闘中。

インタビューした人

**中尾大樹** 佐世保市役所（企画部文化振興課）主任主事／一般社団法人 REPORT SASEBO 代表理事

大学卒業後、Uターン入庁した市役所で出会った仲間と佐世保を再発見する自主研究活動「REPORT」をスタート。イベント企画、運営等に携わった後、リアルな場づくりの必要性を感じ、2015 年、妻と同名のカフェを立ち上げる。その後も公私それぞれの立場を行き来しつつ、様々なまちづくり活動に参画。2019 年これまでの活動を統合、業種を越えた新たな仲間を迎え、一般社団法人 REPORT SASEBO を設立し、ホテルや観光プログラム開発など目下新プロジェクトの準備中。夢は佐世保市内での海山街の 3 拠点居住。

事は、農業における土づくりに似ているところがあると感じていて、本当に良い野菜を収穫するためにリサーチを重ねたり、コミュニティを醸成したり、地域資源を探したりということの一つひとつ積み重ねていくことを常に意識しています。



石川さんは阿久根で様々なイベントを手掛けている。写真は保育園で開催したワークショップの様子。

**Q.** これまでは飲食店というものが軸になっていたこともあり、活動に巻き込んでいく対象として視界に入っていたのは、お客さんと同じエリアの事業者くらいだった気がします。でも、今日石川さんのお話を伺って、より広い視野で地域にいるプレイヤーたちを見出し、その隠れた課題を掘り下げて、一緒にその解決に取り組んでいくことが大切なのだと感じました。

**石川** まちという舞台の上には目立つプレイヤーからそうではない人までがいて、それぞれの活動や関係を尊重しながら、役割を考えていくことが大事だと思うんです。これ



# 第4章

## これまでの取り組みを 振り返って

俵ヶ浦半島におけるまちづくりの歴史は、1-2でご紹介したように20年ほど前に遡りますが、外部の視点が入り、4町の地域・世代の枠を越えて、新たなまちづくりを始めたのが2013年度のトレイルづくりから。それからちょうど丸7年、幾多の試行錯誤を重ねながら新たな視点・仲間とまちづくりに取り組んできました。そして来年度からは一皮向けて、チーム俵を中心に行政の補助金に頼らない形でのまちづくりの第2章（先輩達が始めた過去の取り組みを含めると第3章）が始まります。

これまでに多くの紙面を割いて俵ヶ浦半島で行われたまちづくりのことを、単なる事実だけを述べた表面的なものではなく、良いところだけを述べた「いいカッコしい」なものでもなく、具体的に良いことも悪いことも、失敗したことも、悩みつつ改善したことも、できるだけオープンにしてまちづくりの物語を紡いできました。

それは、これから俵ヶ浦半島でまちづくりに取り組んでいくのは他ならぬ地域住民であり、どこが良くてどこが悪かったのか、これからまちづくりをする上では何を気をつけなければならないか、これまでの取り組みを改めて評価し、共有することで、まちづくりを進める上での大切なストックにしてもらいたいからです。

また、少子高齢化や人口減少、生業の減少、空き家・空き地問題など、同じ問題を抱えつつもまちづくりに取り組もうとする地域・同志が佐世保市・九州・全国にはたくさんいて、俵ヶ浦半島でまちづくりに取り組んできた成果や反省点、ポイントをきちんと可視化することで、今後まちづくりに取り組む際、地域のお役に立てればとも考えています。

2019年の暮れから年度末にかけて何度も集まっては夜遅くまで議論したチーム俵部長会そしてチーム俵を外部の視点からサポートしてきたサポートチーム会議を通じて、これまでの3年間のプロジェクトの振り返りと来年度以降の事業展開の検討を行いました。ここでの振り返りは、まちづくりを運営する立場から整理したものです。どうぞご了承ください。

## 4-1

### 取り組みの成果と反省点の検証

これまでの取り組みを通じてどんな成果があったのか？

2016年度の未来計画づくり、2017-2019年度の活性化プロジェクトを通して様々な取り組みを行い、俵ヶ浦半島に変化が生まれました。ここでは、具体的にどういった成果が出たのか、まちづくりの運営に関する視点から整理します。

### 成果 1 世代・地域を越えた半島全体でのまちづくりの土壌

トレイルづくりをきっかけにそれぞれの町で連携する動きが生まれ、2016年度の半島ミーティングでは、世代・地域の枠を越えて多くの地域住民に参加いただき、住民総出で俵ヶ浦半島の未来を描くことができました。町内会長を中心とした町内会との連携についてはトレイルづくりの段階から合意形成のプロセスを構築でき、チーム俵と町内会長によるネットワーク会議の連携基盤の構築にもつながりました。地方におけるまちづくりの体制として町内会が中心になることが一般的ですが、長い歴史に裏打ちされた組織であるため、既存の取り組み以外に新たな目的でまちづくりを行うのに大きな理解と労力が必要になります。そういう意味では、最初に世代・地域の枠に捉われずに半島全体としてのまちづくりの理想を描き、その計画やテーマに基づいて新たなまちづくりの土壌を築くことができたのは大きな成果だといえます。

## 成果 2 やりたいことに挑戦するチャレンジ人口の増加

当初は5つの部活からスタートしたチーム俵でしたが、プロジェクトを進める中で都度立ち止まり、話し合いを重ねながら、改善を繰り返してきました。ご当地部では、ツツテホッテの集客・魅力アップを図るために開催した生産者意見交換会をきっかけに、生産者から軽量野菜のニーズが生まれ、専門家との出会いを通じてハーブプロジェクトがスタート。トレイル部では、「取り組みを続けていくための活動資金づくりに伐採木を活用した商品作りができないか」という部員の声をきっかけに木のものづくりプロジェクトがスタート、セミプロレベルの木工好きが集まっています。未来計画が完成した当初は見えませんが、議論を重ねる中でやりたいことがクリアになり、自らのスキルを活用しながら事業に挑戦する。チャレンジ人口が増えてきたことは大きな成果です。やりたいことが見つければ、自ずと行動し、学び、やりがいが生まれます。ご当地部をきっかけに、惣菜やお弁当の販売を手がけるようになったマザーズたわらんだも、大切な地元のチャレンジジャーです。

## 成果 3 俵ヶ浦半島の認知度向上、関係人口づくり

未来計画が完成した当初、俵ヶ浦半島として知名度があつたのは、九十九島の有名眺望スポット「展海峰」や花見で有名な「花の森公園」、夏のシーズンになると地元客やアウトドア好きで賑わう「白浜海水浴場・キャンプ場」で、俵ヶ浦半島という地域名はほとんど知られていませんでした。2017年度からプロジェクトが始まると、住民主体のまちづくりやツツテホッテのオープン、新商品開発、ハーブプロジェクトの挑戦など、話題が次々に生まれて、新

聞や雑誌、ラジオ、SNSなど多くのメディアで紹介されるようになりました。また、東京と佐世保ミートイングや俵ヶ浦半島ツアー&アイデアソン、トークイベントを通じて、俵ヶ浦半島の魅力や挑戦を発信することができ、半島に移住したい、役に立ちたい、事業をしたいと、積極的に俵ヶ浦半島を応援してくれる関係人口づくりにも繋がりました。

## 成果 4 まちづくりの継続に向けた自主財源の芽

チーム俵の部長を中心にまちづくりの協議、実践する中で、当初は継続性に関する意識は低かったですが、補助金がなくなり、外部のサポートチームがいなくなることを意識しました。2018年度からは少しずつ「どうやって続けていくか」の議論が増えるようになりました。

きっかけは、俵ヶ浦半島開発協議会から受け継いだ年2回のウォーキングイベントを補助金に頼らずにどうやって続けていくかの議論から。必要経費を賄うために、イベントを有料化（参加費300円）し、4町町内会の一部から清掃業務を受託することで、資金づくりを始めています。また、ハーブプロジェクトでは生産したハーブを首都圏のレストランに販売したり、木のものづくりプロジェクトでは伐採木で作ったバードコールをウォーキングイベントで売ったり、少しずつですが自主財源の芽が出てきています。

## 成果 5 まちづくりに対する学び、意識の変化

トレイルづくりから未来計画を完成させ、2017年度から活性化プロジェクトが動き出した当時、外部の専門家やサポーター、行政が言いだしっぺで、チーム俵としてどこか「他人事」

という意識が残っていました。それもそのはず、まちづくりの知識や経験がまだ浅い若手にいくら問いかけたところで実感は生まれるはずがありません。ただ、何回も議論を重ね、未来計画を見直し、外部の人に説明したり、メディアから聞かれる経験を繰り返すことで、自分の言葉で「まちづくりを語り出す部長が増えました。また、同じ境遇に置かれた、同じまちづくりに取り組む他事例の実践者との出会いは影響があり、「俵ヶ浦半島ではどうしたらうまくいくだろう」と思考し、新たな挑戦に1歩歩み出す行動の変化にもつながりました。他人事から自分事へ、チーム俵部長とサポーターチーム時には外部の人も交えながら夜遅くまで対話を重ねた大きな成果です。

## これまでの取り組みを通じて何がうまく行かなかったのか？

この冊子では、良いことばかりでなく、うまくいかなかったこともきちんと可視化して次に繋げていきます。たくさん試行錯誤を繰り返して、思ったようにいかなかったことは多々あります。その要因を探っていくと、「マンパワー不足」という人口減少・少子高齢化に悩む地域ならどこにでも生じる問題に帰結してしまいます。俵ヶ浦半島でもその問題に直面し、あらゆる手立てを打ってきました。ここでは、「マンパワー不足」を見誤った上で気づいた取り組みの反省点について正直に整理したいと思います。

### 反省 1 未来計画のオーバーフロー

未来計画づくりにあたっては、地元のニーズを吸い上げることが大切にして、徹底的なヒア

リング調査と半島ミーティングにおける地元の想いの可視化に注力しました。その結果、地域住民の関心度に合わせてプロジェクトのテーマを5つ（5部活）設定し、それぞれの部活毎に事業計画を話し合い、2017年度からの活性化プロジェクトをスタートさせました。その結果として、実施する（すべき）事業の数・ボリュームが膨らみすぎ、完全なるマンパワー不足に陥ってしまったのは大きな反省点です。計画づくりをサポートしたのは主に外部の専門家や事業者ということもあり、多少なりとも「外部の目線が入った理想的・詰め込みすぎた計画」になってしまい、地域住民にとってはオーバーフローになってしまいました。もう少し計画に入る前から地域のことをリサーチして、身の丈にあった計画づくりをしていくことが重要であると気づきました。

### 反省 2 若手・プレイヤー不足の中での見切り発車

未来計画づくりを進める中で、「誰が計画を実行するのか」というプレイヤー探しに奔走しました。特にこれからのまちづくりを実践するためには若手の力が必要だと考え、消防団へのヒアリングや仲良くなった若手を介して芋づる式で紹介してもらい、半島ミーティングに参加してもらい、チーム俵の部長となる若手人材はなんとか確保することができました。ただこの時点で、計画の実行部隊はほとんど見えておらず、意識を持ってアクションを起こす人が見えないままにプロジェクトを見切り発車。その結果としてプロジェクトの参加者が減ってしまったり、一方で木工のスキルを持った男性が途中から出てきたことで木のものが活発化したり、地元人材のスキルを十分に把握できていなかったことで、プロジェクトが二転三転するという事態になってしまいました。地元プレイヤーの有無とスキルを十分に見極めてからプロジェクトを始めることの重要性を痛感しました。

### 反省 3 地域住民の理解を生む、わかりやすさの不足

反省①に述べたように、未来計画のプロジェクトのポリユームが膨らみすぎた、専門的になりすぎたことで、地域住民にまちづくりの理解を促すことができなかつたのは大きな反省です。イラストで描いた半島未来マップは地域住民への理解・関心を促すツールとして作成しましたが、良くも悪くもフワツとしたイメージになってしまいました。反面、「ヒトがオモテ」というまちづくりのスローガンやロゴ、それらを記したTシャツは地域住民にもとても好評で、「まちづくりの一体感」を作り出す賑やかしとしては、わかりやすいものでした。半島TIMESを使って地元で情報発信を行い、まちづくりに対する理解の促進、仲間づくりに努めました。シンブルでわかりやすい、具体的な形がないとなかなか伝わりづらいこともよくわかりました。この地域住民の理解不足がプロジェクトにおける地域連携にも影響してきますので、この「わかりやすさ」はとても重要です。

### 反省 4 1丁目1番地、ツツテホッテへの共通認識の不足

反省③で整理したように、まちづくりへの理解促進のために、目に見えるわかりやすさが必要だとするならば、半島キッチンツツテホッテは最も地域住民の関心があり、わかりやすさの象徴とも言えるプロジェクトです。「せっかく15万人の観光客が来ているのにお金を落としてもらえないのはもったいない」と始まったこのプロジェクトでは、お金を落として地域経済を生み出す場所or地元が寄りやすい場所のどちらか？、地元or日本人観光客or外国観光客のどちらがターゲットか？、といった具体的な店舗づくりの方向性に関する共通認識

が共有されないままにスタートしてしまい、結果として売り上げは2倍程度アップしたものの、地元の集客が落ち込んだり、出品する地元農産物が減つたりと、思いがまともでないままに今に至っている現状です。リーディングプロジェクトの実行にあたっては、きちんと共通認識が持てるまで議論し、地域が一丸となって動ける環境を整えることが重要です。

### 反省 5 自ら思考して失敗を許容する環境の不足

「まちづくりは失敗から始まる」宮崎県高千穂町で長年まちづくりを実践してきた飯干淳志さんはチーム隊長とのインタビュー対談でそうお話ししていました。俵ヶ浦半島のまちづくりを振り返ると、トレイルづくりや未来計画、活性化プロジェクトを最初に仕掛けたのは外部の専門家や行政であり、まちづくりのエンジンとなるチーム俵も、佐世保市や集落支援員や地域おこし協力隊がいないと回らない、お任せ体制が続いていました。補助金が切れる最終年度の2019年度には、補助金・サポートチームがないことを想定して、なるだけチーム俵独自で会議やプロジェクトを運営する体制に切り替えてきました。夜遅くまで議論する中で1歩ずつ前進していますが、課題が先送りされたり、地域で実現するためのルール・仕組みが不足していたりと、自立して運営するためにはまだまだ課題は山積しています。計画づくりの早い段階から地域の自立化を見据えて、自ら試行して行動に移し、失敗から学んで成長する息の長いまちづくりのモデルを意識しておくことが重要です。

現在、地方創生が1つの社会現象となり、地方創生に関するノウハウを提供する書籍やメディアが世の中に多数登場しています。ここで整理する「まちづくりに向けたポイント」は、あくまでも俵ヶ浦半島という「現場レベル」で培ったまちづくりの試行錯誤を通じて得られた成果や反省点を踏まえて、「今後まちづくりに取り組むならここを意識して取り組んだ方が良い」という気づきや視点をまとめたものです。紙面の関係上全てを書く事はできませんが、これからまちづくりを続ける、始める上でのヒントになればという想いで記録します。

### ポイント 1 計画から実行を見極めるスモールスタートを。

特定の地域を対象にまちづくり計画を作る際、一般的には行政が発注者となって、専門家やコンサルタント会社に発注して計画を作るケースがほとんどです（俵ヶ浦半島の未来計画づくりもそうです）。俵ヶ浦半島での反省を生かすとすると、計画が大風呂敷になって絵に描いた餅にならないよう、地域の人材やスキルを十分にリサーチをした上で、地域のリーディングプロジェクトとなるものを見つけて、まずは小さく初めて見る事が重要ではないかと考えます。プレイヤー不足に陥らない段階でプロジェクトに参加する余裕が生まれ、目標や方向性をしっかり話し合い、自分なりのやりがいを見つけ、参加しやすいネタを発掘していくことが、仲間を伴ってまちづくりを無理なく続けられるポイントです。また、計画は作って終わりではなく、

具体的なプロジェクトを続けながら都度改善・ブラッシュアップしていくことも大切です。

### ポイント 2 プレイヤー不足を解消する事業推進体制を。

地域でまちづくりを実践する上で最も大きな課題ともいえる「プレイヤーの不足」。これは全国各地の過疎化に悩む地域にはどこにも共通する悩みであり、今後人口減少・少子高齢化に歯止めがかからない状況では、地元のプレイヤー不足はますます深刻になっていくでしょう。そこで、外部の人材・ネットワークを積極的に活用することが重要です。地元で作った計画であれば地元の人材でやっていくべきだというのが理想ではありますが、最適な人材が地元で見当たらないのであれば、スタートアップにおいてはスキル・ノウハウを持った外部人材の力を借りてまずは実現してみることも考えられます。地元がやりたいことを外部の力を借りて実現してみることで「わかりやすい」成果が生まれ、地元にとっても「やってみたい」機運が生まれます。そのスキルやノウハウが地元で蓄積されれば、地元の人材の活用も可能な段階に移ります。外部の人材・専門家と連携するにあたっては、まず地元がやりたいことや最終的なゴールを明確にし、同じ目線に立ってカタチを作っていくことができる人選が必要になるでしょう。

### ポイント 3 思考し、学び、覚悟するタイミングを。

地域が自立してまちづくりを続けていくためには、補助金が切れて資金づくりから行うタイミングが本当の意味でのスタートになります。そのためには、地元のまちづくりのリーダーやプレイヤーが、試行錯誤を繰り返し、失敗から学び、改善に繋げていく「思考して学ぶ」姿勢

が必要になります。ただ、まちづくりの実績が浅い地域だと、何を学ぶかの具体がまだ見えていないので、なかなか気づきは生まれません。そういう意味ではポイント①に挙げたように、まずは地域でやってみたいという具体的なプロジェクトを実践してみて、その変化を肌で感じる事が大切です。自ら動いて気づきが生まれると、どうやら改善できるかというアンテナが張り巡り、情報を吸収して学ぶことができるようになります（チーム俵の部長もそうでした）。あとは、まちづくりを持続的に続けられるための仕組みづくり、場合によっては身銭を切って取り組む覚悟が備われば、まちづくりはきつと好転していくでしょう。

#### ポイント 4 地元・外部に開かれたタッチポイントを。

素敵なまちづくりの事例には、参加している人が楽しそう、新たに参加したい人達に対してオープンな雰囲気があることが共通しているように思います。今回の俵ヶ浦半島のまちづくりの反省点にもあったように、いかにまちづくりの門戸を広げて、プレイヤー不足を解消するための「開かれたタッチポイント」を作っていくかが大切です。地元のまちづくりへの理解を促し、プロジェクトに参加する仲間を増やすためには、まちづくりを通して地域が変わることの「わかりやすさ」がとても重要です。また、地域の情報を発信してくれたり、地域に定期的に訪れて消費してくれたり、まちづくりに協力してくれるような「関係人口」を広げていくためには、「なんか楽しそう」と思わせる面白さやワクワク感、地域との距離感が大切になってくるでしょう。そういう意味で象徴的な場所があるのは有効的で、チーム俵の山口部長が現在進行している空き家を活用したプロジェクトは、地元にとっては嬉しい・交流の場になり、関係

人口にとっては半島の情報をキャッチして滞在する拠点にもなり得る可能性を秘めています。

#### ポイント 5 プロジェクトを運営する事務局機能を。

人口減少・少子高齢化が進んでいるとはいえ、地方にはスキルを持った人材がたくさんいます。俵ヶ浦半島でも、農業はできる、釣りはできる、天気や自然に詳しい、料理が上手、怪我しても自然に治せる、生きる力を持ったセミプロにたくさん出会ったことがありました。でも一方で、決定的に不足しているスキル人材が、プロジェクトの進捗管理をしたり、関係者に連絡調整したり、会議資料や議事録を作るといったまちづくりを円滑に回すための「事務局人材」です。地元人材で専任者・適任者を見つけたまちはなかなか至難の技。俵ヶ浦半島でも、プロジェクト毎にLINEグループを作って連絡の負担を減らしたり、サポートチームの手を借りてイベントの運営方法をマニュアル化し次回以降は地元でできる体制を整えたり、事務作業のSRM化や補助やサポートがあるうちに継続できる仕組みを導入して工夫を凝らしています。自主事業で生まれた収益を外部に委託して事務局経費に充てるのも1つの方法です。その地域ならではの事務局運営のあり方を構築していくことが求められます。

## Interview Vol.4

「高千穂ムラたび」代表・飯干淳志さんが、  
 「チーム俵」部長たちに問う、「半島の未来に必要なこと」

官民連携で取り組んできた俵ヶ浦半島の活性化プロジェクトでは、住民参加型のワークショップなどを経て策定された半島未来計画のもと、一般社団法人チーム俵のメンバーが中心となり、さまざまな取り組みを続けてきました。「半島Meets」の最終回となる今回は、以前にチーム俵が視察に訪れたこともある宮崎県高千穂町の限界集落「秋元」を拠点に、「民宿まろうど」「まろうど酒造」「ムラたび農園」の3つの事業を軸にコミュニティビジネスに携わる「高千穂ムラたび」代表・飯干淳志さんをインタビューに迎え、これまでの活動を振り返り、改めて半島の未来について考えるために、チーム俵の4名の部長、山口昭正さん、森宗幸彦さん、中里竜也さん、山田信一郎さんが集まりました。

これまでの活動はいかがでしたか？

Q. 俵ヶ浦半島では2016年に半島未来計画を策定し、その実行組織として「チーム俵」が立ち上げられたと聞いています。計画というのは実行に移す過程でうまくいかなかったこともたくさん出てきますし、その中で色々な気付きもあつたかと思いますが、まずはそれぞれがこれまでの活動を振り返って感じていることを聞かせてもらえますか？

山口：僕はチーム俵「トレイル部」の部長として、トレイルコースの整備のために県道の草刈りをしたり、ウォーキングイベントの企画・運営、展海峰にある売店「ツツテホッテ」の眺望を確保するための木の伐採などの活動に取り組んできましたが、地域のみなさんに協力してもらうことの難しさを感じました。中には大変な作業もあつたのですが、なるべく地域の方たちに悪いイメージを与えずに参加を呼びかけることを心がけてきました。

中里：僕は2018年にオープンした「ツツテホッテ」の店長をしてきましたが、「ご当地部」の部長というチーム俵での役割以上に、ひとりの経営者としていかに利益を上げることかというのをずっと考えていて、いまでもその難しさに直面している最中です。ただ儲ければ良いという話ではなく、ちゃんと雇用をつくって地域に貢献しなければ本末転倒になってしまうのですが、他の人に負担をかけるのであれば自分で全部やってしまった方がいいと考えていたところがあり、いま振り返ると悪循環になっていたのかなと感じています。

森宗：学校部では、2016年と2017年に野崎中、俵浦小、庵浦小という3つの小中学校が閉校したことを受け、これらの利活用が大きなテーマになっていました。地域のフラッグシップである学校がなくなってしまう中、子どもたちと地域の接点をいかにするかを考え、廃校になった体育館を開放し、地域の方たちに子どもたちの勉強や遊びを見てもらう「放課後子ども教室」などを実施してきました。ただ、廃校というのは一校丸ごと活用するのが色々大変で、個人事業の規模ではほぼ不可能だと感じています。かといって、建物というのは人の手が入らなくなるとすぐに朽ちてしまいます。すでに建物自体が限界に近づいていて、



右奥が今回インタビュアーを務めてくれた「高千穂ムラたび」代表の飯干淳志さん。

かなり厳しい状況に追い込まれている施設もあります。

**山田**…私は、空き家を活用した移住・定住・起業支援に取り組む「住まい部」の部長を務めてきましたが、俵ヶ浦半島はすべての地域が市街化調整区域に指定され、空き家活用における規制も多いため、まだ思うような成果は生まれていません。また、私はお寺の副住職として宗教法人の運営に十数年携わってきたのですが、「坊主丸儲け」などと揶揄されるようなお寺のイメージとはかけ離れた法的手続きや資料作成、経費管理など煩雑な作業を通して、法人運営の大変さを身を持って感じてきました。そうした経験があったので、形は違えど2018年にチーム俵を法人化する際には不安がありましたし、実際にクリアしなければいけないハードルがたくさんあるといまも感じています。

### 各部の連携はできていますか？

**Q**・チーム俵の各部の連携についてはいかがですか？

**森宗**…トレイル部がトレイルコースに休憩スポットをつくるためにベンチづくりをしたのですが、その時に廃校の工

作室を開放するなどの連携はこれまでもありました。

**Q**・この地域には以前から木工の文化はあるのですか？

**森宗**…竹の文化はありますが、木工に関してはないと思います。

**Q**・地域で何かをする時には、もともとある文化や資源を生かしていくことが大切です。そういう意味では、廃校活用にしても海産物の養殖などは良いかもしれません。廃校活用の事例として、体育館などを使った養殖は結構ありますし、仮に漁業権がなくても、海水を学校に引き込み、養殖ができる環境をつくれれば誰にも文句も言われなはずですよ。そうしてつくった海産物をツツテホットテなどで提供することなどができれば、連携も強まるのではないのでしょうか。

**山田**…チーム俵では、ツツテホットテという場所を事業計画の中枢に据えているので、トレイル部の取り組みにしても、トレイルに来てくれた人たちにいかにツツテホットテの存在を伝え、お店の売上につなげていけるのかということを考え、イベントなども企画してきました。ツツテホットテは直

売所機能もあり、半島で農業を営んでいる人が商品を納められるので、ここに多くの人に来てお金を落としてくれることは地域への貢献にもつながると思っています。

**中里**…ツツテホットテをオープンするまでは各部が独立して活動している感じがあったのですが、お店ができてからは連携が増え、やっと繋がり始めた感覚があります。一方で、各部それぞれが収益を生む事業をするべきではないかという考えも自分の中にはあります。みんながツツテホットテにつなげてくれるのはありがたいですが、この場所を情報発信基地として活用してもらい、それこそトレイル部のウォーキングイベントなども単体で収益が上がる事業にしているのがベストだと思っています。

**Q**・イベントは労力も非常にかかるものですよ。山口さんは、もし仮にウォーキングイベントをあと10年続けてくれと言われたらどうですか？

**山田**…正直荷は重いですね(笑)。これまでのイベントについても運営面に労力が割かれてしまい、来てくれるお客さんを楽しませるところまでできていないと感じています。それなら、運営は外部の事業者に委託してしまい、

僕たち地元の間は来場者を楽しませる役割に専念した方がいいのではないかという気もしています。

**Q**・イベントをきっかけにファンをつくるというのは地域づくりの初期段階では大切なことですが、継続はなかなか大変です。理想は、イベントを開催しなくても多くの人がウォーキングに訪れてくれることで、そうした状況をつくっていくことが次のステップだと思いますし、今後はSNSなどを活用して地域の魅力を発信していくということも必要になってくるはずですよ。



どうすれば人が来てくれると思いますか？

Q. 地域の魅力を発信していく上では、誰に何を伝えるのかということも重要です。例えば、半島のトレイルコースをより多くの人に歩いてもらうためには、どんな人たちに訴求していくべきだと思いますか？

森宗.. 定年退職をしたばかりの人とかですかね。時間にも余裕があるのでしょうし、健康への意識も高いはずなので、ウォーキングをしたいという人は多いはずですよ。

Q. 間違っってはいいませんが、先ほどあった「収益化」につながるような「歩く人」を探すべきです。人を呼び込むという時に、佐世保をはじめ近郊の人たちをイメージしがちかもしれませんが、外に目を向けてみると、ヨーロッパの人たちなどは良いターゲットだと思います。彼らはあまり知られていないような場所に行くことを好みますし、ヨーロッパでは1日に3時間以上歩きたいと思っている人がおよそ3割もいるというデータもあります。また、ヨーロッパの人たちはあちこちへ移動する日本人とは違い、ひとつの拠点にとどまり、料理などをしながら滞在を楽しむ旅行スタイルが主流です。そういう人たちがここに来れば当然

飯干さんのところに視察に伺ったことが大きなヒントになっています。宿泊して食事してもらおうことができれば、こちらでも農作物や生産者のことなどを伝えられるし、こうしたやり方が俵ヶ浦半島には向いているのかなと。

Q. 移住者の受け入れというゴールがあるなら、その前のステップとしていま山口さんが取り組んでいることにみんなが追随すればいいと思います。ツッテホッテや農泊など自分たちの軸になるものを発展させることで、チーム俵以外の地域の人たちとの協調性も生まれてくれれば、動きはさらに加速するはずですよ。そうした良い循環をつくっていくことで地域社会全体が豊かになるはずですし、この地域が好きになり、移住しようと思う人もでてくるかもしれません。

これから先どうしていきますか？

Q. 俵ヶ浦半島は美味しいお魚が獲れるにもかかわらず、それを食べられる場所がほとんどありませんよね。例えば、漁師さんに協力してもらい、この辺で獲れる魚で炙り揚げをつくってツッテホッテで提供したら、それが名物になる

さまざまな消費行動が起こるわけで、それこそ宿泊体験のようなことができたら絶対に彼らは喜ぶはずですよ。こういうことを考えていくことがマーケティングであり、そこで大切になるのは、同じ文化の中で暮らしてきた人たち同士で顔突き合わせるだけではなく、外に目を向けていくことだと思います。

山田.. 半島未来計画の策定にあたって私たちは、「知ってもらう」「来てもらう」「滞在してもらう」「住んでもらう」という4つのステップを考えました。ただ、イベントなどで「来てもらう」ことまではできて、その先の「滞在してもらう」ための場がなかなか用意できていませんでした。何かを踏み出さないといけないと思っていたのですが、ここにきて山口くんが農泊ができる場所づくりに動き始めてくれます。移住・定住までの道はなかなか険しいと思いますが、まずは次のステップに進んでいきたいですね。

山口.. 半島でも耕作放棄地が増えているのですが、日本全体の人口が減っている中で、いままでと同じように仕事に取り組んでいくことは難しいだろうし、いかに農業に付加価値をつけていけるかがカギだと思います。そのひとつのやり方が農泊だと思っているのですが、これは以前にかもしれないし、漁師さんにとっても直接お客さんの反応が見られる貴重な機会になるかもしれない。そうしたことを色々試していく中で事業にもっと幅が出てくるのだと思います。

中里.. 色々アイデアがあったとしても、それを実行するために資金が必要で、そこが僕らの足かせになっているところがあります。ツッテホッテも経営が決して順調ではない中で、新しいチャレンジをするのはなかなかハードルが高いというのが正直なところですよ。

森宗.. 色々なところに視察に行く度に凄いなと思うけど、自分たちの生活もある中で、はたして借金してまでそれをやるのかと言われると、なかなか難しいところがあるよね。

Q. 大がかりな取り組みを見ると腰が引けてしまうかもしれませんが、中には工夫してコストをかけずにやっている人たちもいます。いきなり一発当てようとするのではなく、一つひとつ積み上げて、徐々に資金力を蓄えていくという考え方が大切です。

中里.. いま言われたような炙り揚げが人気商品になるよう

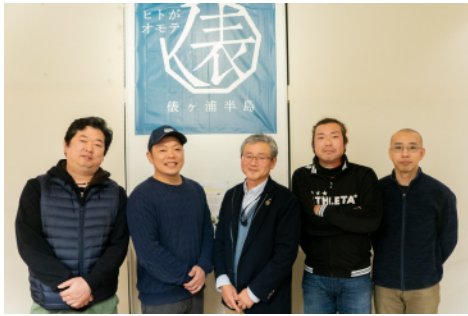
なこともあり得るとは思いまずし、実際に漁師などのツテもあるのですが、石橋を叩いても渡れないような状況の中で行動する勇気というものが欲しいんです（笑）。

Q・魚なんて売れるかわからないと想像だけで話していても何も変わりません。成功している事業というのはたくさん失敗の上に築かれているもので、失敗が当たり前くらいの気持ちを持つことが勇気につながるはずですよ。一度やってみた経験というのは成功、失敗に関わらず必ず実になりますし、人の力に頼らず、まずはやってみることに価値があるんです。

中里・飯干さんは近所の人たちが育てたお米を買い取ってつくったどぶろくや甘酒を全国に展開していますが、始めにあたって勝算はあったのですか？

Q・勝算があったというよりは、お客さんのニーズに合うものをつくっていったというのが正しいと思います。何かをしようと思った時にいきなり市場で売るのはなく、まずはテストをして色々な意見を聞くというのが事業の鉄則ですし、自分の思いだけで形にしたものは商品にはなりません。また、最初から村人の米を買い取っていたわけでは

それをやるのかということが自分の中で明確になっていないと、結局つらいだけになってしまふんですね。チーム俵にしても、何のためにこの組織をつくったのかということとを改めて見つめ直してみる必要があると思うし、それが明確になれば、目的に到達するために何が必要なのか、みんなアイデアを出し合うことができますよね。小さなことからでもまずはそれをやってみることで学べるのがたくさんあるはずだし、それを積み重ねていくことが地域への貢献になり、次世代にもつながっていくのだと思います。



なく、自分の田んぼ2〜3反からスタートし、販売量が増えていく中で隣の田んぼのお米を買い、それが村全体に広がっていったんです。繰り返しながら少しずつ積み上げていくことが何よりも大切なんです。

山口・まずはひとつずつ動いてみるということなんです。そこで良い結果が得られれば、周囲に自分もやってみようという人が出てくるかもしれない。

中里・飯干さんを行動に掻き立てるモチベーションは何なのですか？

Q・次の時代の農村社会をつくるために何ができるのかということ。地域づくりなどもそうですが、何のために



飯干さんが代表を務める「高千穂ムラたび」の酒造で手掛ける主力商品「ちほまる」。甘酒を乳酸発酵させている。

## PROFILE

インタビューされた人

チーム俵

俵ヶ浦半島未来計画を実行に移していくため、2017年4月に半島のまちづくり組織として発足した「チーム俵」。2018年4月には法人化し、「ご当地部」「トレイル部」「学校部」「住まい部」「宣伝部」5つの部活（プロジェクトチーム）をスタート。半島に暮らす山口昭正さん、森宗幸彦さん、中里竜也さん、山田信一郎さんらが理事として各部の部長を務める。2017年から3年間は佐世保市による重点支援期間であり、市や地域外の専門家チームがサポートしていたが、今後は部長たち自らが活動をリードしていく予定。

インタビューした人

飯干淳志（「高千穂ムラたび」代表）

54歳で高千穂町役場を早期退職し、「持続可能な村づくり」に取り組む。宮崎県高千穂町の40世帯、人口100人の秋元集落で、UIターンの若者たちと共に民宿やドブコづくり、花卉や夏イチゴの栽培、イチゴやお茶の加工品製造販売などを営む。高千穂町観光協会と連携して高千穂ムラたび活性化協議会を運営。スピリチュアルや大自然、伝統文化などを組み合わせながら農村に新たな価値を創造するビジネスを手掛けている。



# 第5章

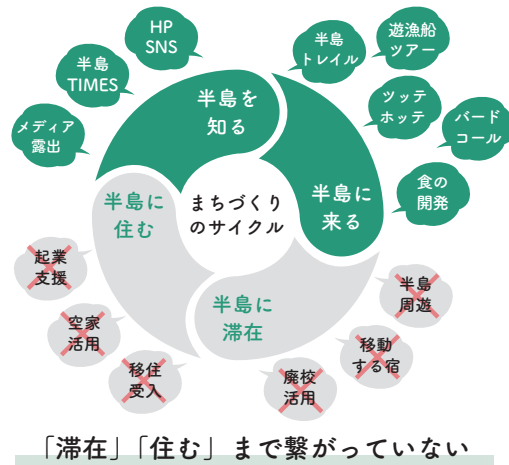
## 俵ヶ浦半島活性化を実現する今後の展開



## 今後の活性化へのアプローチ

これまでに整理してきたように、俵ヶ浦半島トレイルコースづくりをきっかけに、俵ヶ浦半島の未来の姿を共有する「俵ヶ浦半島未来計画」の作成、そして未来計画に沿った3年間の重点的な活性化プロジェクトを行ってきました。その結果として地域の中で様々な変化が生まれ、4章で述べたように成果、課題、地域づくりのポイントが見えるようになりました。チーム俵を中心としたまちづくりに対する意識の変化・組織の構築、プロジェクトを通じた半島住民によるチャレンジ人口の増加、取り組みの「見える化」による半島の認知度の向上、関係人口づくりを通じて、「半島を知る」「半島に来る」ところまではチャレンジが実を結びました。しかし、チーム俵の自立化を実現する稼ぐための仕組みや財源はまだまだに不足しており、半島のスキルややる気を来訪者に提供する機会はいまだにできていない状況で、「半島に滞在する」「半島に住む」ところまで繋がっていません。

そこで、来年度は次のページに示す3つのアプローチに沿って、芽が出ている半島のスキル・やる気を「地域の稼ぐ化」へと昇華するための「見える化」を行います。



「滞在」「住む」まで繋がっていない

2020年度のアプローチ



九十九島観光公園との連携も視野に、芽が出ている半島のスキル・やる気を「地域の稼ぐ化」へと昇華するための「見える化」を行います。

### 1 チーム俵の持続化を担保する財源確保

地域の稼ぐ化及び交流・定住人口の拡大を目指すチーム俵の役割を明確化した上で、持続可能なまちづくりの財源を確保し、将来的に安定的なまちづくりの基盤を構築します。

### 2 半島住民が活躍するための場づくり

これまでの俵ヶ浦半島活性化の取り組みの中で芽が出たプロジェクトを活用しながら、俵ヶ浦半島観光のゲートウェイとして整備が進められている「九十九島観光公園」などでの活躍も念頭に、半島住民のスキル・やる気を具現化します。

### 3 サイクルを繋ぐ「滞在機能」の強化

課題に挙げられた「半島に滞在する」ための機能を強化するため、現在半島内で進められている空き家を活用した移住体験施設の整備、半島における滞在プログラムの運用、移住サポートプラザや観光公園との連携を図りながら、滞在コンテンツづくりを加速化します。

## 体験型観光事業の展開イメージ

2017年度から2019年度までに実施した活性化プロジェクトは、半島内の地域資源・地域住民のスキルを活用した新たなまちづくりへの挑戦でした。それぞれのプロジェクトの芽は出たものの、仕組みや販売体制の構築をはじめとして、どう持続させるかが共通の課題になっていました。

「挑戦」から「継続」へ、「来る」から「滞在する」へ。2020年度では、プロジェクトの芽をきちんと生かし、来訪者に提供して「半島に滞在できる」環境を作り出し、収益を生み出して「安定的・継続的な事業を可能にする」地域ビジネスの仕組みの構築を目指します。そのため、半島ならではの素材（自然環境や景観、食資源や半農半漁の暮らしの文化）を体験するプログラムの造成や観光モニターツアーを実施する計画です。

具体的には、以下の取り組みを予定しています。

- ・遊漁船や釣り体験、農業収穫体験など、半島体験プログラムの造成
- ・半島ハーブや伐採木を活用した商品、季節のおこわなど、俵ヶ浦半島ブランド商品の開発、販売の仕組みづくり
- ・発展的にウオーキングイベントを継続できるための仕組みづくり
- ・半島体験プログラムを活用した俵ヶ浦半島観光モニターツアーの企画・実施
- ・俵ヶ浦半島の自然環境や体験コンテンツを最大限に活用したアウトドアイベントの開催

この体験型観光商品を造成し、来訪者に販売できる体制を構築することで、2021年度以降にはチーム俵を中心にまちづくり活動を続けていけるための自主財源を作り出し、将来的には安定収益化による自立的運営を目指します。

まちづくりが形になるためには、20年、30年がかかると言われます。未来計画に沿った俵ヶ浦半島のまちづくりはまだ始まったばかりで、これからが本当の意味でのまちづくりのスタート。これからもたくさん悩み、立ち止まり、議論したり、失敗したり、一喜一憂することでしょう。でもその試行錯誤の連続がまちづくりに血を通わせ、人として成長し、次の世代へと受け継がれていくのです。どうかこれからも俵ヶ浦半島のまちづくりを応援してください。



倭ヶ浦半島

— 小さな半島で始まったまちづくりの試行錯誤の軌跡 —

## 佐世保市倭ヶ浦半島 まちづくり挑戦物語

---

2020年3月31日 発行

発行 一般社団法人 チーム倭 (<https://tawara99.com>)

企画編集 倭ヶ浦半島活性化プロジェクト サポートチーム

佐世保市 企画部 政策経営課 吉永正人・嘉福洋平・川口卓也

集落支援員 富田柚香子

地域おこし協力隊 久米川泰伸

株式会社 ルーツ・アンド・パートナーズ 佐藤直之・宮崎 大

一般社団法人 REPORT SASEBO 中尾大樹

制作 株式会社 ルーツ・アンド・パートナーズ

印刷・製本 株式会社 トータルプルーフ

---